宮城県岩沼市文化財調査報告書第10集

西須賀原遺跡

－玉浦中部地区経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書－

2011年3月

岩沼市教育委員会

西 須 賀 原 遺 跡

－発掘調査報告書－

例　言

1．本書は宮城県岩沼市早股字西須賀原地内に所在する「西須賀原遺跡」発掘調査報告書である。
2．本発掘調査は、玉浦中部地区経営体育成基盤整備事業に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3．発掘調査は2010(平成22)年6月14日から10月31日にかけて実施し、仙台地方振興事務所の委託を受けた岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積はA区3,500㎡、B区118㎡の計3,618㎡である。
4．出土品整理及び報告書作成については、2010年11月1日から2011年2月28日まで、岩沼市文化財展示室にて行なった。
5．本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

SB；掘立柱建物跡　SD；溝跡　SE；井戸跡　SK；土坑　SA；小柱穴群
SM；小溝状遺構　SG；近世墓壙　SX；ため池状遺構及び性格不明遺構

6．本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・熊谷篤が担当した。各執筆分担は以下のとおりである。

川又・・・第Ⅱ章、第Ⅲ章２、第Ⅳ章２、第Ⅴ章
熊谷・・・第Ⅰ章、第Ⅲ章１、第Ⅳ章１、第Ⅴ章

7．B区で検出した近世墓壙出土人骨の鑑定については、東北大学大学院歯学研究科口腔器官構造学分野の鈴木敏彦氏に依頼し、鑑定結果について玉稿を賜った。
8．本書に掲載した写真は、遺構・遺物とも川又、熊谷が撮影した。
9．発掘調査及び資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）

安達訓仁（栗原市教育委員会）　熊谷満（鎌倉考古学研究所）
斎木秀雄（鎌倉考古学研究所）　鈴木敏彦（東北大学大学院歯学研究科）
水野沙織（仙台市博物館）　吉井宏（東北福祉大学）
米村洋央（東北芸術工科大学）　渡部紀（仙台市教育委員会）
阿部俊雄　長谷正男
宮城県教育庁文化財保護課　仙台地方振興事務所　名取土地改良区　株式会社森商事

10．本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。
（1）　遺構実測図の水糸高は海抜を示す。
（2）　縮尺は図に示すとおりである。
（3）　遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
（4）　土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」（小川・竹原：1973）に拠った。

目　次

第Ⅰ章　遺跡の概観
　1．位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　2．周辺の遺跡と歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅱ章　調査の概要
　1．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　2．調査経過と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　3．基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第Ⅲ章　発見された遺構と遺物
　1．A区
　　a．掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　b．溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　　c．井戸跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　　d．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　　e．小柱穴群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　　f．小溝状遺構群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　　g．性格不明遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
　　h．遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
　2．B区
　　a．近世墓壙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
　　b．土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
第Ⅳ章　考察
　1．A区
　　遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
　　遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71
　　遺構と遺物から見る特色・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
　2．B区
　　墓壙の形状と新旧関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
　　各墓壙の年代観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
　　副葬品の特色と被葬者の階層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
第Ⅴ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
付編　西須賀原遺跡出土人骨について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81

挿図目次

第1図　岩沼市の位置と地形分類・・・・・・・・・・・1
第2図　岩沼市内遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・3
第3図　調査地点と調査区配置図・・・・・・・・・・・7
第4図　確認調査時出土遺物・・・・・・・・・・・・・8
第5図　A区グリット配置図・・・・・・・・・・・・・9
第6図　B区グリット配置図・・・・・・・・・・・・・10
第7図　A区遺構全体図・・・・・・・・・・・・・・・12
第8図　ＳＢ０１掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・14
第9図　ＳＢ０２掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・15
第１０図　ＳＢ０３掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・16
第１１図　ＳＢ０４掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・17
第１２図　掘立柱建物跡出土遺物・・・・・・・・・・・18
第１３図　ＳＢ０５掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・19
第１４図　ＳＢ０６掘立柱建物跡・1・・・・・・・・・20
第１５図　ＳＢ０６掘立柱建物跡・2・・・・・・・・・21
第１６図　ＳＢ０７掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・22
第１７図　ＳＢ０８掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・23
第１８図　ＳＢ０９掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・24
第１９図　ＳＢ１０掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・25
第２０図　ＳＢ１１掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・25

第21図　SB12掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・26
第22図　SB13掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・26
第23図　溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
第24図　A区溝跡・井戸跡出土遺物・・・・・・・・28
第25図　SE01井戸跡・・・・・・・・・・・・・・29
第26図　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第27図　A区土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・32
第28図　土坑・2・・・・・・・・・・・・・・・・34
第29図　SA01小柱穴群・・・・・・・・・・・・・36
第30図　小溝状遺構　A群・B群・・・・・・・・・38
第31図　小溝状遺構　C群・D群・・・・・・・・・39
第32図　小溝状遺構　A群・B群・C群ベルト・・・・40
第33図　小溝状遺構　D群ベルト・・・・・・・・・41
第34図　A区小溝状遺構出土遺物・・・・・・・・・42
第35図　性格不明遺構・・・・・・・・・・・・・・43
第36図　A区不明遺構出土遺物・・・・・・・・・・44
第37図　A区遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・ 45
第38図　B区遺構全体図・・・・・・・・・・・・・48
第39図　SG01～SG06　近世墓壙・・・・・・・49
第40図　SG01近世墓壙出土遺物・・・・・・・・・50
第41図　SG02近世墓壙出土遺物・1・・・・・・・51
第42図　SG02近世墓壙出土遺物・2・・・・・・・52
第43図　SG02近世墓壙出土遺物・3・・・・・・・53
第44図　SG03近世墓壙出土遺物・1・・・・・・・55
第45図　SG03近世墓壙出土遺物・2・・・・・・・56
第46図　SG04近世墓壙出土遺物・・・・・・・・・57
第47図　SG05近世墓壙出土遺物・・・・・・・・・57
第48図　SG06近世墓壙出土遺物・1・・・・・・・58
第49図　SG06近世墓壙出土遺物・2・・・・・・・59
第50図　SG06近世墓壙出土遺物・3・・・・・・・60
第51図　SG07～SG14　近世墓壙・・・・・・・62
第52図　SG07・09・10・12・13・14近世墓
　　壙出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・63
第53図　SG15～SG19　近世墓壙・・・・・・・65
第54図　SG15近世墓壙出土遺物・・・・・・・・・66
第55図　SK01～SK04　土坑・・・・・・・・・68

写真図版目次

写真図版1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
1．A区全景（北西から）
2．調査地点と阿武隈川（南東から）
写真図版2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
1．A区全景（南から）
2．掘立柱建物跡群（東から）
3．SD01溝跡（北から）
4．小溝状遺構A群（南から）
5．小溝状遺構B群・C群・D群（南西から）
6．小溝状遺構D群（南東から）
7．SA01小柱穴群（南から）
写真図版3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
1．SE01井戸跡（南から）
2．SE01井戸跡土層（南西から）
3．SE01井戸跡・井戸枠検出状況（南から）
4．SD07溝跡（南から）
5．SX02ため池状遺構（南から）
6．SD07溝跡土層断面（南から）
7．SX04ため池状遺構（南から）
写真図版4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
1．SD01溝跡・土層断面（東から）
2．SD02溝跡・土層断面（東から）
3．SD06溝跡・土層断面（南から）
4．SB03　P－8土層断面（東から）
5．SB06　P－3土層断面（南西から）
6．唐津産皿出土状況（東から）
7．瀬戸・美濃産皿出土状況（北から）
8．かわらけ出土状況（南から）
9．銭貨出土状況（南から）
10．瓦質土器出土状況（西から）
写真図版5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
1．B区全景（西から）
2．SG01近世墓壙（北から）
3．SG02近世墓壙（北から）
4．SG02近世墓壙・遺物出土状況（西から）
5．SG02近世墓壙・遺物出土状況（近景）
写真図版6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
1．SG03近世墓壙（南から）
2．SG04近世墓壙（南から）
3．SG03遺物出土状況（東から）
4．SG04眼鏡出土状況（北から）
5．SG06鉄銭出土状況（北から）
6．SG05近世墓壙（南から）
7．SG06・12近世墓壙（南から）

8．SG09近世墓壙（北西から）
9．SG14近世墓壙（南から）
写真図版7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
1．SG15近世墓壙（北から）
2．SG15煙管出土状況（北から）
3．SG15外側下部の状況（北から）
4．SG18近世墓壙（南東から）
5．SG18外側下部の状況（北から）
6．漆器皿出土状況
7．漆器椀出土状況
写真図版8・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
磁器
写真図版9・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
陶器1
写真図版10・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
陶器2
写真図版11・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117
陶器・瓦質土器
写真図版12・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
瓦質土器・金属製品
写真図版13・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
銭貨1
写真図版14・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
銭貨2
写真図版15・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
銭貨3
写真図版16・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
銭貨4
写真図版17・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
銭貨5
写真図版18・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
金属製品
写真図版19・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
陶器・漆器類

調 査 要 項

遺跡名	西須賀原遺跡（宮城県遺跡登録番号：15050）
遺跡記号	NS
所在地	岩沼市早股字西須賀原地内
調査主体	岩沼市教育委員会
調査協力	宮城県教育庁文化財保護課
調査面積	A区3,500㎡　B区118㎡
調査期間	平成22年6月14日～10月31日

【発掘調査参加者】（敬称略）

伊藤和雄　相原　正　安彦　駿　岩佐元樹　加藤史織　小久保智子
猶内妙子　笹川敏弘　佐藤トシ子　宍戸忠男　菅原孝子　髙橋とく子
早坂富美子　三浦啓吾　三浦徹也

【室内整理参加者】（敬称略）

伊藤和雄　菅原孝子　三浦徹也

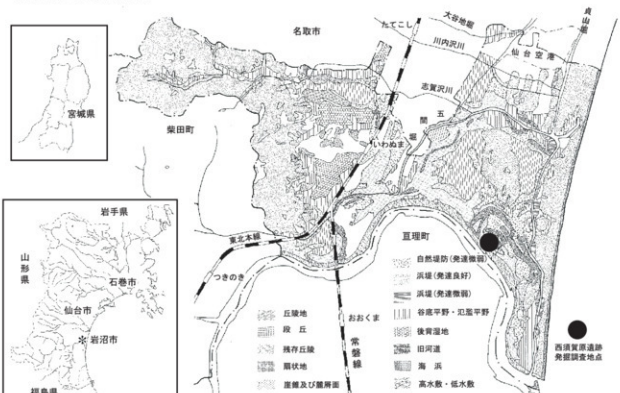
第Ⅰ章　遺跡の概観

1．位置と地理的環境（第１図）

岩沼市は宮城県南東部の都市であり、県庁所在地である仙台市から約17㎞南方に位置している。東に太平洋が広がり、西は名取市高館から南北に伸びる高館丘陵を境として村田町・柴田町と接する。市域の南端を流れる阿武隈川は、栃木県北部の那須三本槍岳付近から福島県の郡山盆地・福島盆地を経由し宮城県へと至る大河川であり、全長約239㎞、流域面積は約5400㎢に及ぶ。当市は阿武隈川が太平洋へ注ぐ河口の北岸に位置し、川を隔てた河口南岸には亘理町、北は太平洋沿岸から丘陵部まで名取市と接している。現在、岩沼市は国道4号と同6号、さらにＪＲ東北本線と同常磐線が合流する地点として知られるが、これは江戸時代に奥州街道と陸前浜街道が分岐していたことに起因している。

岩沼市を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の沖積地に分けられる。西側は標高100ｍ～300ｍ前後の高館丘陵と、その東側で帯状に連なる標高10～100ｍ前後の岩沼丘陵が南北に走っている。これら丘陵は主に溶岩・火砕岩類から成り、岩沼丘陵からいくつかの小丘陵が舌状に沖積平野へ張り出す。東側の沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵東縁から太平洋沿岸までの間に7～8㎞の幅を持って発達する。この名取平野は周辺河川の堆積作用によって形成され、各河川の沿岸には自然堤防・後背湿地、海岸線に平行して浜堤列が顕著に発達している。

本遺跡地は、阿武隈川の堆積作用によって形成された自然堤防上に占地している。現地表面の海抜は3.0ｍ前後を測る。



第１図　岩沼市の位置と地形分類

（岩沼市1992を改変）

2．周辺の遺跡と歴史的環境（第２図）

岩沼市域では、近年の遺物採集や発掘調査により、考古資料が徐々に蓄積されている。以下、これまでの発掘調査による成果を時代別に整理し歴史的環境を概観する。

【旧石器時代・縄文時代】

岩沼市域の遺跡において旧石器時代の遺構は未検出であり、現時点でその概要は明らかではないが、同時代に該当する遺物は北原遺跡（8）で確認されている（小村田達也・三好秀樹ほか1993）。

縄文時代の遺跡は概ね市域の西側丘陵部に所在する。鵜ヶ崎城跡（22）では平成16年度に第4地点の発掘調査を行った際、土塁下から縄文土器を含む遺物包含層が発見され、榎木貝塚下層出土資料に類するものや、鵜ヶ島台式に比定される土器、梨木畑式に比定される土器を確認している。出土した土器の約8割は梨木畑式が占め、総じて縄文時代早期後葉に位置付けられる（川又隆央2005ｂ）。

北原遺跡では平成4年に行われた発掘調査の際、断面形状がフラスコ状を呈する特異な土坑が多数確認されたほか、縄文時代前期及び後期に比定される土器が出土している（小村田達也・三好秀樹ほか1993）。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡も前時代と同じく丘陵部に多く分布している。しかし、かめ塚西遺跡（3）のような平野部でも遺跡は確認されており、当該期の海岸線はすでに現在の堆積地より東側に位置し、居住域は拡大していたものと考えられる。

北原遺跡及び隣接する杉の内遺跡（7）では弥生時代中期中葉の桝形囲式、同時代中期後葉の十三塚式、後期の天王山式の土器が出土・表採されている。古関山遺跡（25）では桝形囲式、朝日古墳群（29）でも桝形囲式と十三塚式の土器が確認されており、岩沼市域の弥生土器は中期中葉以降のものが主体を成す。

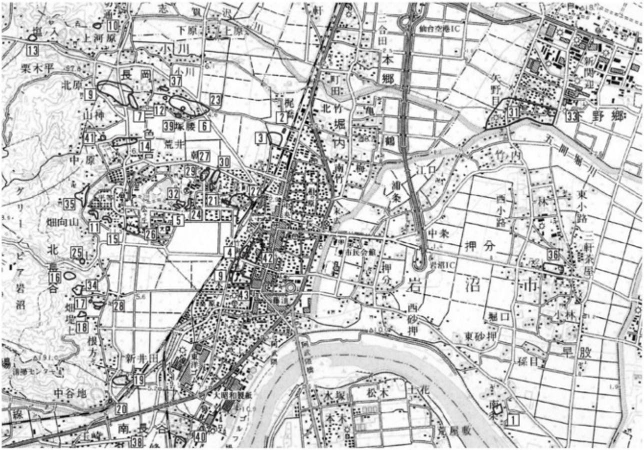
鵜ヶ崎城跡では、土塁下から弥生土器や石包丁が出土し、さらに中期後葉のものと思われる竪穴住居跡1軒を検出した（川又隆央2005ｂ）。岩沼市域内では弥生時代の発掘調査事例が少なく、水田跡などの生産域や墓域は未だ検出されていない。

【古墳時代】

北原遺跡では塩竈式期に比定される土師器や竪穴住居跡36軒が確認され、このうち10号住居跡からは漁の錘として使用する土玉が39個まとまって出土し、稲作以外の生業として漁撈を行っていたことが判明している（小村田達也・三好秀樹ほか1993）。

岩沼市域内には県史跡の第1号に認定されたかめ塚古墳（2）をはじめ、東平王塚古墳（20）、にら塚古墳などの高塚式古墳が数基存在する。過去に発掘調査が実施されたのは長塚古墳（12）、新明塚古墳（6）の2基で、どちらも昭和20年代の國學院大學による調査である。新明塚古墳は発掘調査以前までは円墳とみられていたが、調査の結果、本来は前方後円墳であった可能性が高いことが分かった。しかし、両墳とも埴輪などの出土遺物がないため造営年代は不明である。

横穴墓群は現在まで10箇所で確認されているが（消滅した横穴墓群を含む）、これら横穴墓群の多くは市域の西側を縦断する岩沼丘陵や、そこから舌状に伸びた朝日山公園を包括する低位丘陵の



第２図　岩沼市内遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	立地	種別	時代
1	西須賀原遺跡	早股字西須賀原	浜堤	散布地	古代
2	かめ塚古墳	字亀塚	浜堤	前方後円墳	古墳中
3	かめ塚西遺跡	字亀塚	浜堤	散布地	弥生・古墳
4	丸山横穴墓群	二木二丁目	自然堤防	横穴墓群	古墳後
5	白山横穴墓群	土ケ崎四丁目ほか	丘陵尾根	横穴墓群	古墳後
6	新明塚古墳	長岡字塚腰	丘陵斜面	前方後円墳	古墳中
7	杉の内遺跡	三色吉字杉の内ほか	丘陵斜面	集落	縄文早・前・弥生・古墳中
8	北原遺跡	長岡字北原ほか	丘陵	散布地・集落・貝塚	旧石器・縄文・弥生・古墳前
9	二木横穴墓群	二木二丁目	自然堤防	横穴墓群	古墳後
10	山畑南貝塚	小川字山畑南	丘陵斜面	貝塚	縄文中・後・古代
11	長谷寺横穴墓群	北長谷字畑向山	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
12	長塚古墳	長岡字台	丘陵斜面	円墳	古墳中
13	下塩ノ入遺跡	志賀字下塩ノ入	丘陵麓	散布地	縄文晩
14	熊野遺跡	三色吉字熊野	丘陵麓	散布地	古代
15	平等山横穴墓群	三色吉字畑新田	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
16	新館跡	北長谷字館下	丘陵	城館	中世
17	畑堤上横穴墓群	北長谷字畑堤上	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
18	根方泉遺跡	南長谷字泉	丘陵麓	散布地	弥生
19	長谷小館跡	南長谷字館	丘陵	城館	室町
20	東平王塚古墳	南長谷字京	丘陵麓	前方後円墳	古墳
21	土ヶ崎横穴墓群	土ケ崎二丁目	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
22	鵜ヶ崎城跡	栄町一丁目	丘陵	城館	縄文早・中・中世・近世
23	上根崎遺跡	長岡字上根崎	丘陵麓	散布地	縄文・古墳中
24	引込横穴墓群	土ケ崎四丁目	丘陵斜面	横穴墓群	古墳後
25	古関山遺跡	北長谷字古関山	丘陵斜面	散布地	弥生・奈良
26	新田遺跡	松ケ丘一丁目	丘陵斜面	散布地	縄文・古墳・古代
27	鷲崎横穴墓群	朝日二丁目	丘陵斜面	横穴墓群	古墳
28	畑堤上貝塚	北長谷字畑堤上	丘陵斜面	貝塚	縄文早・前・古代
29	朝日古墳群	朝日二丁目	丘陵麓	散布地・円墳	弥生・古墳・中世
30	朝日遺跡	朝日一丁目	丘陵	散布地	古墳・古代
31	下野郷館跡	下野郷字館内・館外	浜堤	城館	古代・中世・近世
32	白山古墳	字朝日	丘陵	前方後円墳	古墳
33	館外遺跡	下野郷字館外	浜堤	散布地	古代
34	新館前遺跡	北長谷字畑堤上	丘陵斜面	散布地	縄文～平安
35	竹倉部遺跡	三色吉字竹倉部	丘陵麓	散布地	古墳・奈良・平安
36	新田東遺跡	押分字新田東	浜堤	散布地	奈良・中世・近世
37	長塚北遺跡	長岡字上根崎	丘陵	散布地	縄文・古墳・奈良・平安
38	南玉崎遺跡	南長谷字北上	自然堤防	散布地	古代
39	長徳寺前遺跡	長岡字塚越	平地	経塚	中世・近世
40	原遺跡	南長谷字中原90ほか	自然堤防	散布地	平安
41	中ノ原遺跡	三色吉字中ノ原ほか	沖積平野	墓	中世
42	丸山遺跡	二木	自然堤防	集落跡	中世・近世
43	竹駒神社境内遺跡	稲荷町	自然堤防	社寺	近世

斜面上に位置している。

二木横穴墓群（9）では、頭椎太刀の柄頭の一部や装飾太刀など多種多様な遺物が出土している（鍛冶一郎・佐藤宏一ほか1962）。また、長谷寺横穴墓群（11）では子持平瓶が出土し、県内では希少な装飾土器発見事例となった（小野力・志間泰治1968）。引込横穴墓群（24）では、8基の横穴墓の発掘調査が実施された。このうち玄室の両側に棺座が確認された6号墓からは、直刀や馬具などの武具類を中心とする副葬品が出土しており、被葬者は武人であった可能性が高い。8号墓では羨道の排水溝で長さ約4mを測る木製の蓋も発見されている（渡辺清子2000）。

これらの横穴墓群は、平面形が方形乃至不整方形、断面はドーム型であり、玄室内に棺座を有することが大きな共通項として挙げられる。また、出土した須恵器を県内の横穴墓出土資料と比較した場合、湖西地域を中心とした東海諸窯ないし猿投窯産のフラスコ形瓶などが多く存在する。

【古代】

古代名取郡は『倭名類聚抄』の郷名などからみて7郷で形成されていたと考えられ、このうち岩沼市域内にあったと思われる郷は、市城南側の玉崎地区に比定される「玉前郷」と、西側の志賀地区に比定される「指賀郷」の2つである。律令駅制の発達により日本各地で駅路が整備されるようになると、陸奥国内陸部では「東山道」が整備され、玉前郷には「玉前駅」が設置された。多賀城跡からは安積団の兵士たちが軍役を終えて帰還する際、玉前駅を通過する旨を申請した過所木簡が出土している（宮城県多賀城跡調査研究所1984）。また、南長谷に所在する原遺跡（40）では平成17・18年に実施された下水道工事の際、古代の遺物・遺構の存在が明らかとなった。ここでは土師器や須恵器が出土し、竪穴住居跡のカマドと考えられる焼土遺構や区画溝、柱穴などの遺構も確認されている。玉崎地区周辺は、玉前駅やそれに関連する遺跡の発見が見込まれる地域であり、今後の資料の増加が期待される。

一方、指賀郷においても東山道が通過していたと思われ、この路線は文久元年（1861）に作成された『名取郡南方小川村絵図』に見える「東街道古道」などの記載から、市城内の南長谷玉崎～小川を通過し、名取市北目、仙台市富沢付近を抜け、陸奥国分寺経由で最終的に多賀城へ至る路線であったと考えられる（千葉宗久1985）。この路線を概ね踏襲するのが現在の県道仙台岩沼線であり、岩沼市城から名取市方面へ抜ける丘陵東麓の道路沿いには、今日においても歴史的な地名、伝承地、それに伴う遺跡が点在している。なお、東山道の推定線上にある北原遺跡では、9世紀後半の時期と思われる土師器や須恵系土器を含む竪穴住居跡が確認されている。

【中世】

鵜ヶ崎城跡では以前から土塁の存在が知られていたが、発掘調査では15世紀前半頃の年代観が与えられる龍泉窯系の青磁盤や、同じく15世紀代の所産と考えられる天目施釉の瀬戸小壺、13世紀～15世紀頃のものと思われる常滑産甕片などが出土したことから、中世の段階で構築されたものであることが明らかとなった（川又隆央2005ｂ）。また、鵜ヶ崎城に付随する居住域と推定される丸山遺跡（42）では、文献にはみられない区画溝を確認している（川又隆央・熊谷篤2010）。

下野郷館跡（31）では12世紀後半頃の中国産白磁碗片や龍泉窯系の青磁碗片、及び白石古窯跡群の甕片などが出土している。これは五間堀川の自然堤防上でも中世の集落が営まれていたことを

示唆するものと思われる（川又隆央・小泉博明2004）。

墓地・信仰関連遺跡では朝日古墳群で土葬土坑墓群が確認されている。この土葬土坑墓群は丘陵の東側斜面に位置する岩盤面を削りだした小平場において発見され、13世紀後半～15世紀代に機能していたものと思われる。これらのうち1基では13枚の北宋銭が出土し、同様の平場群が他にも丘陵地に点在することから、この地は中世において墓域として認識されていた可能性がある。さらに別の１基の遺構底面では、他の遺構覆土とは異なる少量の砂の堆積が認められることから、砂を使用する祭祀儀礼が行われていた可能性があり、密教の葬送儀礼である土砂加持などに共通性が見出せる（川又隆央2007）。

竹駒神社境内遺跡（43）では、溝跡から白石古窯跡群の製品である中世陶器甕片、また14世紀頃の龍泉窯系と推定される青磁碗片、16世紀代の年代観が与えられる明代末の漳州窯系製品などが出土している。この溝跡は区画溝であると考えられ、近世以前の参道は現在まで踏襲される道筋とは若干異なることが判明した（川又隆央2009）。

中ノ原遺跡（41）では分布調査の際、板碑付近から内面に火葬骨が付着した中世陶器甕片が採取された。さらに、板碑の下部からは白石古窯跡群の製品と考えられる短頸壺が出土し、壺内には火葬骨が納められていた。これら2種類の臓骨器は2基の板碑に伴って埋納されたものであり、2基の板碑は墓標としての目的を持って造立されたものと考えられる（川又隆央・熊谷篤2009）。

市城北西部の山中に占地する岩蔵寺遺跡では、7基の板碑が薬師堂付近で確認されており、寺院の最深部と思われる場所に板碑群が立地するという特殊性や、そのうちの1基が周辺に集石遺構を伴うこと、岩沼市城の板碑総数9基のうち7基が集中して岩蔵寺遺跡にあることなどを勘案すると、古来岩蔵寺が葬送供養の場、或いは寺院に関連する霊場的な場であった可能性が高い（川又隆央2005ｃ　石黒伸一郎2009）。慈覚大師円仁の開基という伝承をはじめとし、蛇石の古譚や興味深い様々な言い伝えが残る岩蔵寺は、今後の解明が待たれる貴重な遺跡の一つである。

【近世】

岩沼は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、考古的な成果も近世のものが多い。鵜ヶ崎城跡ではこれまで4地点で調査が行われ、このうち本丸の北西部と推定される第1地点では東北福祉大学吉井ゼミナールが学術目的の発掘調査を2001年から毎年行っている。この第1地点では丘陵頂部の平場で南北方向に走る溝跡と、その東岸を併走する石垣が確認された。溝跡は20mほど北進すると東に屈曲し終点に至る。建物跡としては第5次～第8次調査にかけて礎石列が確認されているが、どのような建物が構成されるのかは不明である。また、完形の大堀相馬焼の碗を、意図的に正位状態で埋めたと考えられる碗埋納遺構が3基検出され、これらは現時点で地鎮関連遺構と解釈されている。このほか、第9次調査では調査区の北側で池状遺構が確認されているが、その詳細については今後の検討課題である（吉井宏ほか2002～2010）。

第2地点では掘立柱建物跡、土坑、及び近現代の大規模な地形改変の痕跡が確認され（川又隆央2004ａ）、第3地点では掘立柱建物跡内から延びる魚骨を含む溝跡などが発見されている（川又隆央2004ｂ）。また、以前から地表に遺構として顕在していた土塁は、第4地点における発掘調査の

結果、江戸期を通じて最大で4時期の補修・改修を行っていたことが明らかとなった。なお、鵜ヶ崎城跡で出土する遺物は、いずれも18世紀後葉～19世紀代のものが主体を成すが、第4地点では16世紀末～17世紀前半頃と考えられる染付風陶器（志野焼）が出土している（川又隆央2005ｂ）。

長岡字塚腰に所在する長徳寺前遺跡（39）では、曹洞宗龍谷山長徳寺（1657年開山）門前の下水道工事の際に2基の礫石経塚が発見され調査された。これらの経塚は垂直に掘り込まれた土坑に、礫石経（一字一石経）を埋納したものである。平面形状は1号経塚が径1.4mほどの円形、2号経塚は一辺が1.0mほどの方形であった。1号経塚からは14,897点、2号経塚からは11,479点の礫石経が出土している。書写経典については、1号経塚では妙法蓮華経譬喩品第三を中心に書写したものと考えられ、2号経塚では仏説観普賢菩薩行法経を中心に、妙法蓮華経各品の代表的な部分を書写したと考えられる。1号経塚は共出した唐津産陶器の年代観から17世紀後半頃と考えられ、2号経塚は付近の経碑の年号から19世紀前半頃と考えられる。また、1号経塚からは「一之巻□□之内…」と記された木簡も出土している（川又隆央2005ａ・2005ｄ）。

下野郷館跡で検出された遺構は江戸期の屋敷跡を構成するものであり、これらの屋敷跡は矢ノ目領主であった佐藤氏や奥山氏、また、奥山氏の所替え以降に仙台藩によって召抱えられた矢ノ目足軽に関わるものと考えられる。中心的な遺構は掘立柱建物跡や井戸跡及び溝跡などで、掘立柱建物跡は61棟、井戸跡は58基が検出されている。ここで確認された井戸跡は素掘りのものが大半を占めるが、支柱は木材で組み、その外側に葦や竹を立てかけるものが2基確認されている。溝跡は規模や方向から屋敷もしくは館全体の区画溝である可能性が高い（川又隆央・小泉博明2004）。

竹駒神社境内遺跡では、天保十三年（1842）に造営された向唐門の解体修復工事に伴い発掘調査が実施された。この発掘調査では総重量40～50ｔの構造物を支えるために、地下1.7mまで根石を詰め込んだ地下構造が明らかになったほか、宝永7年（1710）に仙台藩5代藩主・伊達吉村によって行われた本殿修造時のものと考えられる大規模な整地層を確認した。この整地面では小規模な掘立柱建物跡や旧参道跡、そして参道に面した柱列を検出したほか、マツと考えられる針葉樹の葉の上にアワビ貝を載せ、それを埋納したものと思われる神事関連遺構が発見されている。このほか、出土遺物としては瓦が多く出土しており、周知の文献や絵図には描かれていない瓦葺施設の存在が示唆される。また、神社の境内という特殊な空間であることを反映してか、かわらけの出土量が多いことも特筆される（川又隆央2009）。

岩沼市街地に位置する丸山遺跡では、岩沼要害を描いた各種の古絵図で「侍屋敷」「下中屋敷」とされている地点を発掘調査し、家中屋敷を区画した溝跡や、掘立柱建物跡、井戸跡などを確認した。井戸跡は市内で初の検出事例となる石組構造のものを1基、井戸枠に桶を使用するものを1基発見している（川又隆央・熊谷篤2010）。

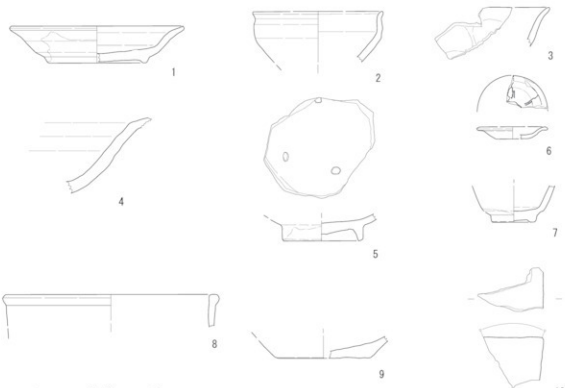
第Ⅱ章　調査の概要

1．調査に至る経緯（第３・４図）

平成16年に経営体育成基盤整備事業についての照会が仙台地方振興事務所（以下、振興事務所）からあり、宮城県教育庁文化財保護課（以下、県教委）、振興事務所、岩沼市教育委員会生涯学習課（以下、市教委）の3者で現地協議を行った。その際に対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西須賀原遺跡に近接していることから、工事実施以前に遺跡の有無や深さを把握するための確認調査を実施することを県教委より指示を受けた。その後、平成19・20年度にも現地協議を行い、現況で比較的高くなっている畑地・水田部分で確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成21年10月14～11月20日にかけて実施した。調査は先に県教委より指示を受けた箇所にトレンチを設定し、重機を使用して耕作土等の表土を除去した後、人力で遺構精査を実施した。その結果、対象地内の一部（3・4トレンチ）から柱穴跡や小溝状遺構群を検出し、16世紀～17世紀前半頃と推定される陶磁器類が出土した。この成果を受けて調査終了後に再度地方振興事務所と設計変更等の協議を行ったところ、地権者側では当初の計画通りに工事を求める意見が多いとの回答を得た。そこでこれらの成果及び意向について県教委と協議を重ねた結果、遺構・遺物が発見された対象地では本格調査をして記録保存を行なう必要性があり、そのほかの地点についても工事立会を実施する、との指示を受け、平成22年度に本格調査を実施する運びとなった。

第３図　調査地点と調査区配置図



第■図 平成21年度確認調査時出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	陶器	端反皿	瀬戸美濃	16世紀前半	13.9	7.9	2.9	内外面灰釉 内底面に胎土目痕	—	い-4
2	陶器	天目椀	瀬戸美濃	16世紀末～17世紀前葉	10.4	—	—	内外面天目釉	—	い-3
3	陶器	皿	瀬戸美濃		—	—	—	内外面灰釉	—	い-7
4	陶器	大皿	瀬戸美濃	16世紀末	—	—	—	内外面灰釉 内面に3条からなる圏線あり	—	い-2
5	陶器	鉢	唐津？	17世紀前半？	—	6.45	—	内面灰釉・外面灰釉、蛇ノ目・高台内無釉、削り出し高台	—	い-1
6	陶器	碗	大堀相馬	19世紀代	5.7	—	—	内面灰釉・外面無釉 内面には鉄釉による絵付け	—	い-6
7	陶器	徳利	大堀相馬	19世紀代	—	3.4	—	内外面灰釉	—	い-5
8	陶器	鉢？	唐津？	17世紀代？	17.2	—	—	内外面灰釉	—	い-8
9	土器	かわらけ	在地	—	—	7.6	—	外底面糸切未調整	—	い-9
10	石製品	硯石	—	—	—	—	—	1面使用	—	い-10

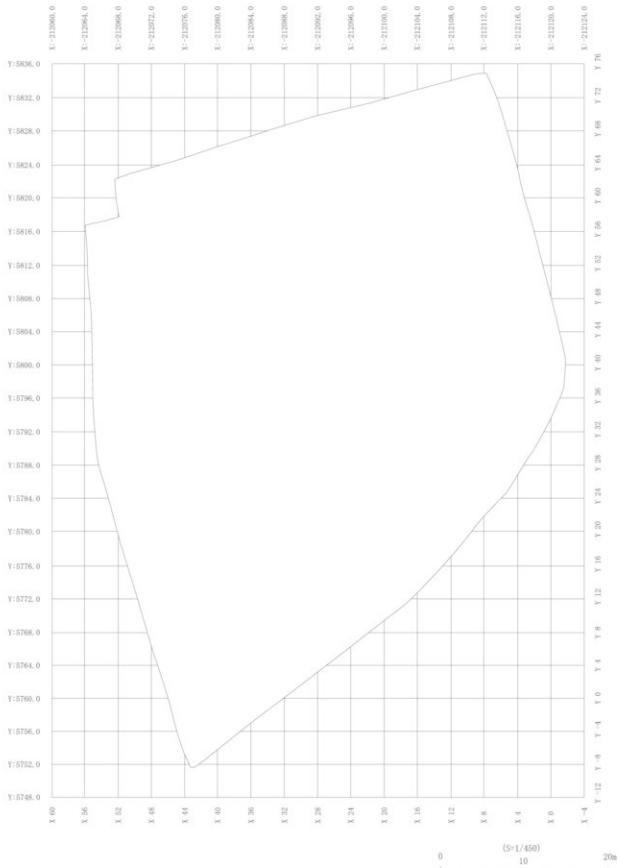
第４図　確認調査時出土遺物

２．調査経過と方法（第５・６図）

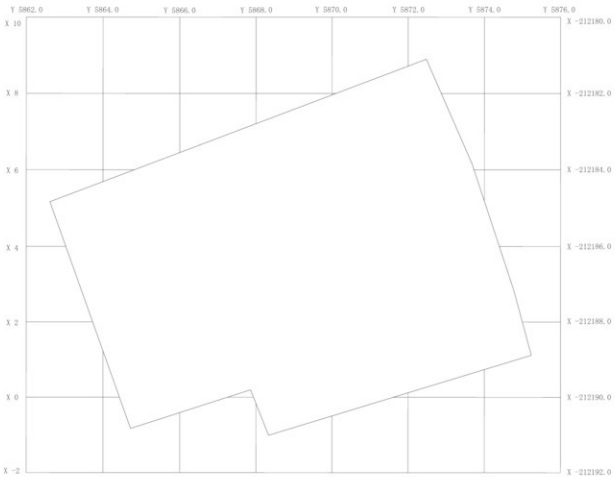
本格調査は平成22年6月14日から実施した。設定した調査区の面積はＡ区3,618㎡、Ｂ区約118㎡である。まず掘削以前に現地付近での国家座標及び標高の移動を実施し、終了後から表土掘削を開始した。

Ａ区

Ａ区は平成21年度に実施した確認調査で遺構・遺物が発見された3・4トレンチを含んだ地点に設定した。表土掘削には重機を使用し、6月19日から掘削を開始した。しかしながら途中でＢ区の調査に重機及び人員を割かざるをえず、表土掘削は8月4日までの期間を要した。



第５図　A区グリット配置図



第6図　B区グリッド配置図

その後、人力によって遺構精査作業を開始し、遺構確認状況の全景撮影を8月20日に行ったのち、遺構の掘り下げ、土層図及び平面図の作成を随時実施し、10月14日に高所作業車を用いたA区の全景撮影を行った。その後も随時遺構写真撮影、遺構図面の作成作業を経て、10月31日に調査及び機材搬出を終了した。

B区

B区は当初、調査対象地には含まれていなかったが、地権者の話を元に現地調査を行なったところ、市内では最古の部類に属する元禄四年銘墓碑をはじめとする近世墓碑の存在を認め、また今回の工事計画で大きく影響を受けることから調査を実施した。

近世墓碑は当初、対象地の南側の畦畔状の高まりに倒伏していた。このため写真撮影及び現況図の作成後にこの高まりを断ち割ったが、封土は全て現代盛土であった。このためその北側で試掘を行ったところ、植材と思われる木片が検出された。そこで広がりを把握するため敷地内で3箇所のトレンチを設定し、重機で表土掘削後に人力で遺構精査を行ったところ、敷地北側及び西側では遺構は確認できなかったものの、畦畔状の高まり北側では近世墓壙の存在を確認し、またこの西北部の一部からは火葬骨片が少量出土したことから、調査区をこの一帯に設定した。調査はA区の表土

掘削及び遺構精査に並行して6月25日から実施し、随時遺構写真撮影、遺構図面の作成作業を経て、7月29日に終了した。

本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点Ⅱ－5（X；-212248.506・Y；6027.029）と同2－031である。これによりA・B区それぞれの南西の隅（A区X；－212120.000・Y；5760.000、B区X；－212190.000・Y；5866.000）の地点にX0Y0杭を設定し、A区では4mごとに、B区では2mごとにグリッドライン名を附した。また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

出土品の整理作業・報告書の作成は2010年11月1日から2011年2月28日にかけて岩沼市文化財展示室内で行なった。

3．基本土層

本地点で確認された土層は以下のとおりである。Ⅰ、Ⅱ層は水田及び畑地の耕作土であることから底面付近においては若干の攪拌がみられる。Ⅲ層以下では若干北から南、東から西へかけての傾斜が見られた。これは調査地の西側で南流する阿武隈川の影響が考えられる。なお、A区の遺構確認面はⅢ層上面であるが、B区では以前の耕地整理の際に削平を受けていることからⅢ～Ⅴ層は遺存しておらず、Ⅰ・Ⅱ層の直下はⅥ層となっている。

Ⅰ層　暗褐色シルト　現代耕作土。田面では黒褐色粘質土。

Ⅱ層　暗褐色砂質シルト　近世～近代遺物を含む耕作土。

Ⅲ層　にぶい黄褐色粘質シルト　A区遺構確認面。

Ⅳ層　暗褐色砂質シルト　にぶい黄褐色粘質シルトを微量含む。

Ⅴ層　暗褐色砂質シルト　マンガンを少量含む。

Ⅵ層　にぶい黄褐色粘質シルト　B区遺構確認面。

Ⅶ層　黒褐色砂層　細粒砂。石英粒を若干多く含む。

Ⅷ層　青黒色砂層　細粒砂。金雲母片を少量含む。

なお、Ⅶ層以下では湧水が極めて激しいことから、堆積土の確認はできなかった。

SA01
SD01
SD02
SD03
SD04
SD05
SD06
SD07
SX01
SX02
SX03
SX04
確認調査 4Tr
確認調査 3Tr
撹乱
0 (1/380) 10m
X 52
X 48
X 44
X 40
X 36
X 32
X 28
X 24
X 20
X 16
X 12
X 8
X 4
X 0
Y -4
Y 0
Y 4
Y 8
Y 12
Y 16
Y 20
Y 24
Y 28
Y 32
Y 48
Y 52
Y 56
Y 60

第７図　Ａ区遺構全体図

第Ⅲ章　発見された遺構と遺物

本調査では前述の通り2ヶ所の調査区を設定し、平成21年度の確認調査で遺構・遺物が確認された地点をA区、調査着手後に近世墓群を発見した地点をB区とした。

A区で検出した遺構は掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土坑、小柱穴群、小溝状遺構、性格不明遺構であり、遺物は少量の陶磁器片や金属製品などが出土している。B区では19基の墓壙を検出し、それらの遺構からは銭貨、煙管、火打鉄、陶磁器、漆器、櫛、提灯、数珠、眼鏡などの副葬品を発見した。人骨を伴う墓壙は13基あるが、遺存状態の良好なものは少なく、具体的な埋葬姿勢は不明である。

以下、検出遺構・出土遺物について確認された遺構ごとに記述する。なお、遺構の方位は長軸方向を主軸方位とし、北からの振れをN-○°-WまたはN-○°-Eに統一して表記する。

1．A区（第７図）

a.掘立柱建物跡

SB01掘立柱建物跡（第8図）

調査区北東部に位置する南北1間、東西3間の東西棟建物跡。柱間寸法は北側柱列で桁行総長6.0m、西側柱列で梁行総長4.0mを測る。主軸方位はN-84°-E。小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。柱穴の規模は長軸50㎝～110㎝、短軸30～80㎝、確認面からの深さは20～50㎝で、平面形状はすべて楕円形である。検出した７穴のうち、P-2を除く6穴では円形で直径10～15㎝の柱痕跡を確認した。

遺物は出土していない。

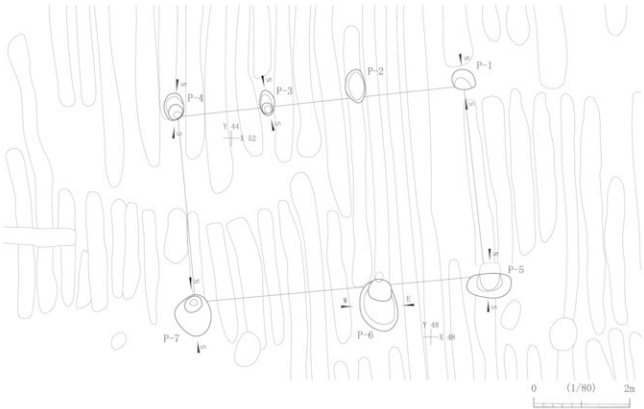
SB02掘立柱建物跡（第9図）

調査区北東部に位置する南北1間、東西3間の東西棟建物跡。柱間寸法は北側柱列で桁行総長5.0m、西側柱列で梁行総長3.4mを測る。主軸方位はN-88°-E。SB03掘立柱建物跡、小溝状遺構と重複し、これらよりも新しい。柱穴の規模は長軸90㎝～150㎝、短軸55～95㎝、確認面からの深さは15～40㎝で、平面形状は楕円形ないし不整形である。検出した8穴のうち柱痕跡を確認したのは5穴で、何れも直径15～20㎝の円形を呈する。

遺物は出土していない。

SB03掘立柱建物跡（第10図）

調査区北側中央部に位置する南北1間、東西3間の東西棟建物跡。柱間寸法は北側柱列で桁行総長6.2m、西側柱列で梁行総長2.8mを測る。主軸方位はN-84°-E。重複するSB02掘立柱建物跡より古く、SB04掘立柱建物跡、SD02溝跡より新しい。柱穴の規模は長軸70㎝～110㎝、短軸55㎝～100㎝、確認面からの深さは25～65㎝で、平面形状は楕円形ないし不整形である。検出した8穴のうち柱痕跡を確認したのは4穴で、何れも直径15㎝ほどの円形を呈する。



SB01 P-1土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(2.5YR3/2)	砂質シルト	炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	黄褐色シルトを粒状に中や多く含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	柱痕跡。

SB01 P-2土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(2.5YR3/2)	砂質シルト	炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	黄褐色シルトを粒状に中や多く含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黒褐色粒土微量含む。
4	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	柱痕跡。

SB01 P-3土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	炭化物微量含む。
2	褐色	(7.5YR4/3)	シルト	黄褐色砂をブロック状に含む。
3	褐色	(7.5YR4/4)	粘質シルト	
4	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	
5	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	柱痕跡。

SB01 P-4土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物・マンガン・黄褐色砂ブロック多量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物・灰白色砂少量含む。
3	褐色	(7.5YR4/4)	シルト	

SB01 P-5土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物ごく微量、灰白色粘土ブロック多量含む。
2	褐色	(10YR4/4)	シルト	マンガン微量、灰白色砂ブロック斑点。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	柱痕跡。

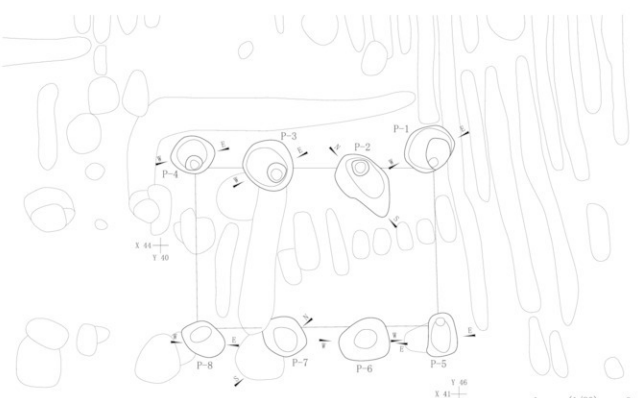
SB01 P-6土層注記

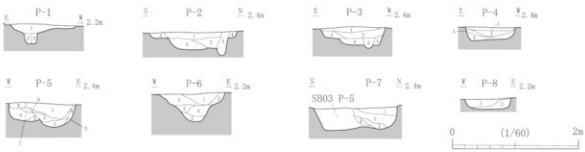
層No.	土色	土質	備考
1	褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	炭化物・マンガン・黄褐色砂ブロック多量含む。
2	褐色	(7.5YR4/4)	シルト	炭化物含む。
3	褐色	(7.5YR4/4)	砂質シルト	炭化物含む。
4	褐色	(7.5YR4/3)	砂質シルト	炭化物・灰白色砂ブロック含む。柱痕跡。

SB01 P-7土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色	(7.5YR4/4)	シルト	炭化物・マンガン・黄褐色砂ブロック含む。
2	褐色	(7.5YR4/4)	砂質シルト	炭化物含む。
3	褐色	(7.5YR4/4)	砂質シルト	炭化物含む。
4	褐色	(7.5YR4/3)	砂質シルト	炭化物・灰白色砂ブロック含む。柱痕跡。

第８図　SB01 掘立柱建物跡





SB02 P-1土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	黒褐色粘土やや多く、黄褐色砂を少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土やや多く、黒褐色粘土少量含む。
3	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	有機層。

SB02 P-2土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	砂質シルト	黄褐色粘土微量含む。
2	黄褐色	(10YR5/6)	シルト	黒褐色粘土少量含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	シルト	黒褐色・灰白色粘土微量含む。
4	にぶい黄褐色	(10YR7/4)	砂質シルト	黒褐色粘土微量含む。
5	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	黒褐色粘土多量含む。有機層。

SB02 P-3土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	黄褐色粘土微量、灰白砂ごく微量含む。
2	黒褐色	(7.5YR3/2)	シルト	黄褐色粘土少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	砂質極少。
4	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	褐灰色粘土やや多く含む。
5	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	有機層。

SB02 P-4土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/6)	シルト	マンガン・灰白色粘土ブロック多量含む。
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	マンガン少量含む。
3	褐色	(7.5YR4/4)	砂質シルト	灰白色砂ブロック多く含む。
4	褐色	(7.5YR4/4)	粘質シルト	

SB02 P-5土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(7.5YR4/4)	砂質シルト	灰白物微量、黄褐色粘土少量含む。
2	灰褐色	(7.5YR4/2)	シルト	黄褐色粘土少量含む。
3	褐灰色	(10YR4/1)	シルト	
4	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土微量含む。
5	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	
6	褐色	(7.5YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
7	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
8	褐色	(7.5YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土を多量含む。

SB02 P-6土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	黄褐色粘土粒状にやや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄褐色・黒褐色粘土やや多く含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土やや多く含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土少量含む。
5	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト	灰白物微量含む。

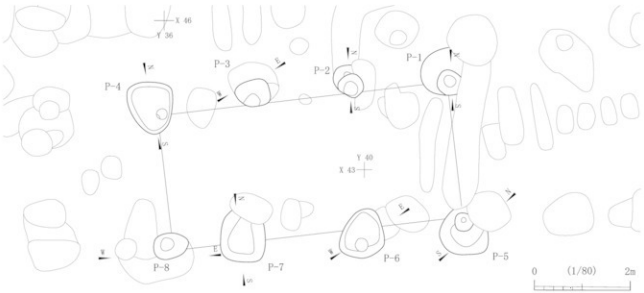
SB02 P-7土層注記

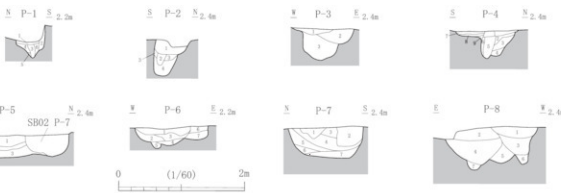
層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色・灰白色粘土多量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	黄褐色・灰白色粘土やや多く含む。
3	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土やや多く含む。
4	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	

SB02 P-8土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土多量、灰白物微量含む。
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土少量、黒褐色粘土多量含む。

第９図　SB02 掘立柱建物跡





SB03 P-1土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
2	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土をブロック状に含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色・黄褐色粘土少量含む。均質層。
4	にぶい黄褐色	(10YR5/3)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
5	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	
6	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂層	灰白色・黄褐色粘土少量含む。

SB03 P-2土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
2	暗色	(10YR3/4)	砂質シルト	灰白色粘土多量。
3	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	灰白色粘土多量。マンガン少量含む。

SB03 P-3土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰黄褐色	(10YR4/2)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	均質層。
3	暗褐色	(10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色・灰白色粘土少量含む。
4	黒褐色	(10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土多量含む。

SB03 P-4土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土少量、炭化物微量含む。
4	暗色	(10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土ブロック少量含む。
5	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	均質層。
6	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	灰白色・黄褐色粘土ブロック少量含む。
7	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
8	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土ブロック少量含む。
9	暗色	(10YR4/4)	砂	細粒砂。

SB03 P-5土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土少量、炭化物微量含む。
2	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土多量含む。
3	暗色	(10YR4/4)	粘質シルト	

SB03 P-6土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黄褐色	(10YR5/6)	砂質シルト	黄褐色粘土多量、炭化物微量含む。
2	暗色	(10YR4/4)	シルト	黄褐色粘土・灰白色粘土ブロック状に含む。
3	暗色	(10YR3/4)	砂質シルト	灰白色粘土ブロック・マンガン含む。
4	褐灰色	(10YR4/1)	砂	黄褐色・黄褐色粘土少量含む。
5	暗褐色	(10YR3/4)	粘質シルト	
6	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	砂質シルト	黄褐色粘土多量、灰白色シルトブロック状に含む。
7	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄褐色粘土多量、灰白色ブロック状に含む。

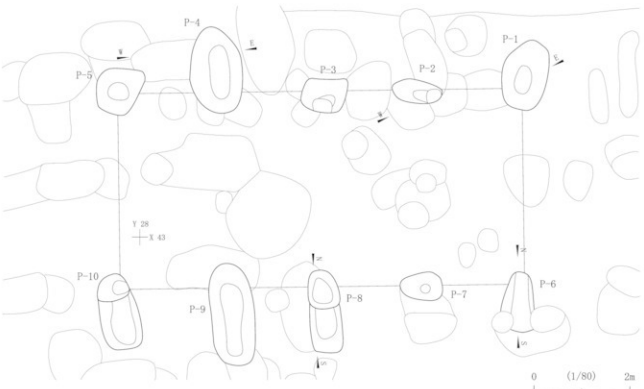
SB03 P-7土層注記

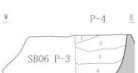
層No.	土色		土質	備考
1	暗色	(10YR4/4)	シルト	灰白色粘土ブロック・マンガン含む。
2	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	灰白色粘ブロック・マンガン含む。
3	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	黄褐色粘土ブロック・マンガン含む。
4	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	マンガン・黄褐色砂ブロック含む。
5	暗色	(10YR4/4)	粘質シルト	マンガン少量含む。
6	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	マンガン微量含む。
7	暗色	(10YR4/4)	粘質シルト	灰白色砂ブロック少量、マンガン微量含む。

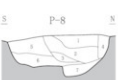
SB03 P-8土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	マンガン・灰白色粘土ブロック少量含む。
2	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	マンガン・灰白色粘土ブロック微量含む。
3	暗色	(10YR4/4)	砂質シルト	淡黄色粘土ブロック含む。
4	黒褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	細粒砂、マンガン・灰白色砂ブロック含む。
5	暗色	(10YR4/4)	シルト	炭化物含む。
6	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	粘質シルト	灰白色砂ブロック含む。
7	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	粘質シルト	灰白色砂ブロック微量含む。

第10図　SB03 掘立柱建物跡







SB04 P-1土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	沢白色粘土や中多く、地土粒微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土を粒状に散見
3	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土を中や多く、マンガン多量含む。
4	褐灰色	(10YR4/1)	粘質シルト	褐色粘土多量含む。
5	褐色	(7.5YR3/4)	粘質シルト	褐灰色砂を含む。柱痕跡。

SB04 P-4土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	砂	黄褐色粘土ブロック含む。
2	褐灰色	(10YR4/2)	砂	沢白・暗褐色粘土やや多く含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	沢白色砂を少量含む。
4	褐灰色	(10YR4/1)	砂	暗褐色粘土やや多く含む。
5	黒褐色	(10YR2/2)	砂	暗褐色粘土やや多く含む。

SB04 P-4（B）土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	黒褐色砂微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	沢白色粘土少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土多量含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土極めて多量、黒褐色砂土少量含む。

SB04 P-6土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	沢白色粘土やや多く、黄褐色粘土少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	沢白色粘土多量、黄褐色粘土微量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	砂	黄褐色粘土やや多く含む。
4	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	炭化物微量、柱痕跡？
5	褐灰色	(10YR4/1)	砂	沢白色・黄褐色粘土少量含む。
6	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄褐色粘土多量、沢白色粘土微量含む。
7	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	黒褐色粘土少量含む。

第 11 図　SB04 掘立柱建物跡

遺物はP-5の掘り方埋土から火打石が1点出土している。

SB04掘立柱建物跡（第11・12図）

調査区北側中央部に位置する南北１間、東西４間の東西棟建物跡。柱間寸法は北側柱列で桁行総長8.6m、西側柱列で梁行総長4.1mを測る。主軸方位はN-88°-E。重複するSB03掘立柱建物跡よ

第12図 A区掘立柱建物跡出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	陶器	皿	瀬戸美濃	16世紀末	13.4	—	—	内面及び口縁部に灰釉	10-3	35
2	陶器	皿	瀬戸美濃	17世紀前半	—	—	—	内外面灰釉	10-7	10
3	陶器	皿	唐津		—	—	—	内外面灰釉	9-9	22
4	陶器	皿	唐津？		14.0	—	—	内面及び口縁部外面に灰釉	10-2	31

第12図　掘立柱建物跡出土遺物

り古く、SB06、SB07、SB11掘立柱建物跡よりも新しい。また、SB05掘立柱建物跡とも重複しているが、柱穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。柱穴の規模は長軸90cm～210cm、短軸50cm～110cm、確認面からの深さは50～55cmで、平面形状は楕円形ないし不整形である。検出した10穴のうち柱痕跡を確認したのは5穴で、何れも直径15cmほどの円形もしくは楕円形を呈する。

遺物はP-4から陶器皿（第12図1）と鉢、P-6から須恵器坏、P-7から陶器皿（第12図2）、P-9から陶器皿2点が出土している。すべて掘り方埋土からの出土である。

SB05掘立柱建物跡（第13図）

調査区北側中央部に位置する南北3間、東西2間の東西棟建物跡。柱間寸法は北側柱列で桁行総長9.1m、西側柱列で梁行総長6.8mを測る。主軸方位はN-83°-E。SB06、SB07、SB11掘立柱建物跡と重複し、これらよりも新しい。また、SB04掘立柱建物跡とも重複しているが、柱穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。柱穴の規模は長軸60cm～220cm、短軸55cm～110cm、確認面からの深さは20～70cmで、平面形状は楕円形のものが多い。建物跡全体で8穴を検出したが、そのうち柱痕跡を確認できたものは3穴で、何れも直径15～20cmの円形を呈する。

遺物はP-1の掘り方埋土から陶器小碗が出土している。

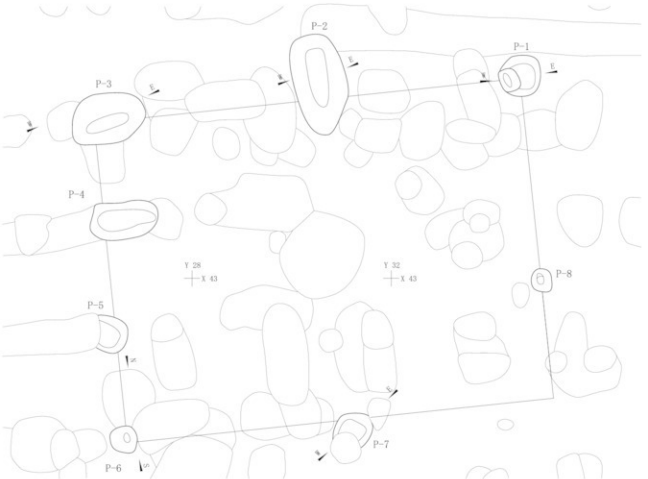
SB06掘立柱建物跡（第14図）

調査区北西部に位置する南北5間、東西1間の南北棟建物跡。柱間寸法は西側柱列で桁行総長11.2m、北側柱列で梁行総長3.9mを測る。主軸方位はN-10°-W。重複するSB04、SB05、SB07掘立柱建物跡より古く、SB11掘立柱建物跡よりも新しい。柱穴の規模は長軸70cm～200cm、短軸45cm～100cm、確認面からの深さは40～75cmで、平面形状は楕円形ないし不整形である。建物跡全体で12穴を検出したが、そのうち柱痕跡を確認できたものは5穴で、何れも直径10～25cmほどの円形もしくは楕円形を呈する。

遺物はP-2の掘り方埋土から陶器碗、P-4の掘り方埋土から陶器鉢が出土している。

SB07掘立柱建物跡（第16図）

調査区北西部に位置する南北2間、東西2間の方形建物跡。柱間寸法は北側柱列で桁行総長5.7m、西側柱列で梁行総長5.5mを測る。主軸方位はN-74°-E。重複するSB04、SB05掘立柱建物跡より古く、SB06、SB11掘立柱建物跡よりも新しい。柱穴の規模は長軸60cm～170cm、短軸55cm～115



SB05 P-1土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	灰白色・黒褐色粘土少量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黒褐色粘土をブロック状に含む。
3	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	灰白色粘土微量含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黒褐色粘土少量、灰白色粘土微量含む。
5	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	マンガン多量含む。
6	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	マンガン多量、黒褐色粘土少量含む。粘質傾。
7	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土微量含む。
8	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	

SB05 P-2土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐灰色	(10YR4/1)	砂	灰白色粘土少量含む。
2	灰白色	(10YR8/2)	粘質シルト	マンガン少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	黒褐色粘土少量マンガン微量含む。

SB05 P-3土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	黒褐色粘土少量、灰化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	黒褐色・灰白色粘土中や多く含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黒褐色粘土やや多く含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	黒褐色粘土多量、灰白色粘土少量含む。
5	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	黒褐色・灰白色粘土少量含む。
6	褐灰色	(10YR4/1)	砂質シルト	灰白色粘土やや多く、黒褐色粘土少量含む。
7	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	灰白色・黒褐色粘土塊めて多量含む。しまりやや強い。

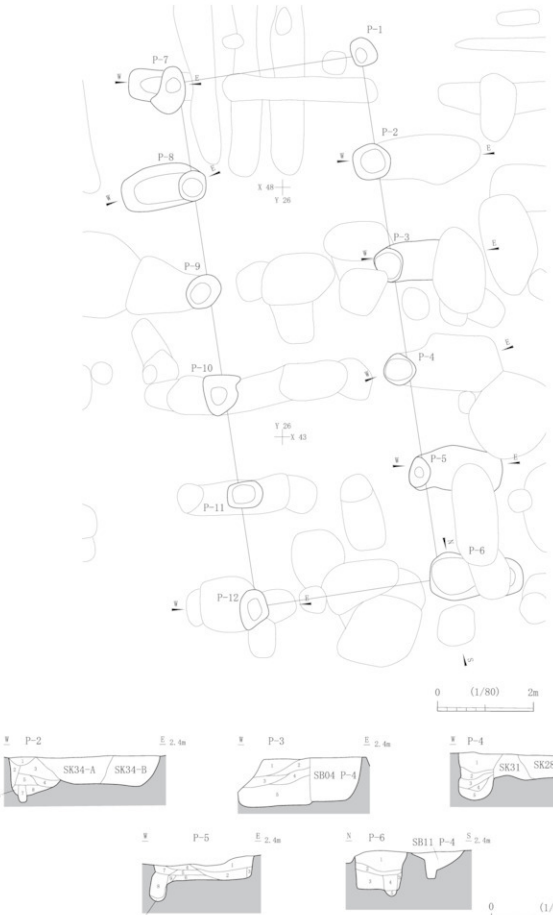
SB05 P-4土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	灰白色粘土微量含む。
2	灰白色	(10YR8/2)	シルト	黒褐色粘土を多量含む。
3	黒褐色	(10YR2/3)	粘質シルト	均質緻、灰化物少量含む。

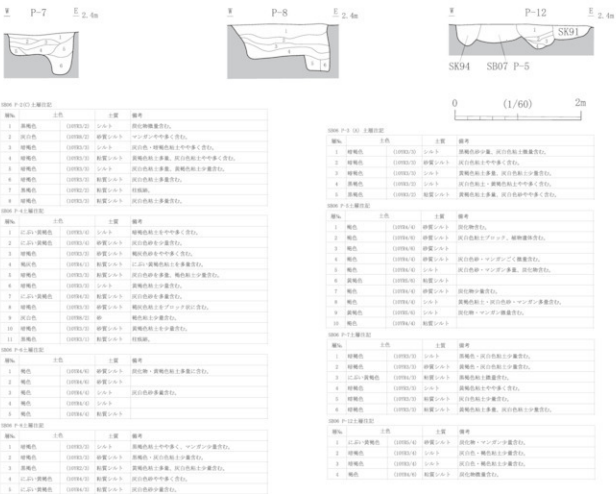
SB05 P-5土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまりやや強い、マンガン・砂ブロック少量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	マンガン・粘土ブロック多量含む。
3	褐色	(10YR4/4)	シルト	しまりやや強い。
4	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまりやや強い、マンガン・砂質ブロック少量含む。
5	褐色	(10YR4/4)	シルト	しまりやや強い、マンガン・砂・粘土ブロック多量含む。
6	褐色	(10YR4/4)	粘質シルト	しまり強い。
7	褐色	(10YR4/6)	粘質シルト	しまり強い。
8	褐色	(10YR4/6)	砂質シルト	しまり強い。
9	褐色	(10YR4/6)	シルト	しまり強い、マンガン少量含む。

第 13 図　SB05 掘立柱建物跡



第 14 図　SB06 掘立柱建物跡・1



第15図　SB06掘立柱建物跡・2

cm、確認面からの深さは30～65cmで、平面形状は楕円形ないし不整形である。建物跡全体で7穴を検出したが、柱痕跡を明瞭に確認できるものは無かった。

遺物は出土していない。

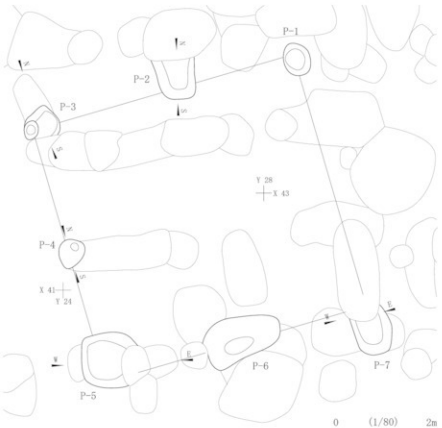
SB08掘立柱建物跡（第17図）

調査区北西部に位置する南北1間、東西3間の東西棟建物跡。柱間寸法は南側柱列で桁行総長6.5m、西側柱列で梁行総長3.8mを測る。主軸方位はN-77°-E。SB09掘立柱建物跡と重複し、これよりも新しい。柱穴の規模は長軸45cm～100cm、短軸40～80cm、確認面からの深さは40cm前後で、平面形状は楕円形ないし楕円形である。建物跡全体で8穴を検出したが、柱痕跡を明瞭に確認できるものは無かった。

遺物は出土していない。

SB09掘立柱建物跡（第12・18図）

調査区北西部に位置する南北2間、東西3間の東西棟建物跡。身舎の西から1間目に間仕切りがある。柱間寸法は北側柱列で桁行総長8.2m、西側柱列で梁行総長4.9mを測る。主軸方位はN-74°-E。重複するSB08掘立柱建物跡よりも古く、小溝状遺構よりも新しい。柱穴の規模は長軸70cm～160cm、短軸60cm～100cm、確認面からの深さは40～45cmで、平面形状は楕円形ないし不整形であ



SB07 P-2土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	炭化物微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土少量、炭化物微量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	灰白粘土やや多く、黄褐色粘土少量含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色・黄褐色粘土多量含む。
5	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	炭化物微量、黄褐色粘土・灰白色粘土少量含む。

SB07 P-3土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/3)	砂質シルト	灰白色粘土やや多く含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	灰白粘土・黄褐色粘土少量含む。
3	暗灰色	(10YR4/1)	シルト	灰白粘土多量含む。しまり強い。
4	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土やや多く含む。
5	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	灰白色粘土やや多く、黄褐色粘土少量含む。
6	黒褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土やや多く含む。
7	黒褐色	(10YR3/3)	シルト	粘質強、しまり強い。

SB07 P-4土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐灰色	(10YR4/1)	砂	灰白色粘土やや多く、マンガン含む。
2	黒褐色	(10YR2/3)	砂質シルト	灰白色粘土少量、マンガン微量含む。
3	黒褐色	(10YR3/3)	砂	マンガン微量含む。
4	黒褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄褐色粘土少量含む。

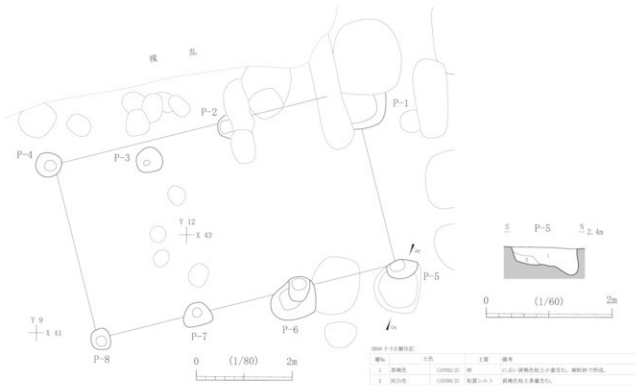
SB07 P-5土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	灰白色混ブロック・マンガン少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	灰白色混ブロック・マンガン少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	灰白色混ブロック・マンガン・炭化物多量含む。
4	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	シルト	炭化物少量含む。

SB07 P-7土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	マンガン・炭化物やや多くさむ。
2	褐色	(7.5YR4/4)	シルト	灰白色混・マンガン多量含む。
3	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	
4	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	粘質シルト	

第 16 図　SB07 掘立柱建物跡



第 17 図　SB08 掘立柱建物跡

る。建物跡全体で9穴を検出したが、そのうち柱痕跡を確認できたものは2穴で、何れも直径15㎝前後の楕円形を呈する。

遺物はP-7の掘り方埋土から陶器皿が出土している（第12図3）。

SB10掘立柱建物跡（第19図）

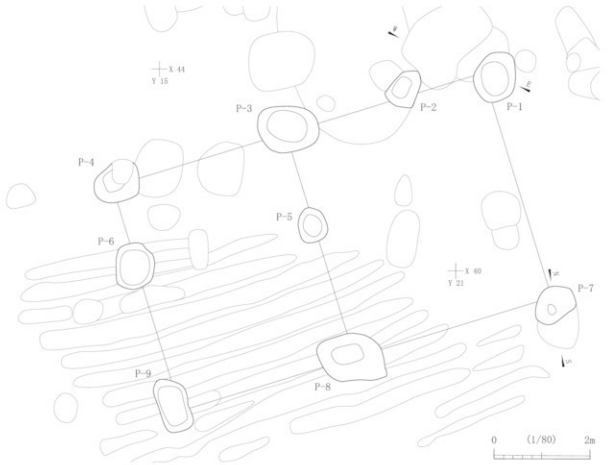
調査区西側中央部に位置する南北２間以上、東西2間以上の推定東西棟建物跡。柱間寸法は北側柱列で4.0m、東側柱列で4.5mを測るが、建物がさらに東方向へ延びる可能性を想定しておく必要がある。主軸方位はN-2°-W。小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。柱穴の規模は長軸90㎝～110㎝、短軸70㎝～100㎝、平面形状は楕円形ないし不整形である。建物跡全体で5穴を検出したが、柱痕跡を明瞭に確認できるものは無かった。

P-4の底面からは人頭大ほどの礫が出土し、栗石または礎盤石として用いられた可能性がある。

SB11掘立柱建物跡（第12・20図）

調査区北側中央部に位置する南北1間、東西1間の東西建物跡。柱間寸法は南側柱列で桁行総長5.2m、東側柱列で梁行総長3.4mを測る。主軸方位はN-80°-E。SB04、SB05、SB06、SB07掘立柱建物跡と重複し、これらよりも古い。しかし、これはP-2がSB06建物跡によって壊されていると仮定した場合であり、本遺構のP-2と、SB06建物跡のP-5が同一の柱穴で、この2者が一体となってL字状の建物を構成していた可能性も否定できない。柱穴の規模は長軸40～90㎝、短軸25～85㎝、確認面からの深さは40～65㎝で、平面形状はすべて楕円形である。検出した3穴のうち、P-4では円形で直径15㎝前後の柱痕跡を確認した。

遺物はP-4の柱痕跡内の埋土から陶磁器が複数出土し、これらのうち陶器皿1点を図示した（第12図4）。



SB09 P-1土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	灰白色粘土微量、炭化物微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土やや多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	粒状鉄、しまり弱い。
4	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄灰色砂質入。
5	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土やや多く、炭化物微量含む。
6	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや強い。
7	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	炭化物やや多く含む。
8	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	炭化物やや多く、灰白色粘土多量含む。

SB09 P-7,SK84土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	炭化物少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土ブロック多く含む。
3	黒褐色	(10YR2/2)	砂質シルト	炭化物少量含む。
4	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	灰白色粘土ブロック少量含む。
5	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	粒状鉄、炭化物微量含む。

第 18 図　SB09 掘立柱建物跡

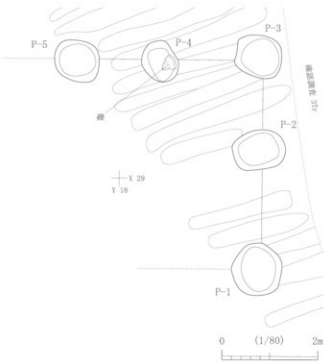
SB12掘立柱建物跡（第21図）

調査区中央部に位置する南北1間、東西1間の東西棟建物跡。柱間寸法は北側柱列で桁行総長4.1m、西側柱列で梁行総長3.0mを測る。主軸方位はN-86°-E。小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。柱穴の規模は長軸45cm～110cm、短軸30～90cm、確認面からの深さは35～45cmで、平面形状は楕円形である。建物跡全体で4穴を検出したが、柱痕跡を明瞭に確認できるものは無かった。

遺物は出土していない。

SB13掘立柱建物跡（第22図）

調査区中央部に位置する南北2間、東西1間の南北棟建物跡。柱間寸法は東側柱列で桁行総長3.8m、南側柱列で梁行総長3.4mを測る。主軸方位はN-27°-W。重複するSK98土坑より古く、SK97



第19図　SB10 掘立柱建物跡

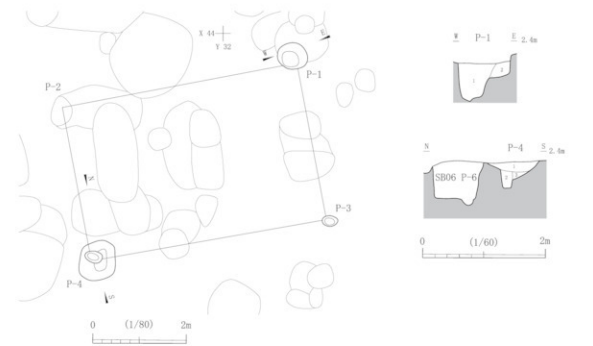
土坑と小溝状遺構よりも新しい。柱穴の規模は長軸30～65㎝、短軸30～45㎝、確認面からの深さは30～65㎝で、平面形状は楕円形ないし不整形である。建物跡全体で4穴を検出したが、柱痕跡を明瞭に確認できるものは無かった。

遺物は出土していない。

b.溝跡

SD01溝跡（第23図）

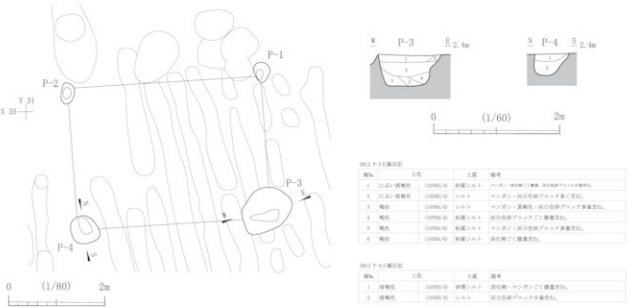
調査区北東部に位置する逆Ｌ字状の溝跡で、北側は調査区外となる。規模は総長34.9m、上幅1.2～4.7m、下幅80㎝～260mを測る。主軸方位は東辺でＮ-5°-W、南辺でＮ-84°-Ｅ。確認面からの深さは10～29㎝であり、断面形状は浅い皿状を呈



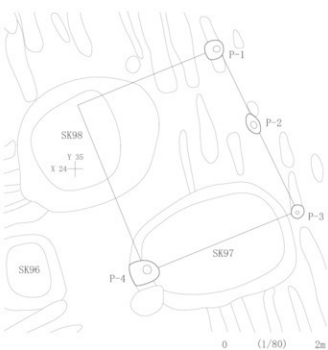
第20図　SB11 掘立柱建物跡

する。堆積土は３層に分層でき、全て人為的埋土である。本遺構は後述する小溝状遺構のA群を囲うように広がり、何らかの関連性が考慮される。

遺物は出土していない。



第 21 図　SB12 掘立柱建物跡



第 22 図　SB13 掘立柱建物跡

SD02溝跡（第23・24図）

調査区北東部に位置するＬ字状の溝跡。重複するSB03掘立柱建物跡よりも古い。規模は総長6.5m、上幅40～70cm、下幅30～50cmを測る。主軸方位は西辺がほぼ真北、北辺でN-86°-E。確認面からの深さは約45cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。本遺構はSB02掘立柱建物跡を囲うように広がるが、これらが同時期に関連性を以て存在していたかは不明である。

遺物は陶器皿が1点出土している（第24図1）。

SD03溝跡（第23図）

調査区北側中央部に位置する東西方向の溝跡。重複するSB05掘立柱建物跡、土坑よりも古い。規模は総長9.0m、上幅40cm～100cm、下幅20～50cmを測る。主軸方位は北辺でN-83°-W。確認面からの深さは約23cmであり、断面形状は皿状を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は不明金属製品が1点出土している。

SD04溝跡（第23図）

調査区北側中央部に位置する東西方向の溝跡。重複する土坑よりも古い。規模は総長6.8m、上幅60～70cm、下幅15～40cmを測る。主軸方位は北辺でN-82°-E。確認面からの深さは約32cmで

SD01東土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭褐色粘土粒少量、炭化物微量含む。
2	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	炭褐色粘土ブロックを中手多く含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	炭褐色粘土ブロック多量含む。

SD01西土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	マンガン・炭化色粘土・炭褐色砂質ブロック含む。

SD02土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	炭化物微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭褐色粘土粒を微量含む。

SD03土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	10YR4/4	砂質シルト	炭褐色粘土少量、マンガン・炭化物微量含む。
2	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	炭化物微量含む。

SD04土層注記

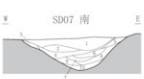
層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	炭化物を多く含む。
2	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	炭褐色粘土粒少量含む。
3	褐色	10YR4/6	砂質シルト	炭褐色粘土粒・炭化物微量含む。

SD06土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	炭化色粘土ブロック微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化色粘土ブロック微量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	炭化物少量含む。

SD07北土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐灰色	10YR4/1	砂	細粒砂、暗褐色粘土少量含む。
2	灰白色	10YR8/2	粘質シルト	マンガン多量含む。
3	褐灰色	10YR4/1	砂	細粒砂、青灰色砂と互層。
4	灰白色	10YR8/2	粘質シルト	褐色砂混入、マンガン多量含む。
5	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	灰白色粘土多量含む。
6	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	灰白色粘土少量含む。
				灰白色粘土少量、マンガン中や多く含む。



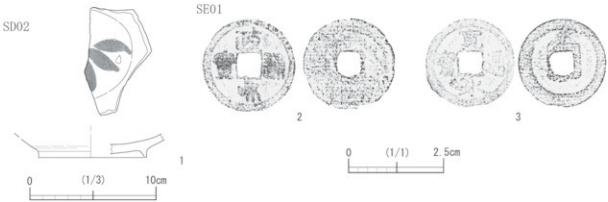
SD07南土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐灰色	10YR4/1	砂	細粒砂、青灰色砂と互層。
2	灰白色	10YR8/2	粘質シルト	青灰色砂を含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物微量含む。
4	灰白色	10YR8/2	粘質シルト	暗褐色砂微量、マンガン多量含む。
5	灰白色	10YR8/2	粘質シルト	青灰色砂微量含む。
6	灰白色	10YR8/2	砂質シルト	マンガン少量含む。
7	灰白色	10YR8/2	砂質シルト	暗褐色砂やや多く、マンガン少量含む。
8	灰白色	10YR8/2	粘質シルト	暗褐色砂・マンガン微量含む。
9	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	褐灰の褐色砂を中多く、マンガン少量含む。
10	灰白色	10YR8/2	粘質シルト	灰白色砂を中多く、下部は褐灰に漸層。

SD08土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰褐色	10YR2/2	砂	細粒砂、褐色粘土やや多く含む。
2	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	炭褐色粘土微量、マンガン少量含む。

第 23 図　溝跡



第24図 A区溝跡出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	陶器	皿	唐津		—	8.4	(1.9)	削り出し高台 内面白濁釉 鉄絵草花文 胎土目跡	9-4	4

第24図 A区井戸跡出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
2	銭貨	政和通寶	北宋銭	(1111)	24.76	20.74	1.24	2.60		12-23	小38-1
3	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.76	19.33	1.13	2.43		12-21	小38-2

第24図　A区溝跡・井戸跡出土遺物

あり、断面形状はU字状を呈する。堆積土は3層に分層でき、全て人為的埋土である。なお、本遺構の延長線上では同様の主軸を有する溝状土坑が4基存在し、これらは直接連結していないものの、溝の一部であった可能性がある。

遺物は礫、かわらけが1点ずつ出土している。

SD06溝跡（第23図）

調査区南西部に位置する南北方向の溝跡。重複するSK99土坑、SX01ため池状遺構よりも古く、小溝状遺構よりも新しい。規模は総長6.2m、上幅70～80cm、下幅18～24cmを測る。主軸方位は東辺でN-5°-W。確認面からの深さは約24cmであり、断面形状は箱状を呈する。堆積土は3層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

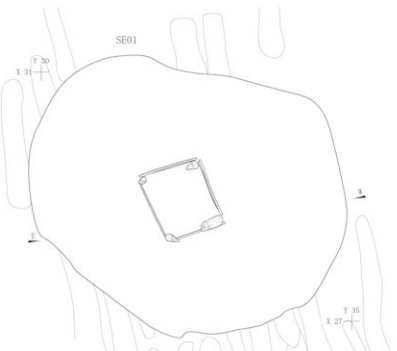
SD07溝跡（第23図）

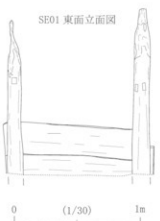
調査区の西側を南北方向に縦断する溝跡。北側、南側は調査区外となる。重複するSX01ため池状遺構よりも古く、小溝状遺構よりも新しい。規模は総長61.2m、上幅1.2～2.2m、下幅30～70cmを測る。主軸方位は東辺でN-41°-W。確認面からの深さは約52cmであり、断面形状は碗状を呈する。堆積土は10層に分層でき、全て人為的埋土である。なお、本遺構より西側の遺構分布は極めて希薄である。

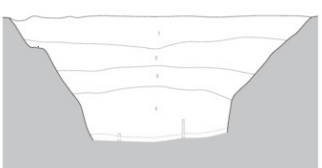
遺物は出土していない。

SD08溝跡（第23図）

調査区南側中央部に位置する南北方向の溝跡。重複するSD07溝跡、SX01ため池状遺構よりも古く、小溝状遺構よりも新しい。規模は総長18.0m、上幅1.1～2.2m、下幅50cm～100cmを測る。主







SE01土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土少量含む。
2	褐灰色	(10YR4/1)	砂質シルト	10層が、特徴的砂質シルトの中まで、下10層褐色土層。
3	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	灰白色粘土・マンガンッチ含む。
4	黒褐色	(10YR2/2)	砂	細粒砂め、マンガン・褐色鉄分含む。

第 25 図　SE01 井戸跡

軸方位は東辺でN-42°-W、南辺でN-65°-E。確認面からの深さは約20cmであり、断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

c.井戸跡

SE01井戸跡（第24・25図）

調査区中央部のX32Y36グリットに位置する井戸跡。小溝状遺構と重複し、これよりも古い。方形の横板組を使用した横桟隅柱留め構造で、縦30cm、横100cm程度の横板を積み上げて構築している。隅柱は直径1.0m前後を測り、上下には横板のホゾと接合させるためのホゾ穴が開いている。掘り方平面形状は楕円形であり、規模は長軸5.4m、短軸4.5mと大型で、確認面からの深さは2.0mを超えるが、湧水のため掘り下げを断念し、底面の検出までには至らなかった。確認できる堆積土は4層に分層でき、自然崩落土層の第4層以外は全て人為的埋土である。断面形状は擂鉢状を呈し、壁は立ち上がる途中に段が付いている。これは本遺構を構築する際、掘削した土を上へ運搬するための足場であった可能性がある。

遺物は陶器や金属製品が出土し、これらのうち銭貨2点を図示した（第24図2、3）。

d.土坑

SK19土坑（第26図）

調査区北側中央部のX48Y36グリットに位置する。SB04掘立柱建物跡、SK20土坑と重複し、これらよりも古い。平面形状は楕円形で、規模は長軸1.1m、短軸85cm、確認面からの深さは15cmである。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK20土坑（第26・27図）

調査区北側中央部のX48Y36グリットに位置する。重複するSB04掘立柱建物跡、SK21土坑より古く、SK19土坑よりも新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸1.0m、短軸85cm、確認面からの深さは17cmである。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は銭貨（寛永通寶）が9枚出土している（第27図1～9）。

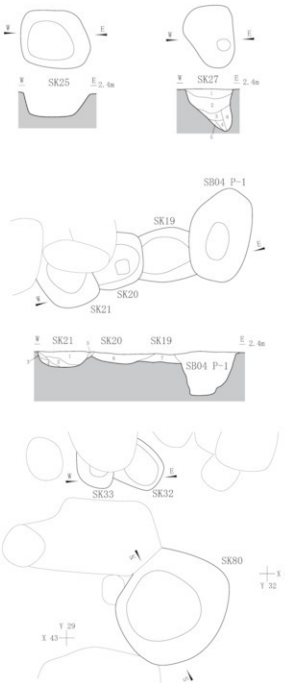
SK21土坑（第26図）

調査区北側中央部のX48Y36グリットに位置する。重複するSB04掘立柱建物跡より古く、SK20土坑よりも新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸1.0m、短軸75cm、確認面からの深さは25cmである。断面形状はU字状を呈する。堆積土は5層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK25土坑（第26・27図）

調査区北側中央部のX48Y32グリットに位置し、重複する遺構は無い。平面形状は楕円形で、規模は長軸1.2m、短軸1.0m、確認面からの深さは40cmである。断面形状はU字状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。



SK27土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土やや多く、黄褐色粘土少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土やや多く、黄褐色粘土少量含む。
4	褐灰色	(10YR4/1)	粘質シルト	灰白色粘土少量含む。
5	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	褐灰色砂を含む。
6	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色・灰白色粘土やや多く含む。

SK32・33土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	灰白色粘土微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色・黄褐色粘土少量含む。

SK43土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	炭化物やや多く、灰白色粘土少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	マンガン微量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土やや多く、マンガン多量含む。
4	灰白色	(10YR8/2)	砂質シルト	黄褐色粘土・マンガン少量含む。
5	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	灰白色粘土多量、マンガン中や多く含む。

SK80土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	炭化物やや多く、黄褐色粘土微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	暗褐色粘土少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土少量含む。
4	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	炭化物少量、灰白色粘土微量含む。
5	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	灰白色粘土少量、黄褐色粘土微量含む。
6	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	灰白色粘土微量含む。
7	黒褐色	(10YR2/2)	砂質シルト	炭化物・焼土ブロック極めて多量含む。
8	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	灰白色粘土少量、有灰色砂やや多く含む。
9	黒褐色	(10YR2/2)	砂質シルト	炭化物・黄褐色粘土微量含む。

SK80土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土・灰白色粘土ブロック多量含む。
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	黄褐色・灰白色粘土ブロック少量、炭化物微量含む。
3	褐色	(10YR4/6)	砂質シルト	黄褐色・灰白色粘土ブロック多量、マンガン少量含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄褐色・灰白色粘土ブロック少量含む。
5	暗褐色	(7.5YR3/3)	粘土	黄褐色・灰白色粘土ブロック多量、マンガン少量含む。
6	褐色	(7.5YR4/3)	砂質シルト	黄褐色・灰白色粘土ブロック少量含む。
7	黒褐色	(7.5YR3/2)	砂質シルト	黄褐色・灰白色粘土ブロック多量、マンガン多く含む。

SK80土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐灰色	(10YR4/2)	砂	灰白色砂をやや多く、炭化物微量含む。
2	褐色	(10YR4/4)	砂	有灰色砂と粘土の互層。
3	暗褐色	(10YR3/3)	砂	灰白色粘土ブロックが多含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄褐色砂少量含む。
5	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	黄褐色砂少量含む。

SK87土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	褐色粘土少量・炭化物微量含む。
2	褐灰色	(10YR4/1)	砂	灰白色粘土微量含む。
3	褐灰色	(10YR4/1)	砂	灰白色粘土をやや多く、暗褐色砂微量含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	灰白色粘土をやや多く含む。
5	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	黄褐色砂少量、褐色粘土微量含む。
6	褐色	(10YR4/6)	砂質シルト	炭化物微量含む。
7	褐灰色	(10YR4/1)	砂質シルト	灰白色粘土やや多く、マンガン少量含む。
8	褐灰色	(10YR4/1)	砂質シルト	灰白色粘土少量、マンガン中や多く含む。

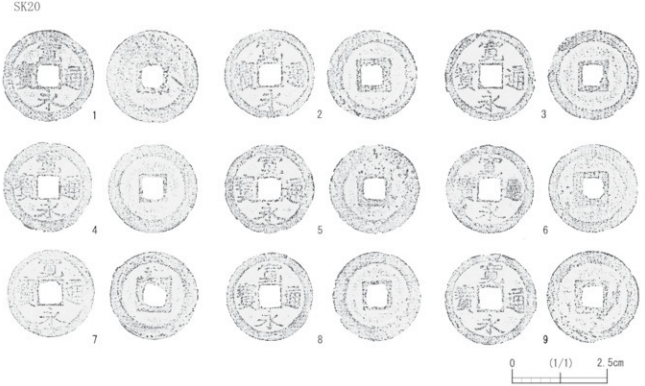
SK88土層注記

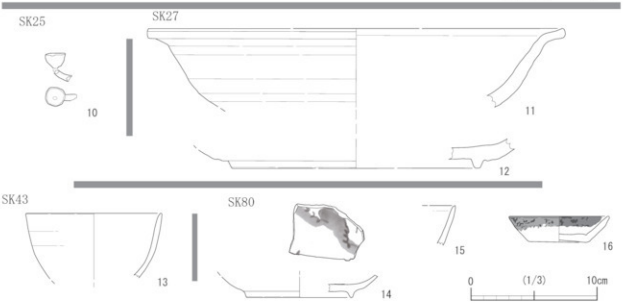
層No.	土色		土質	備考
1	褐灰色	(10YR4/1)	砂	炭化物微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	砂	褐色粘土やや多く含む。
3	褐灰色	(10YR4/1)	砂	灰白色粘土やや多く含む。
4	黒褐色	(10YR2/2)	砂	有灰色砂と褐色粘土の互層。
5	褐灰色	(10YR4/1)	砂	有灰色砂・褐色粘土を少量含む。
6	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	有灰色砂を微量含む。

SK89土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	にぶい土で固い。
2	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	炭化物・灰白色粘土ブロック多量含む。
3	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	炭化物・灰白色粘土ブロック多量含む。
4	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	粒子細かい。
5	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	砂質シルト	マンガンブロック微量含む。
6	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	灰白色粘土ブロック微量含む。
7	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	灰白色粘土ブロックごく微量含む。
8	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	砂質シルト	礫・黒粒を多く含む。
9	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	炭化物・灰白色粘土ブロック微量含む。
10	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	灰白色粘土ブロック少量含む。
11	褐色	(10YR4/4)	シルト	マンガン・灰白色粘土ブロック多量含む。
12	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	シルト	マンガン多量含む。

第26図　土坑





第27図 A区土坑出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.72	18.52	1.21	2.90		12-12	石39-1
2	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.19	20.66	1.62	4.04		12-13	石39-2
3	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.23	19.67	1.26	3.03		12-14	石39-3
4	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.20	18.23	1.51	4.02		12-15	石39-4
5	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.98	18.29	1.13	2.59		12-16	石39-5
6	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.88	19.75	1.45	3.76		12-17	石39-6
7	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.22	19.66	1.36	3.05		12-18	石39-7
8	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.78	17.63	1.71	3.85		12-19	石39-8
9	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.51	19.97	1.52	3.74		12-20	石39-9

第27図　A区土坑出土遺物

第27図　A区土坑出土遺物観察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長（cm）	底径・幅（cm）	器高・厚（cm）	備考	写真番号	登録番号
10	金属製品	煙管火皿		18世紀前半	1.6	1.25	—	総重量2.0g	12-11	-666
11	陶器	大皿	瀬戸美濃	16世紀末	(33.3)	—	—	内外面灰釉　体部内面中位に6条の沈線文　45と同一個体	11-6	44
12	陶器	大皿	瀬戸美濃	16世紀末	—	(19.8)	—	内外面灰釉　内底面一部に輪ハギ　高台内に墨土目痕	11-7	45
13	陶器	碗	瀬戸美濃	不明	10.75	—	—	内外面天目釉	9-2	34
14	磁器	染付皿	肥前		—	(8.6)	—	内外面透明釉、高台内に圏線、高台外に2条圏線、内面草花文	8-5	2
15	陶器	碗	唐津		—	—	—	内外面灰釉	10-6	3
16	土器	かわらけ	在地		8.0	4.0	2.1	外底部回転糸切未調整　口縁部内外面に煤付着	12-4	1

遺物は煙管が1点出土している（第27図10）。

SK27土坑（第26・27図）

調査区北側中央部のX52Y32グリットに位置し、重複するSD03溝跡よりも新しい。平面形状は不整形で、規模は長軸1.0m、短軸80cm、確認面からの深さは66cmである。断面形状はU字状を呈し、東壁はやや内反しながら立ち上がる。堆積土は6層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は陶器鉢が複数出土し、これらのうち陶器大皿2点を図示した（第27図11、12）。

SK32土坑（第26図）

調査区北側中央部のX48Y32グリットに位置する。SB04掘立柱建物跡、SK33土坑と重複し、これらよりも古い。平面形状は楕円形で、規模は長軸70m、短軸60cm、確認面からの深さは12cmである。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は火打石と不明金属製品が1点ずつ出土している。

SK33土坑（第26図）

調査区北側中央部のX48Y32グリットに位置する。重複するSB04掘立柱建物跡よりも古く、SK32土坑よりも新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸60m、短軸50cm、確認面からの深さは12cmである。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK43土坑（第27・28図）

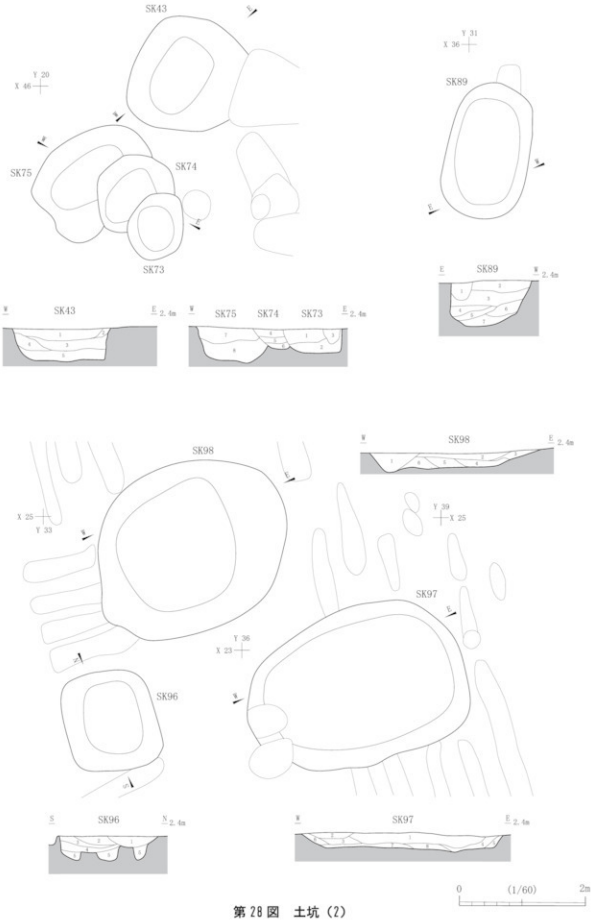
調査区北西部のX48Y24グリットに位置する。平面形状は楕円形で、規模は長軸2.0m、短軸1.9cm、確認面からの深さは52cmである。断面形状は箱状を呈する。堆積土は5層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は陶器碗が1点出土している（第27図13）。

SK73土坑（第28図）

調査区北西部のX44Y24グリットに位置する。SK74、SK75土坑と重複し、これらよりも新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸1.1m、短軸90cm、確認面からの深さは38cmである。断面形状はU字状を呈し、東壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。



第 28 図　土坑（2）

SK74土坑（第28図）

調査区北西部のX48Y24グリットに位置する。重複するSK73土坑より古く、SK75土坑よりも新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸1.35m、短軸85cm、確認面からの深さは33cmである。断面形状は碗状を呈する。堆積土は3層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK75土坑（第28図）

調査区北西部のX48Y24グリットに位置する。SK73、SK74土坑と重複し、これらよりも古い。平面形状は不整形で、規模は長軸2.0m、短軸1.15m、確認面からの深さは55cmである。断面形状は碗状を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は陶器土瓶が１点出土している。

SK80土坑（第26・27図）

調査区北西部のX44Y32グリットに位置する。SB06掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。平面形状は楕円形で、規模は長軸1.85m、短軸1.6m、確認面からの深さは60cmである。断面形状は碗状を呈する。堆積土は9層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は陶磁器などが複数出土し、これらのうち染付皿、陶器碗、かわらけを図示した（第27図14、15、16）。

SK89土坑（第28図）

調査区中央部のX36Y32グリットに位置する。小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸2.2m、短軸1.3m、確認面からの深さは76cmである。断面形状はU字状を呈する。堆積土は7層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は陶器と磁器の皿が1点ずつ出土している。

SK96土坑（第28図）

調査区中央部のX24Y36グリットに位置する。小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。平面形状は方形で、規模は長軸1.6m、短軸1.45m、確認面からの深さは40cmである。断面形状は底面が凸凹であり、本遺構は元来小溝状遺構だった可能性も考慮されるが詳細は不明である。堆積土は5層に分層でき、自然堆積層である5層以外は全て人為的埋土である。

遺物は軽石が1点出土している。

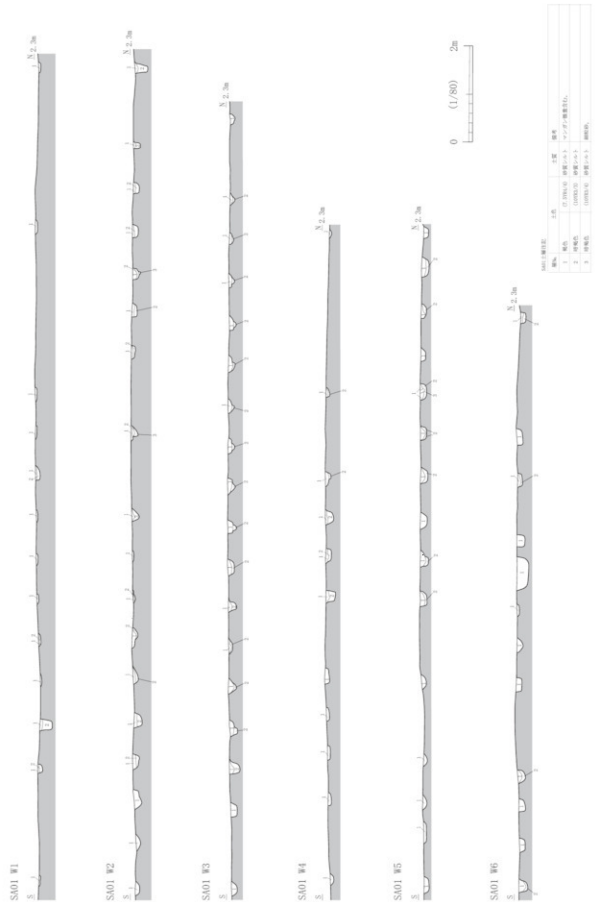
SK97土坑（第28図）

調査区中央部のX24Y40グリットに位置する。重複するSB13掘立柱建物跡よりも古く、小溝状遺構よりも新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸3.4m、短軸2.4mと大型であるが、確認面からの深さは25cmほどしかない。断面形状は浅い皿状を呈する。堆積土は8層に分層でき、自然堆積層である7、8層以外は全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK98土坑（第28図）

調査区中央部のX28Y40グリットに位置する。SB13掘立柱建物跡、小溝状遺構と重複し、これらより新しい。平面形状は楕円形で、規模は長軸3.2m、短軸2.7mと大型であるが、確認面からの



第 29 図　SA01 小柱穴群

深さは31cmほどしかない。断面形状は浅い皿状を呈し、東壁が緩やかに立ち上がる。堆積土は6層に分層でき、自然堆積層である4～6層以外は全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

e.小柱穴群

SA01小柱穴群（第29図）

調査区東側のX20～40Y60～72グリットに位置する。南北方向に延びる小柱穴列で、西から順にW1～W6の6列によって構成される。主軸方位はN-10°-W。小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。

柱間寸法は最長のW2で総長17.3m、最短のW6で総長12.0mを測る。柱穴の規模は長軸10～45cm、短軸10～35cm、確認面からの深さは5～25cmと大きさにややばらつきがある。平面形状は円形ないし楕円形である。柱痕跡は何れも直径5～10cmの円形を呈する。掘り方埋土は明褐色・暗褐色シルトで、酸化鉄やにぶい黄褐色砂質ブロックを少量含む。

遺物はW5に属する小柱穴で、骨粉状の物質をごく少量確認したのみある。

f.小溝状遺構

A区のほぼ全体にわたって広く分布し、検出された遺構総数は482条に及ぶ。小溝は長いもので10m以上あり、概ね確認面からの深さは10～40cm、幅は25～45cm、断面形はU字状ないし浅い皿状のものが大部分を占める。堆積土は概ね褐色の砂質シルトで、しまりがやや強く炭化物を微量に含むものが多い。これらの小溝状遺構は方向や空間的な分布のまとまりによってA群～D群に大別される。

A群（第30・32・34図）

調査区北側で検出された南北方向に延びる小溝状遺構で、北側は調査区外になる。検出された遺構総数は117条で、最長のものは10.1m以上の長さがある。A群を東西に分割した場合、東側により濃密な分布が認められる。重複する土坑やSB01、SB02掘立柱建物跡よりも古く、小溝同士の間隔などから2回以上の耕作が考えられる。また、A群の分布はSD01溝跡の内側に収まることから、これらの関連性について留意する必要がある。

遺物は須恵器片、陶器、金属製品、石製品などが出土し、これらのうち陶器皿、煙管、銭貨（元豊通寶）を図示した（第34図1、6、8）。

B群（第30・32・34図）

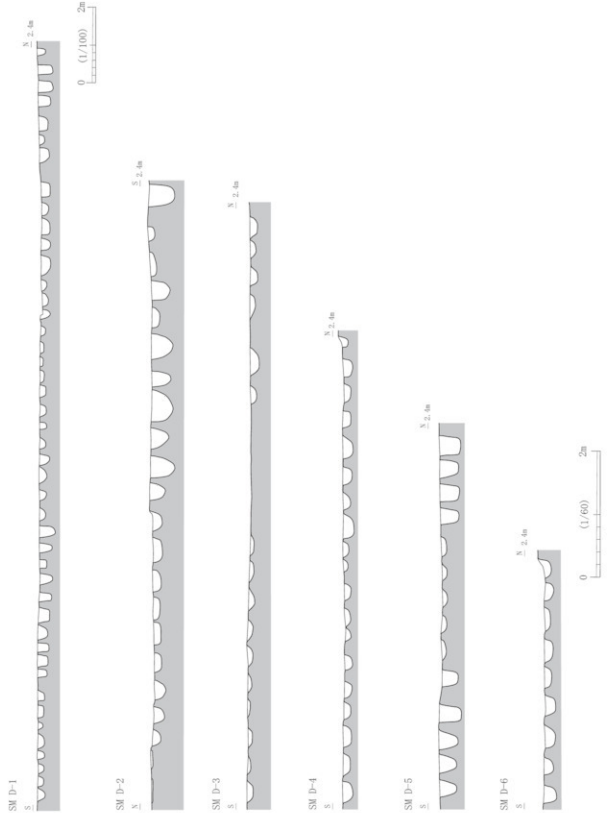
調査区中央部で検出された南北方向に延びる小溝状遺構。検出された遺構総数は92条で、最長のものは11.7mを測り、B群を南北に分割した場合、北側により濃密な分布が認められる。重複するD群、土坑、SB12、SB13掘立柱建物跡、SX02ため池状遺構よりも古く、C群やSE01井戸跡よりも新しい。小溝同士の間隔や重複関係などから2回以上の耕作が考えられる。

遺物は陶器、瓦質土器、金属製品などが出土し、これらのうち陶器皿、瓦質香炉、楔を図示した（第34図2～4、7）。

第30図　小溝状遺構　A群・B群

第 31 図　小溝状遺構　C 群・D 群

第 32 図　小溝状遺構　A 群・B 群・C 群ベルト



第 33 図　小溝状遺構　D 群ベルト

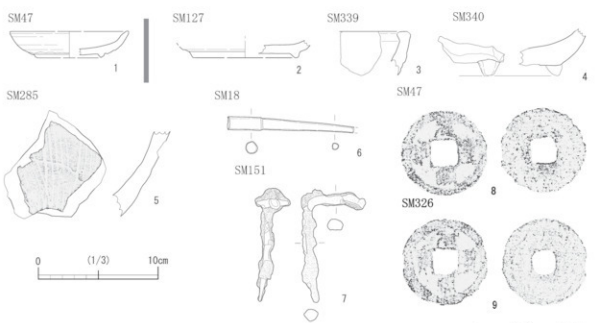
C群（第31・32図）

調査区西側で検出された東西方向に延びる小溝状遺構。検出された遺構総数は108条で、最長のものは7.0mを測る。B群、土坑、SB09、SB10掘立柱建物跡、SD06、SD07、SD08溝跡、SX01ため池状遺構と重複し、これらよりも古い。また、小溝同士の間隔などから2回以上の耕作が考えられる。一部、小溝の西端とSD07溝跡の東辺が並行関係にあることは留意される。

遺物は陶器や金属製品などが出土したが、何れも小破片のため図化できなかった。

D群（第31・33・34図）

調査区南東部で検出された東西方向に延びる小溝状遺構。検出された遺構総数は165条で、最長のものは9.1mを測り、D群を東西と中央部に3分割した場合、中央部により濃密な分布が認められる。重複する土坑、SA01小柱穴群、SX02ため池状遺構よりも古く、B群よりも新しい。小溝同士の間隔や重複関係などから2回以上の耕作が考えられる。



第34図 A区小溝状遺構群出土遺物観察表

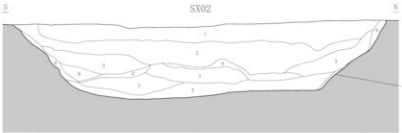
No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	陶器	皿	瀬戸美濃	16世紀後半	10.0	5.8	2.2	内外面灰釉 高台内無釉	9-5	5
2	陶器	皿	瀬戸美濃	不明	—	8.8	—	削出高台 内面は灰釉 外面は無釉	10-5	47
3	瓦質土器	火鉢？	在地	不明	—	—	—	口縁外面は横方向のヒダ？ 外面に押印	11-12	48
4	瓦質土器	香炉	在地	不明	—	—	—	脚部は貼り付け	12-1	51
5	瓦質土器	擂鉢	在地	16～17世紀代	—	—	—	櫛目は5条1単位	12-3	46
6	金属製品	煙管吸口		17世紀後半	(10.6)	1.1	1.0	重量15.5g	12-10	-762
7	金属製品	銀金具		不明	9.45	5.65	1.05	先端はリング状 重量40.5g	12-28	-768

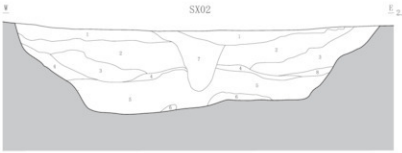
第34図 A区小溝状遺構群出土銭貨観察表

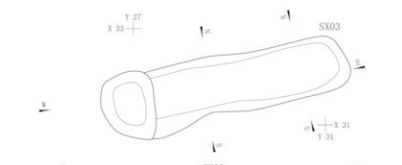
No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
8	銭貨	元豊通寶	北宋銭	(1078)	24.15	20.89	1.34	2.70		12-24	-736
9	銭貨	元豊通寶	北宋銭	(1078)	24.33	18.26	1.24	2.36		12-25	-735

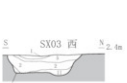
第34図　A区小溝状遺構出土遺物

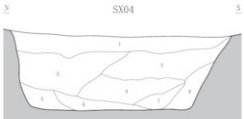
遺物は陶器、瓦質土器、金属製品、クルミなどが出土し、これらのうち瓦質擂鉢、銭貨（元豊通寶）を図示した（第34図5、9）。











SX03土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄橙色 (10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土ブロック少量含む。
2	にぶい黄橙色 (10YR4/3)	砂質シルト	黄褐色粘土ブロック多量含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	黄褐色・黒褐色粘土ブロック多量含む。
4	黄褐色 (10YR5/6)	粘質シルト	黄褐色・黒褐色粘土ブロック多量含む。
5	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	黄褐色・黒褐色粘土ブロック多量含む。
6	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	黒褐色粘土ブロック少量含む。
7	褐灰色 (10YR4/1)	粘質シルト	焼土・炭化物多量含む。
8	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色・黒褐色粘土粒多量含む。

SX04土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	砂質シルト	灰白色・黄褐色粘土ブロック多量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	黒褐色粘土ブロック多量含む。
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	黒褐色・灰白色・黄褐色粘土少量、マンガン微量含む。
4	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	黒褐色・灰白色・黄褐色粘土・マンガン少量含む。
5	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	黒褐色粘土ブロック多量含む。
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ほぼ全体ブライむする。
7	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	黒褐色粘土ブロック多む。一部ブライむする。
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	黒褐色粘土ブロック多む。一部ブライむする。

SX03・SK120土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	白浜に黒色が含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	黒色が多量含む。
3	褐色 (7.5YR4/4)	砂質シルト	黄褐色粘土多量、炭化物少量、マンガン微量含む。
4	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	黄褐色粘土ブロック微量含む。
5	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	黒色が多量、炭化物微量含む。
6	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	灰白色粘土少量、黄褐色粘土多量含む。
7	黒褐色 (10YR2/3)	砂質シルト	灰白色粘土少量、黄褐色粘土多量含む。
8	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	炭化物少量、マンガン微量、黒色が多量含む。
9	暗褐色 (10YR3/4)	砂質シルト	SK120覆土。灰白色粘土ブロック含む。
10	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	SK120覆土。灰白色粘土ブロック微量含む。

第 35 図　性格不明遺構

g.性格不明遺構

SX01ため池状遺構（第7図）

調査区中央部に位置する。SD06、SD07、SD08溝跡、及び小溝状遺構と重複し、これらよりも新しい。平面形状は不整形で、規模は長軸10.3m、短軸8.1mである。

遺物は出土していない。

SX02ため池状遺構（第7・35・36図）

調査区南西部に位置する。小溝状遺構と重複し、これよりも新しい。平面形状は円形で、規模は直径6.6m、確認面からの深さは1.4mである。断面形状は擂鉢状を呈し、底面はやや起伏を伴う。

遺物は瓦質の火鉢が出土している（第36図1）。

第36図 A区性格不明遺構出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	瓦質土器	火鉢	在地	不明	—	—	—		11-11	12
2	青磁	碗	肥前		—	—	—	内外面青磁釉	8-1	50
3	金属製品	鋸		不明	17.0	3.2	1.15	総重量45.8g	12-29	469

第36図　A区不明遺構出土遺物

SX03性格不明遺構（第35・36図）

調査区中央部のX36Y32グリットに位置する。小溝状遺構と重複し、これよりも古い。平面形状は長方形で、規模は長軸4.0m、短軸90cm、確認面からの深さは40cm前後である。断面形状は不整形で、堆積土は11層にまで細分でき、一部に焼土を含む。

遺物は陶磁器、金属製品、少量の火葬骨が出土し、これらのうち青磁碗片、鋸を図示した（第36図2、3）。

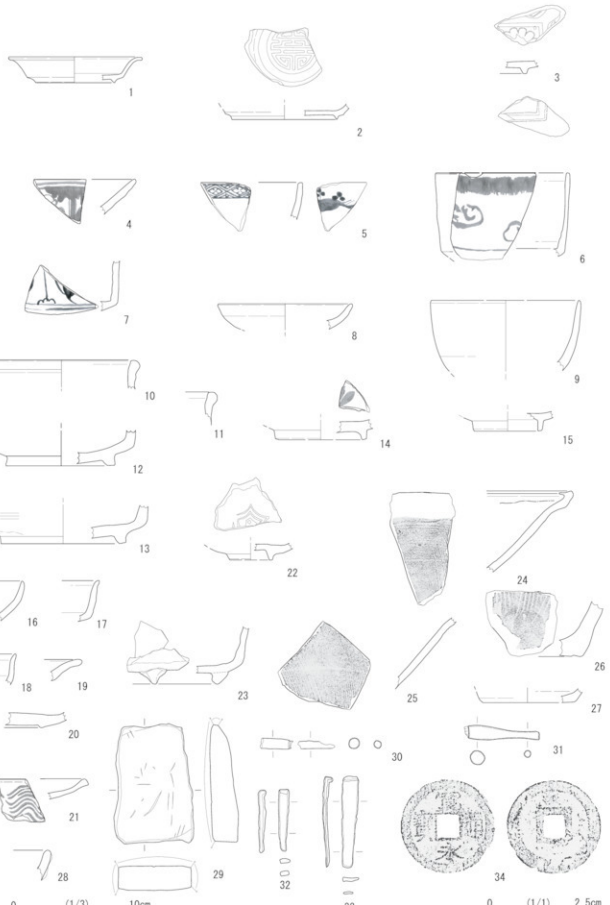
SX04ため池状遺構（第7・35図）

調査区南西部のX24Y24グリットに位置する。重複する遺構はない。平面形状は円形で、規模は直径3.5m、確認面からの深さは1.1mである。断面形状は箱状を呈する。堆積土は8層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

h.遺構外出土遺物（第37図）

A区の各遺構に属さない表土掘削時出土遺物、基本層精査時出土遺物、及び出土遺構不明遺物の主なものを図示した。



第37図　A区遺構外出土遺物

第■図　A区遺構外出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	白磁	端反皿	肥前		10.7	6.4	2.95	高台畳付無釉	8-2	24
2	白磁	皿	肥前		—	8.4	—	内底面に変形「寿」字文　高台畳付無釉	8-3	25
3	白磁	型押皿	平戸系か	19世紀後半	—	—	—	内外面透明釉　型抜き梅花文？　内底面に目跡1ヶ所	8-4	54
4	磁器	染付鉢	肥前	不明	—	—	—	内外面透明釉	8-7	29
5	磁器	染付碗Ⅱ	肥前	不明	—	—	—		8-9	53
6	磁器	染付鉢	肥前	不明	—	—	—	内外面透明釉　口縁上部には呉須筒描け	8-6	19
7	陶器	染付徳利？	肥前？	不明	—	—	—	内外面透明釉	8-8	36
8	陶器	皿	瀬戸美濃	16世紀後半	10.7	—	—	内外面灰釉	9-7	29
9	陶器	碗	瀬戸美濃？	17世紀後半？	12.0	—	—	内外面灰釉	9-1	30
10	陶器	鉢	唐津	17世紀前半？	(12.4)	—	—	内外面灰釉	11-2	28
11	陶器	鉢	唐津	17世紀前半？	—	—	—	内外面灰釉	10-9	14
12	陶器	鉢	唐津	17世紀前半？	—	8.8	—	内外面灰釉　高台畳付に輪付着　高台内は無釉	10-8	13
13	陶器	鉢	唐津	17世紀前半？	—	(10.0)	—	内外面灰釉　高台畳付に輪付着　高台内は無釉	10-10	17
14	陶器	皿	唐津		—	7.25	—	内面灰釉　外面無釉　内底面に鉄絵草花文	11-1	26
15	陶器	皿	唐津	不明	—	5.5	—	内外面灰釉　高台畳付無釉　高台内端釉　内面は同心円状の白化粧土	9-8	21
16	陶器	碗	大堀相馬		—	—	—	内外面白濁釉	10-4	40
17	陶器	鉢	瀬戸美濃	不明	—	—	—	内外面灰釉	11-3	32
18	陶器	碗	瀬戸美濃	16世紀後半	—	—	—	内外面天目釉	9-3	37
19	陶器	皿	瀬戸美濃	16世紀前半	—	—	—	内外面灰釉	9-6	18
20	陶器	皿	瀬戸美濃	17世紀前半？	—	—	—	内外面灰釉　削出高台内にリング状の目跡	11-4	33
21	陶器	皿	唐津		—	—	—	内外面灰釉　内面には白化粧土による波状文	11-5	39
22	陶器	皿	大堀相馬		—	3.4	—	内外面灰釉　見込内に多角形押印文　畳付・高台内は無釉	10-1	27
23	陶器	香炉	瀬戸美濃	不明	—	—	—	外面灰釉　内面無釉　脚部は貼り付け	11-10	41
24	陶器	擂鉢	在地？	18世紀代	—	—	—	口縁内外面に鉄釉	11-8	15
25	陶器	擂鉢	在地？	18世紀代	—	—	—	内外面の上部に鉄釉	11-9	16
26	陶器	擂鉢	在地	18世紀代	—	(7.2)	—	外面鉄釉　外底面回転糸切未調整	12-2	39
27	土器	ふせこま	在地		—	(7.2)	—	外底面回転糸切未調整　外底面一部に煤付着	12-5	23
28	土製品	焙烙	在地	不明	—	—	—	内外面に鉄滓付着	12-6	49
29	石製品	砥石		不明	9.5	6.4	1.9	3面使用	12-7	9
30	金属製品	煙管吸口		不明	—	0.9	0.9	重量2.5g	12-9	163
31	金属製品	煙管吸口		19世紀	5.95	1.19	1.2	羅宇攻存　重量6.5g	12-8	163
32	金属製品	楔		不明	4.9	0.9	0.4	重量5.5g	12-27	167
33	金属製品	楔		不明	7.28	1.3	0.35	重量15.6g	12-26	164

第37図　A区遺構外出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
34	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	25.12	19.19	1.63	3.45		12-22	137

2．B区（第38図）

B区で検出された遺構は近世墓壙19基、土坑4基である。近世墓は墓碑が遺存した畦畔状の高まりの北側でほぼ列状に検出した。また土坑は調査区南東隅で確認したが、大半は調査区外へと展開しており、全容は不明である。本来は墓壙の可能性も推量できるが、覆土中からは人骨及び銭貨等の副葬品が出土しておらず、ここでは土坑として取り扱う。以下にこれらの遺構の概要を記す。なお、出土人骨については東北大学歯学部歯学研究科に鑑定を依頼し、その詳細については巻末に掲載している。

a．近世墓壙

SG01墓壙（第39・40図）

X6Y6グリッドに位置する。堆積土に表土を混入していることから改葬が行われた可能性が考えられる。しかしながら、墓の形態は木片が若干残存することから木棺墓と思われ、掘り方形状が隅丸方形であること、及び底面で部分的に棺箱底板と考えられる方形の痕跡が残存していたことから方形木棺墓であった可能性が高い。墓壙の規模は長軸102㎝、短軸96㎝、確認面からの深さは16㎝である。

遺物は銭貨（寛永通寶）、煙管、人骨片が底面からやや上方で出土している。

SG02墓壙（第39・41～43図）

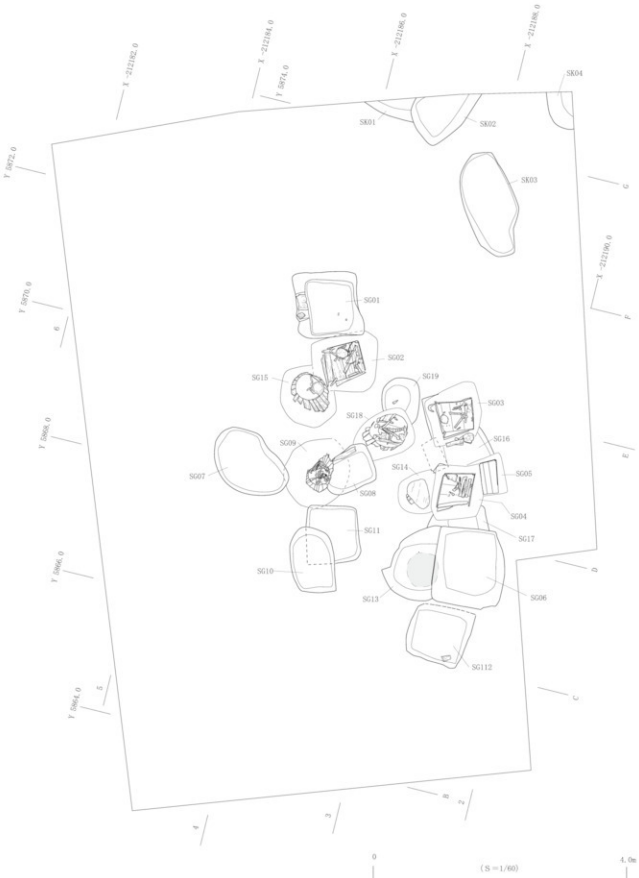
X4Y6グリッドに位置する。上部は削平を受けているが、墓の形態は正方形木棺墓である。SG09と重複関係にあり、これより新しい。掘り方形状は隅丸方形であり、規模は長軸110㎝、短軸89㎝、確認面からの深さは29㎝である。木棺墓は側板、底板とも比較的良好に遺存し、内側の四隅には約１寸角の隅柱が残るが、南西隅のものは底面に倒伏している。なお、側板と隅柱は釘等によって連結されていなかった。棺の規模は東西辺が53㎝、南北が51㎝、深さは33㎝である。

遺物は銭貨（寛永通寶）、煙管、数珠玉、簪、人骨片が底面から出土している。このうち銭貨及び数珠玉は中央部から東側にまとまって散布し、一部は人骨の直下からも確認している。また簪は頭骨の直下から出土している。

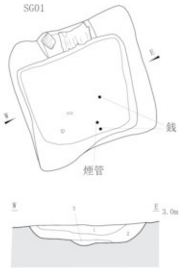
SG03墓壙（第39・44・45図）

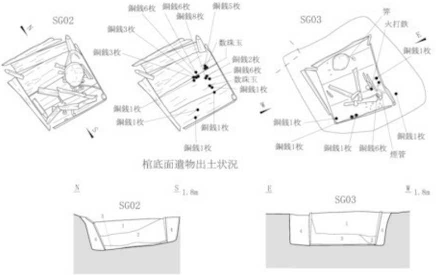
X2Y4グリッドに位置する。上部は削平を受けているが、墓の形態は正方形木棺墓である。SG16と重複関係にあり、これより新しい。掘り方形状は不整方形であり、規模は長軸85㎝、短軸83㎝、確認面からの深さは26㎝である。木棺墓は側板、底板とも比較的良好に遺存し、内側の四隅には約1寸角の隅柱が残る。棺の規模は東西辺が58㎝、南北が59㎝、深さは27㎝である。

遺物は銭貨（寛永通寶）、煙管、火打鉄、笄、火打石、人骨片が底面から出土している。このうち銭貨は中央部から南側にまとまって散布し、一部は人骨の直下からも確認している。また笄は頭骨の直下から出土している。



第38図　B区遺構全体図





SG02土層注記

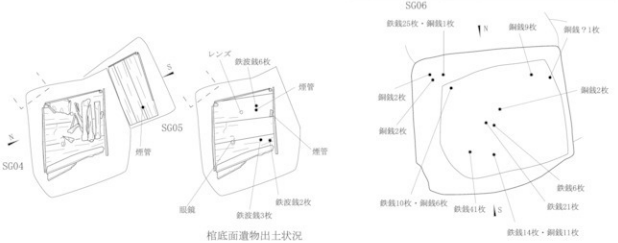
層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(7.5YR3/3)	砂質シルト	腐食土を少量含む。
2	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	砂質シルト	黄褐色粘土・暗オリーブ色砂混入。上層にマンガン含む。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	骨などの腐食物で構成。

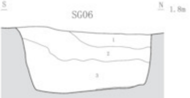
SG01土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰褐色	(7.5YR4/2)	砂質シルト	灰白色粘土ブロックを多量含む。
2	褐灰色	(10YR4/1)	砂質シルト	炭化物少量含む。
3	褐灰色	(10YR4/1)	粘質シルト	灰白色粘土ブロックを多量含む。

SG03土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰オリーブ色	(5Y5/2)	砂質シルト	マンガン・骨片を少量含む。
2	灰オリーブ色	(5Y5/2)	シルト	マンガン少量。下層に骨混入。
3	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土ブロック少量含む。
4	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	黒褐色粘土を多量含む。





SG06土層注記

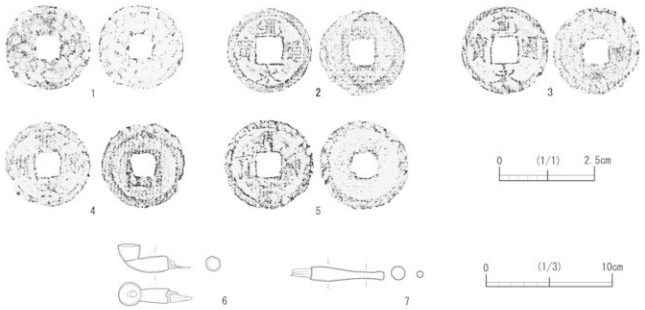
層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂	褐鉄化した砂層。灰黄色粘土ブロック多量含む。
2	暗灰黄色	(2.5Y5/2)	粘質シルト	褐灰色砂とマンガン混入。銭貨出土層。
3	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	粘質シルト	マンガンやや多く含む。底面に残存状況劣悪な底板あり。

SG04・05土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰オリーブ色	(5Y4/2)	砂質シルト	マンガン・骨片少量含む。
2	黒色	(10YR2/1)	粘質シルト	腐食した骨，銭貨を出土。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	黒褐色粘土を多量含む。
4	灰黄褐色	(10YR4/2)	粘質シルト	マンガンやや多く含む。
5	褐灰色	(10YR4/1)	砂質シルト	マンガン少量，暗褐色土を含む。

0 (1/30) 1.0m

第39図　SG01～06　近世墓壙



第40図 SG01墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.84	17.77	1.07	1.57		13-1	イ23
2	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.49	18.15	0.82	1.60		13-2	イ24-1
3	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.43	18.01	1.12	2.09		13-3	イ24-2
4	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.81	17.89	0.75	1.84		13-4	イ24-3
5	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.73	19.55	0.93	2.07		13-5	イ24-4

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
6	金属製品	煙管雁首		19世紀	4.0	1.85	1.15	羅宇残存 重量7.5g	18-13	イ70
7	金属製品	煙管吸口		19世紀	5.9	1.15	1.1	羅宇残存 重量5.0g	18-14	イ71

第40図 SG01近世墓壙出土遺物

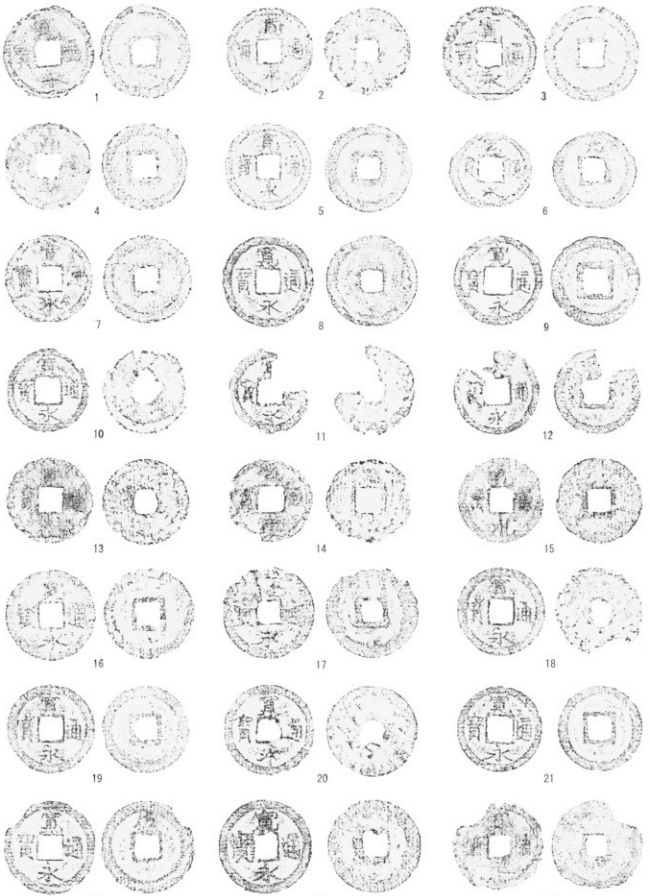
SG04墓壙（第39・46図）

X2Y4グリッドに位置する。上部は削平を受けているが、墓の形態は正方形木棺墓である。SG05・14・16・17と重複関係にあり、これら全てより新しい。掘り方形状は不整方形であり、規模は長軸84cm、短軸80cm、確認面からの深さは22cmである。木棺墓は側板、底板とも比較的良好に遺存し、内側の四隅には約1寸角の隅柱が残る。棺の規模は東西辺が54cm、南北が48cm、深さは27cmである。

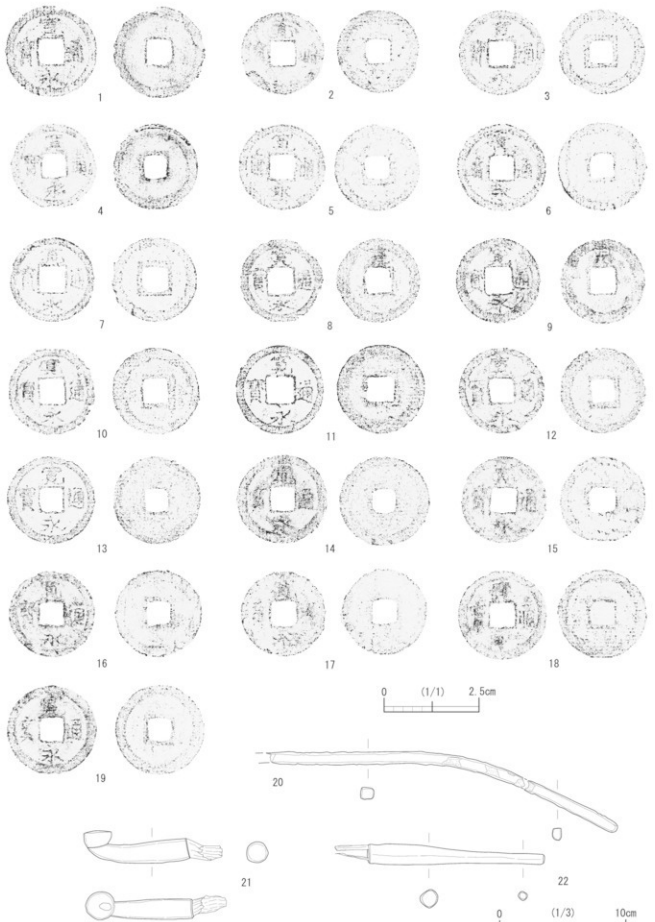
遺物は銭貨（寛永通寶鉄波銭）、煙管、眼鏡、人骨片が底面から出土している。このうち銭貨は西側に散布し、一部は人骨の直下からも確認している。また眼鏡は左目のレンズのみが人骨下から出土し、かつ一部を破損していた。棺底面付近の土壌を全て採集して洗浄を行ったものの未発見であることから、当初から破損していたものを副葬したものと思われる。

SG05墓壙（第39・47図）

X2Y4グリッドに位置する。上部は削平を受けているが、墓の形態は正方形木棺墓である。SG04、及びSG16と重複関係にあり、SG04より古く、SG16より新しい。掘り方形状は方形を呈するものと思われ、規模は東西60.5cm、確認面からの深さは11cmである。木棺墓は東側及び南側



第41図　SG02近世墓壙出土遺物・1



第42図　SG02近世墓壙出土遺物・2

1

2

■・・・黒漆　■・・・朱漆

0 (1/3) 10cm

第43図　SG02近世墓壙出土遺物・3

第41図　B区SG02墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.49	19.05	1.12	2.81		13-6	イ28-1
2	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.35	19.95	1.50	2.32		13-7	イ28-2
3	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	25.47	20.01	1.10	2.69		13-8	イ28-3
4	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.21	16.90	0.92	1.98		13-9	イ28-4
5	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.57	18.22	1.03	2.71	虎の尾	13-10	イ28-5
6	銭貨	寛永通寶	背元字銭	寛保元年(1741)	22.61	16.34	1.24	1.76		13-11	イ28-6
7	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.29	20.60	1.09	2.42		13-12	イ28-7
8	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.81	18.24	1.45	3.33		13-13	イ28-8
9	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.19	19.68	1.22	2.75		13-14	イ28-9
10	銭貨	寛永通寶	無背銭？	元禄11年(1698)	22.62	16.88	1.97	2.40	2枚錆着	13-15	イ28-10
11	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.45	19.31	1.64	1.18		13-16	イ28-11
12	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.70	19.10	1.00	1.73		13-17	イ28-12
13	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.23	18.59	1.15	2.59		13-18	イ28-13
14	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.88	20.56	1.05	1.63		13-19	イ28-14
15	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.12	18.03	0.87	1.72		13-20	イ28-15
16	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.40	19.86	1.23	2.64		13-21	イ28-16
17	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.57	19.02	1.04	2.26		13-22	イ28-17
18	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)				(2.31)	(破損)	13-23	イ28-18
19	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.33	18.06	0.95	2.62		13-24	イ28-19
20	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.32	18.53	1.23	2.87		13-25	イ28-20
21	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.85	16.25	1.13	2.61		13-26	イ28-21
22	銭貨	寛永通寶	背佐字銭	享保2年(1717)	24.72	17.83	0.83	2.20		13-27	イ28-22
23	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.76	19.38	1.29	3.09		13-28	イ28-23
24	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.42	17.92	1.24	2.52		13-29	イ28-24

第42図　B区SG02墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.40	19.14	0.78	1.91		13-30	イ28-25
2	銭貨	寛永通寶	背足字銭	元文4年(1738)	22.41	16.76	1.05	1.91		14-1	イ28-26
3	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.86	17.66	1.12	2.79		14-2	イ28-27
4	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.09	17.50	1.27	2.93		14-3	イ28-28
5	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.51	17.82	1.15	2.34		14-4	イ28-29
6	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.40	18.55	1.06	2.69		14-5	イ28-30
7	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.04	18.70	1.04	2.43		14-6	イ28-31
8	銭貨	寛永通寶	背元字銭	寛保元年(1741)	21.99	17.83	0.93	1.18		14-7	イ28-32
9	銭貨	寛永通寶	背元字銭	寛保元年(1741)	22.06	17.52	0.88	1.37		14-8	イ28-33
10	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.06	18.15	0.95	2.20		14-9	イ28-34
11	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.32	17.82	1.13	2.37		14-10	イ28-35
12	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.23	17.82	1.04	1.91		14-11	イ28-36
13	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.04	17.89	0.99	2.48		14-12	イ28-37
14	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.25	19.13	0.90	2.20		14-13	イ28-38
15	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.21	18.41	0.85	1.71		14-14	イ28-39
16	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	22.77	18.40	1.08	2.51		14-15	イ28-40
17	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	22.37	18.37	0.99	1.72		14-16	イ28-41
18	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.48	18.70	1.02	2.35		14-17	イ28-42
19	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	23.66	18.74	0.91	1.86		14-18	イ28-43

第42図　HSSG02墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
20	金属製品	簪		不明	18.6	0.6	0.7	銅製品　重量17g	18-29	450
21	金属製品	煙管雁首		19世紀	5.7	1.5	1.1	膨字残存　重量9.5g	18-15	451
22	金属製品	煙管吸口		19世紀	9.35	1.1	1.0	膨字残存　重量9.0g	18-16	452

第43図　HSSG02墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	漆器	椀		不明	—	5.2	—	外面及び高台内黒漆　内面朱漆　高台内に朱漆で銘	19-6	477
2	漆器	椀		不明	—	—	—	内外面朱漆	19-7	478

側板のみが残存し、底板も北側のものを欠く。また南東及び南西隅には約1寸角の隅柱が残る。棺の規模は東西辺が50cm、南北が27cm、深さは12cmである。

遺物は煙管が棺内堆積土中から出土している。

SG06墓壙（第39・48～50図）

X2Y2グリッドに位置する。堆積土に表土を混入していることから改葬が行われた可能性が考えられる。しかしながら、墓の形態は木片が堆積土中に若干残存することから木棺墓と思われ、掘り方形状が方形であること及び底面で部分的に棺箱底板と考えられる方形の痕跡が残存していたことから方形木棺墓であった可能性が高い。SG13・17と重複関係にあり、これらより新しい。墓壙の規模は長軸120cm、短軸111cm、確認面からの深さは44cmである。

遺物は銭貨（寛永通寶）、人骨片が堆積土中から出土している。このうち銭貨は10枚以上が錆着したものが4塊出土した。これらは表面上に繊維状の付着物が認められており、当初は和紙等に包んで副葬された可能性が考えられる。

SG07墓壙（第51・52図）

X6Y4グリッドに位置する。墓の形態は直葬墓と考えられる。墓壙の平面形は楕円形であり、規模は長軸130cm、短軸87cm、確認面からの深さは13.5cmである。

遺物は、人骨片が僅かに出土している。

SG08墓壙（第51図）

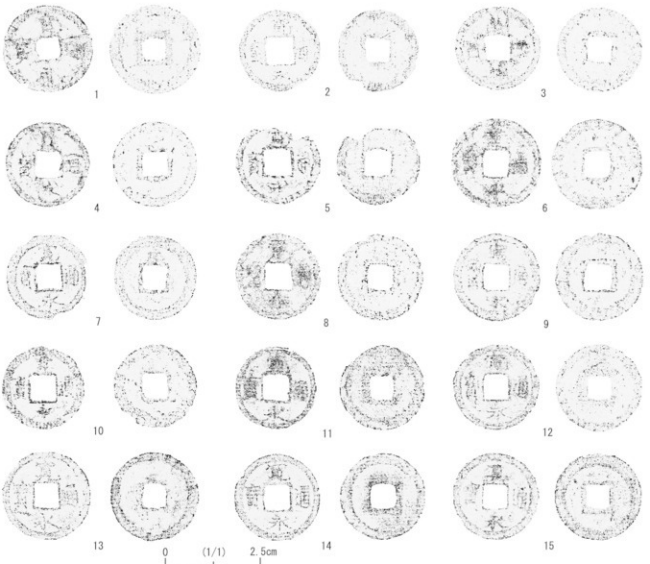
X4Y4グリッドに位置する。堆積土に表土を混入していることから改葬が行われた可能性が考えられる。しかしながら、墓の形態は東側に側板の一部と考えられる木片が残存することから木棺墓と思われ、掘り方形状が方形であることから方形木棺墓であった可能性が高い。SG09と重複関係にあり、これより新しい。墓壙の規模は長軸80cm、短軸61cm、確認面からの深さは21cmである。

遺物は、人骨片と思われる骨片がごく僅かに出土している。

SG09墓壙（第51・52図）

X4Y4グリッドに位置する。墓の形態は円形木棺墓である。SG08と重複関係にあり、これより古い。掘り方形状は楕円形であり、規模は長軸116cm、短軸102cm、確認面からの深さは63cmである。木棺は早桶であり、側板と底板がともに遺存する。棺は土圧によって大きく変形しているが、規模は底板径が38cm、深さは60cmである。

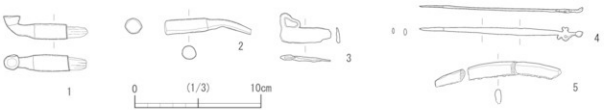
遺物は銭貨（寛永通寶）、煙管、人骨が底面から出土している。このうち銭貨は西側に散布し、



第44図 SGO3墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.17	20.88	1.38	2.74		14-19	代26-1
2	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.79	17.75	1.19	2.23		14-20	代26-2
3	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.84	19.03	1.31	2.24		14-21	代26-3
4	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.46	17.50	1.08	2.50		14-22	代26-4
5	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.87	19.72	1.27	1.25		14-23	代26-5
6	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.29	19.93	0.83	1.80		14-24	代26-6
7	銭貨	寛永通寶	背元字銭	寛保元年(1741)	22.79	18.46	1.25	2.42		14-25	代26-7
8	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.94	19.07	1.11	2.27		14-26	代26-8
9	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.58	17.21	0.97	2.27		14-27	代26-9
10	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.15	16.89	0.88	1.46		14-28	代26-10
11	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.82	19.64	1.18	3.23		14-29	代26-11
12	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.15	19.92	1.06	1.94		14-30	代26-12
13	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.55	19.69	0.98	2.41		14-31	代26-13
14	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.01	16.14	0.70	1.69		14-32	代26-14
15	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.28	18.85	0.84	2.02		15-1	代26-15

第44図　SG03近世墓壙出土遺物・1



第45図 BIKSG03墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
16	金属製品	煙管雁首		19世紀	5.05	1.3	1.2	縞宇残存 重量14.6g	19-18	代58
17	金属製品	煙管吸口		19世紀	6.9	1.1	1.05	重量8.5g	19-17	代53
18	金属製品	火打鉄		不明	(4.05)	2.4	03	重量3.0g	19-28	代59
19	金属製品	笄		不明	(13.0)	1.1	0.25	総重量3.0g	19-30	代60
20	木製品	櫛		不明	—	1.2	0.45	重量3.5g	19-8	代76

第45図　SG03近世墓壙出土遺物・2

一部は人骨の直下からも確認している。

SG10墓壙（第51・52図）

X4Y2グリッドに位置する。SG11墓の形態は直葬墓と考えられる。SG11と重複関係にあり、これより新しい。墓壙の平面形は方形であり、規模は長軸103cm、短軸69cm、確認面からの深さは113.5cmである。

遺物は、銭貨（寛永通寶）のほか、人骨片が極僅かに出土している。

SG11墓壙（第51図）

X4Y2グリッドに位置する。墓の形態は直葬墓と考えられる。SG10と重複関係にあり、これより古い。墓壙の平面形は楕円形であり、規模は長軸92cm、短軸81cm、確認面からの深さは9cmである。

遺物は、出土していない。

SG12墓壙（第51・52図）

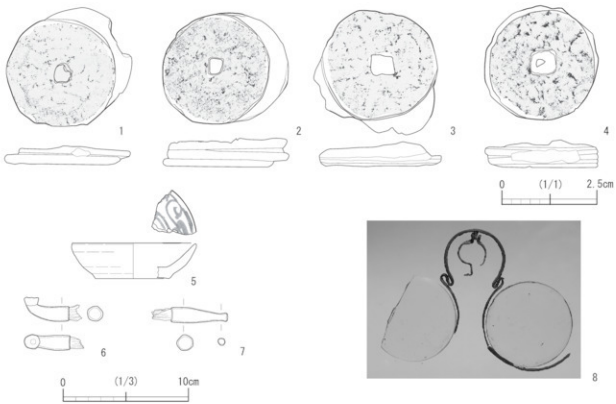
X2Y2グリッドに位置する。堆積土に表土を混入していることから改葬が行われた可能性が考えられる。しかしながら、墓の形態は木片が堆積土中に若干残存することから木棺墓と思われ、掘り方形状が方形であること及び底面で部分的に棺箱底板と考えられる方形の痕跡が残存していたことから方形木棺墓であった可能性が高い。墓壙の規模は長軸95cm、短軸90cm、確認面からの深さは44cmである。

遺物は、銭貨（寛永通寶）のほか、人骨の可能性がある骨片がごく僅かに出土している。

SG13墓壙（第51・52図）

X2Y2グリッドに位置する。堆積土に表土を混入していることから改葬が行われた可能性が考えられる。しかしながら、墓の形態は北側の一部に木片が残存することから木棺墓と思われ、掘り方形状がほぼ円形を呈することから円形木棺墓であった可能性が高い。SG06と重複関係にあり、これより古い。墓壙の規模は東西114cm、確認面からの深さは62.5cmである。

遺物は、銭貨（寛永通寶）と提灯の底板の可能性がある不明木製品のほか、人骨片が少量出土している。



第46図　SG04近世墓壙出土遺物

第47図　SG05近世墓壙出土遺物

第46図 BXSG04墓壙出土銭貨観察表

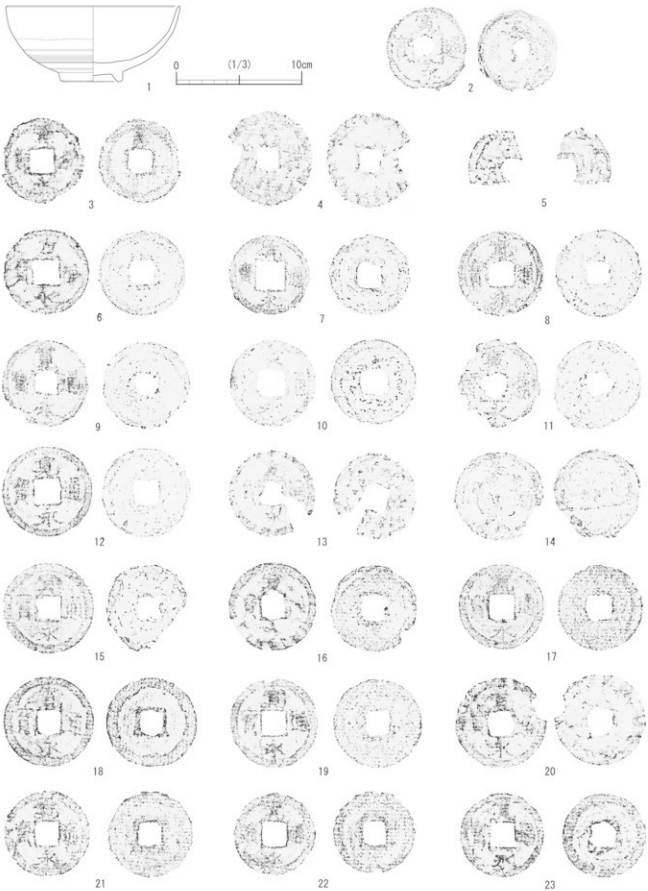
No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径 (mm)	内径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	鉄四文銭	万延元年(1861)	28.22	19.71	(3.77)	(6.35)	2枚錆着	15-2	イ15
2	銭貨	寛永通寶	鉄四文銭	万延元年(1861)	28.95	18.57	(7.22)	(14.45)	4枚錆着	15-3	イ16
3	銭貨	寛永通寶	鉄四文銭	万延元年(1861)	30.64	21.01	(6.06)	(4.15)	2枚錆着	15-4	イ17
4	銭貨	寛永通寶	鉄四文銭	万延元年(1861)	28.29	25.38	(6.65)	(0.92)	3枚錆着	15-5	イ18

第46図 BXSG04墓壙出土遺物観察表

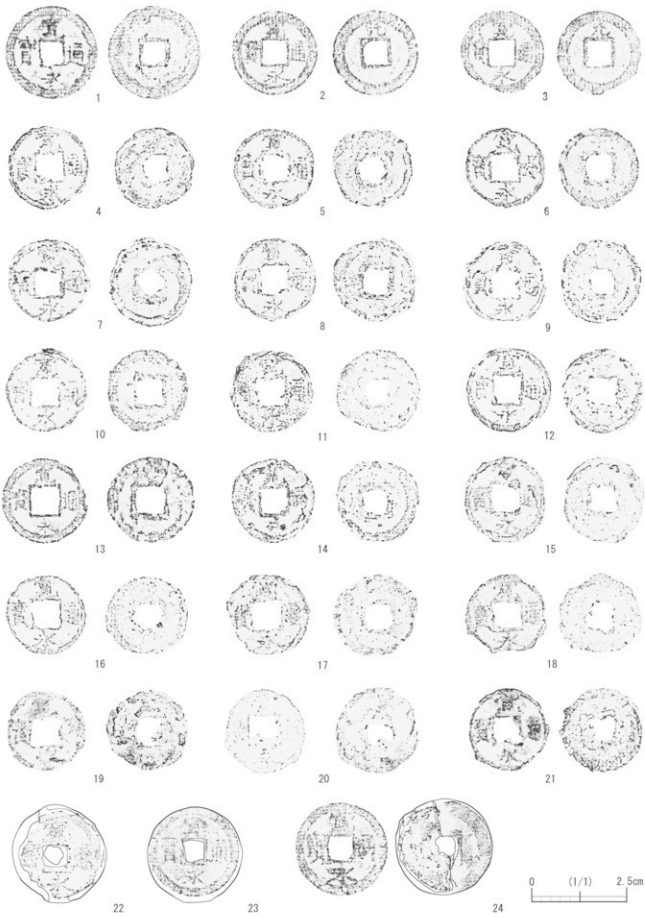
No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真番号	登録番号
5	陶器	皿	瀬戸美濃？	不明	(9.6)	(6.0)	(2.8)	内外面灰石釉 内面に鉄絵唐草文	19-4	11
6	金属製品	煙管雁首		19世紀後半	3.6	1.2	1.2	銅字残存 重量8.0g	18-20	イ55
7	金属製品	煙管吸口		19世紀後半	4.57	1.25	1.25	銅字残存 重量7.5g	18-19	イ54
8	金属製品	眼鏡		19世紀後半？	—	—	—	支柱式天秤眼鏡 フレームは真鍮製 残存時重量■g	18-21	A

第47図 BXSG05墓壙出土遺物観察表

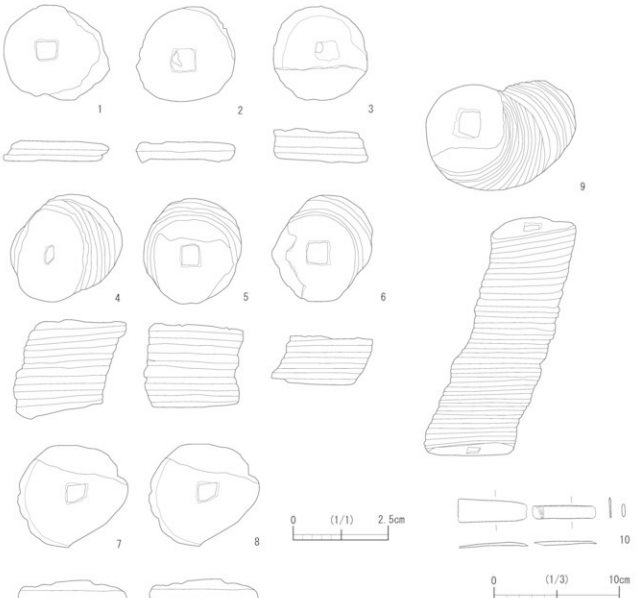
No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	器高・厚 (cm)	備考	写真番号	登録番号
1	陶器	碗	大堀相馬		11.0	—	—	内外面灰釉	19-2	6
2	陶器	碗	大堀相馬		—	4.8	—	内外面灰釉 登付・高台内は無釉	19-3	7
3	金属製品	煙管雁首		19世紀	4.3	1.8	0.85	銅字残存 重量4.5g	18-21	イ56



第48図　SG06近世墓壙出土遺物・1



第49図　SG06近世墓壙出土遺物・2



第50図 B15SG06墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
1	陶器	碗	大堀相馬	17世紀末～18世紀前葉	13.8	4.9	6.0	内面及び口縁部外面灰釉 体部及び高台内鉄釉 畳付無釉	19-1	55

第50図 B15SG06墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
2	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.71	18.96	1.79	2.16		15-6	図31-1
3	銭貨	寛永通寶	背元字銭	寛保元年(1741)	22.55	17.21	1.18	1.52		15-7	図31-2
4	銭貨	不明	不明					(2.25)	(磁損)	15-8	図31-3
5	銭貨	不明	不明					(0.37)	(磁損)	15-9	図31-4
6	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.03	20.11	1.24	2.96		15-10	図31-5
7	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.61	18.99	1.51	2.63		15-11	図31-6
8	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.12	17.64	1.37	3.15		15-12	図31-7
9	銭貨	寛永通寶	無背銭？	元禄11年(1698)	23.78	19.97	0.61	2.60		15-13	図31-8
10	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.09	20.47	1.72	3.13		15-14	図31-9
11	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.25	20.38	(12.79)	(16.14)	9枚錆着	15-16	図31-11
12	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.71	17.75	1.20	2.83		15-17	図31-12
13	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)				(2.22)	(磁損)	15-18	図31-13

第50図　SG06近世墓壙出土遺物・3

第48図　BESG06墓壙出土銭貨観察表

14	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)				(1.39)	(破損)	15-19	図-14
15	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.48	19.55	(2.95)	(4.19)	2枚錆着　裏面は鉄一文銭　第49図25と同一	15-20	図-15
16	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.46	18.86	1.09	1.97		15-21	図-16
17	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.68	20.24	0.96	2.22		15-22	図-17
18	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.36	17.31	1.09	2.94		15-23	図-18
19	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.69	17.62	0.99	2.50		15-24	図-19
20	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.29	19.52	1.15	2.38		15-25	図-20
21	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.63	16.94	0.80	1.96		15-26	図-21
22	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.89	20.19	1.10	2.53		15-27	図-22
23	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.34	18.71	0.87	1.83		15-28	図-23

第49図　BESG06墓壙出土銭貨観察表

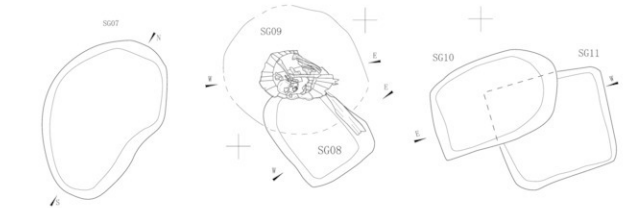
No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.69	20.82	1.15	3.45		15-29	図-24
2	銭貨	寛永通寶	背元字銭	寛保元年(1741)	22.15	20.35	1.08	2.23		16-2	図-26
3	銭貨	寛永通寶	背元字銭	寛保元年(1741)	22.73	18.23	0.94	1.66		16-3	図-27
4	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.25	17.85	2.33	2.12		16-4	図-28
5	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	21.74	17.47	1.65	1.84		16-5	図-29
6	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.20	17.04	1.42	2.04		16-6	図-30
7	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.74	18.57	2.08	2.80	錆付着	16-7	図-31
8	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.35	18.43	1.97	2.01		16-8	図-32
9	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.41	17.30	1.87	2.03		16-9	図-33
10	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	21.83	18.09	1.84	1.79		16-10	図-34
11	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.20	19.32	2.74	2.43		16-11	図-35
12	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.45	18.67	2.01	2.07		16-12	図-36
13	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)				(1.82)	(破損)	16-13	図-37
14	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.41	20.45	1.59	1.72		16-14	図-38
15	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.43	18.73	1.51	1.70		16-15	図-39
16	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	21.60	18.72	1.79	2.23		16-16	図-40
17	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)				(1.38)	(破損)	16-17	図-41
18	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	21.48	18.62	1.92	1.75		16-18	図-42
19	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)				(1.54)	(破損)	16-19	図-43
20	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)				(2.40)	(破損)	16-20	図-44
21	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)				(2.17)	(破損)	16-21	図-45
22	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.52	20.65	(3.67)	(4.04)	2枚錆着	15-5	図-18
23	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.48	19.55	(2.95)	(4.19)	2枚錆着　裏面は鉄一文銭　第48図15と同一		図-13
24	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.42	19.85	(2.72)	(3.85)	2枚錆着	16-1	図-25

第50図　BESG06墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	24.58	21.58	(5.29)	(3.68)	鉄一文銭3枚錆着	17-22	図40-1
2	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	24.52	20.95	(4.42)	(3.27)	鉄一文銭2枚錆着	17-23	図40-2
3	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	23.22	19.85	(8.37)	(6.73)	鉄一文銭5枚錆着	17-24	図40-3
4	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.93	19.78	(22.39)	(31.37)	鉄一文銭13枚錆着	17-27	図40-6
5	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	23.46	20.80	(20.06)	(27.97)	鉄一文銭12枚錆着	17-28	図40-7
6	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.67	19.44	(12.55)	(15.91)	鉄一文銭9枚錆着	15-16	図40-8
7	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.04	18.75	(8.96)	(10.24)	鉄一文銭6枚錆着	17-26	図40-5
8	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	28.55	24.25	(7.81)	(7.47)	鉄一文銭4枚錆着	17-25	図40-4
9	銭貨	寛永通寶	鉄一文銭	元文4年(1738)	22.39	20.59	(67.12)	(98.26)	鉄一文銭42枚錆着	18-1	図40-9

第50図　BESG06墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
10	施釉製品	皆		不明	—	1.9	0.25	総重量1.9g	19-5	図40-10



SG07土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	マンガン少量含む。
2	灰黄褐色	(10YR4/2)	粘質シルト	マンガン多く、底面に褐炭色砂を帯状に含む。

SG08土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	灰褐色粘土ブロック含む。

SG09土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	灰黄褐色	(2.5Y5/2)	砂質シルト	マンガンブロック中 やや多く含む。
2	暗灰色	(10YR3/4)	砂質シルト	木片混入、マンガン やや多く含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	黒褐色粘土を 多量含む。

SG10・11土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	暗灰黄色粘土ブロック含む。
2	暗灰黄色	(2.5Y4/2)	粘質シルト	マンガン微量含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	暗灰黄色粘土ブロック少量含む。

SG13土層注記

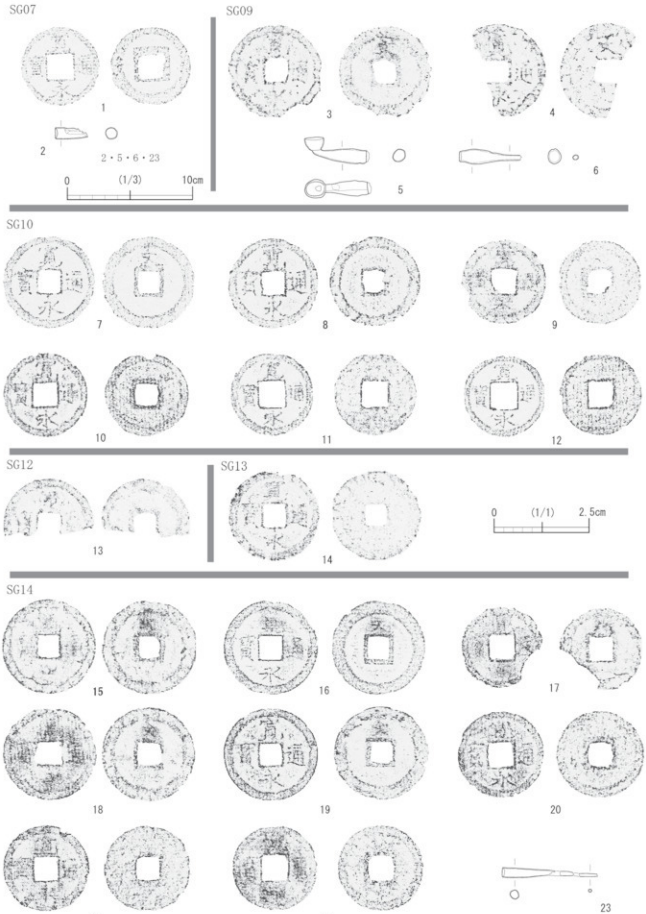
層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	炉ラス片混入、当面特徴。
2	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	暗材混入、精炭出土層。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	黒褐色粘土を 多量含む。

SG13土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト	マンガン多量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黒褐色粘土ブロック、暗材片混入。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト	マンガン少量含む。

0 (1/30) 1.0m

第51図　SG07～14　近世墓壙



第52図　SG07・09・10・12・13・14近世墓壙出土遺物

第52図 HFSG07墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.41	17.98	1.23	1.68		17-21	イ19

第52図 HFSG07墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
2	金属製品	煙管吸口		不明	(3.1)	0.9	0.95	重量2.0g	18-22	イ72

第52図 HFSG09墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
3	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文8年(1668)	24.56	17.70	1.20	2.46		16-22	イ25-1
4	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文8年(1668)				(0.98)	(破損)	16-23	イ25-2

第52図 HFSG09墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
5	金属製品	煙管雁首		19世紀	4.9	1.5	1.0	羅宇残存 総重量5.7g	18-24	イ72-2
6	金属製品	煙管吸口		19世紀	(4.9)	1.2	1.1	羅宇残存 総重量3.8g	18-23	イ72-1

第52図 HFSG10墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
7	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文8年(1668)	24.97	17.85	1.36	3.90		16-24	イ22-1
8	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	24.08	19.08	1.17	3.41		16-25	イ22-2
9	銭貨	寛永通寶	青元字銭	寛保元年(1741)	22.63	16.31	1.01	2.04		16-26	イ22-3
10	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.46	18.55	1.03	2.61		16-27	イ22-4
11	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.09	17.27	0.76	1.26		16-28	イ22-5
12	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.94	17.73	0.92	1.84		16-29	イ22-6

第52図 HFSG12墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
13	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)				(1.20)	(破損)	16-30	イ30

第52図 HFSG13墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
13	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.90	19.92	1.22	2.60		16-31	イ32

第52図 HFSG14墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
15	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文8年(1668)	25.20	18.82	1.31	3.12		16-32	イ33-1
16	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文8年(1668)	25.03	19.51	1.20	2.58		17-1	イ33-2
17	銭貨	寛永通寶	青元字銭	寛保元年(1741)	24.49	18.09	1.25	1.34		17-2	イ33-3
18	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文8年(1668)	24.91	18.45	1.11	2.12		17-3	イ33-4
19	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文8年(1668)	25.14	19.86	1.25	3.23		17-4	イ33-5
20	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.14	19.01	0.98	2.16		17-5	イ33-6
21	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.72	19.14	0.96	2.27		17-6	イ33-7
22	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.11	19.09	1.02	2.48		17-7	イ33-8

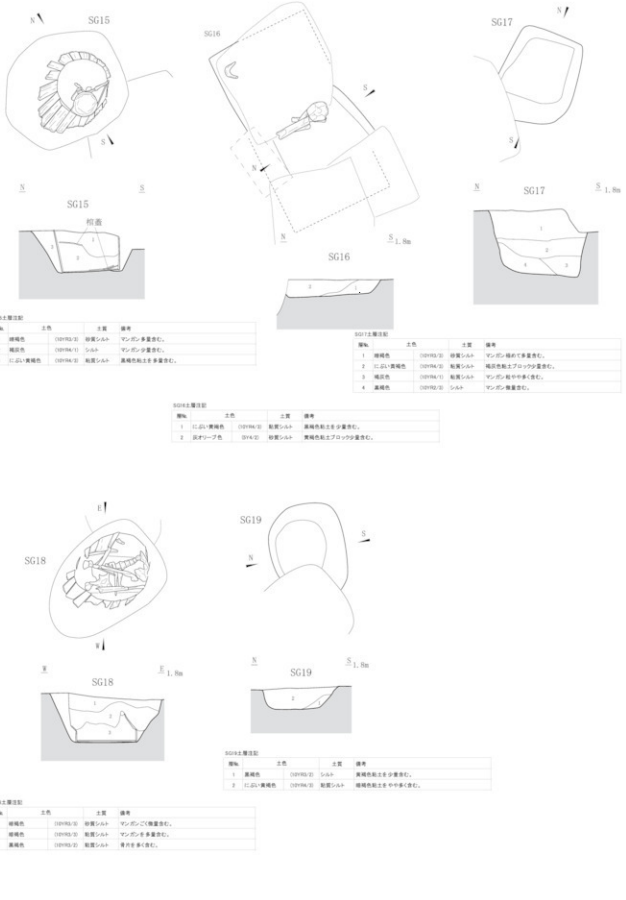
第52図 HFSG14墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
23	金属製品	煙管吸口		18世紀後半	(4.2)	0.78	0.75	総重量4.5g	18-25	イ31

SG14墓壙（第51・52図）

X4Y4グリッドに位置する。上部は削平を受けているが、墓の形態は円形木棺墓である。SG04と重複関係にあり、これより古い。掘り方形状は楕円形を呈するものと考えられるが、南側を失うため詳細は不明である。規模は短軸66㎝、確認面からの深さは10.5㎝である。木棺は早桶であり、側板及び南側の一部を欠くが底板とも遺存状況は劣悪ながらも残存する。規模は底板径が42㎝、深さは9㎝である。

遺物は、銭貨（寛永通寶）、煙管吸口が各面から出土している。



SG15土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	マンガン多量含む。
2	褐灰色	(10YR4/1)	シルト	マンガン少量含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	黒褐色粘土を多量含む。

SG16土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	黒褐色粘土を少量含む。
2	灰オリーブ色	(5Y4/2)	砂質シルト	黄褐色粘土ブロックを含む。

SG17土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	マンガン極めて多量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	褐灰色粘土ブロック少量含む。
3	褐灰色	(10YR4/1)	粘質シルト	マンガン粒やや多く含む。
4	黒褐色	(10YR2/3)	シルト	マンガン微量含む。

SG18土層注記

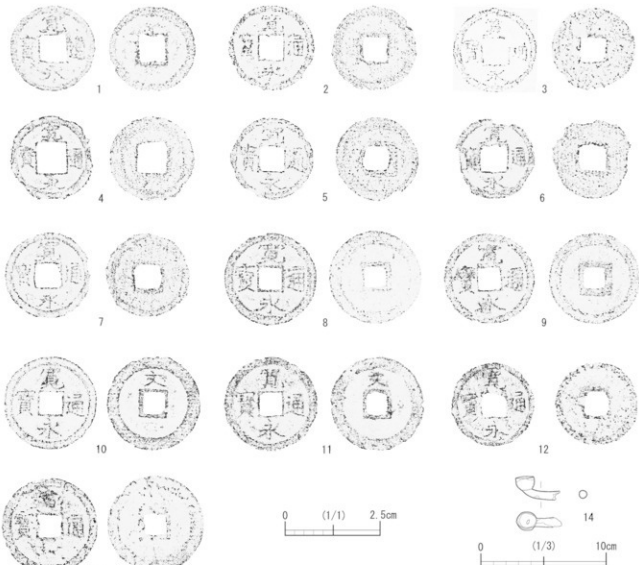
層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/3)	砂質シルト	マンガン少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	マンガンを多量含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト	骨片を多く含む。

SG19土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	黒褐色粘土を少量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	暗褐色粘土をやや多く含む。

0 (1/30) 1.0m

第53図　SG15～19　近世墓壙



第54図 DJSG15墓壙出土銭貨観察表

No	種別	銭種名	分類	初鋳年	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真番号	登録番号
1	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.99	17.89	1.11	1.92		17-8	小20
2	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.29	19.92	0.94	1.94		17-9	小21-1
3	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.98	18.93	1.01	1.08		17-10	小21-2
4	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.93	17.13	0.96	1.88		17-11	小21-3
5	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	22.15	17.02	0.90	1.71		17-12	小21-4
6	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	20.95	15.90	0.78	1.12		17-13	小21-5
7	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	23.12	17.84	0.85	2.27		17-14	小21-6
8	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.34	19.26	1.06	2.73		17-15	小27-1
9	銭貨	寛永通寶	古寛永	寛永16年(1636)	24.33	19.30	1.19	3.14		17-16	小27-2
10	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文9年(1668)	24.78	21.41	1.33	3.03		17-17	小27-3
11	銭貨	寛永通寶	文銭	寛文9年(1668)	25.13	20.47	1.36	3.30		17-18	小27-4
12	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)	21.99	2.01	0.91	1.28		17-19	小27-5
13	銭貨	寛永通寶	無背銭	元禄11年(1698)				(2.06)	(破損)	17-20	小27-6

第54図 DJSG15墓壙出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長(cm)	底径・幅(cm)	器高・厚(cm)	備考	写真番号	登録番号
14	金属製品	煙管雁首		18世紀後半	3.5	1.5	0.7	重量2.5g	18-26	小75

第54図　SG15近世墓壙出土遺物

SG15墓壙（第53・54図）

X6Y4グリッドに位置する。墓の形態は円形木棺墓である。SG08と重複関係にあり、これより古い。掘り方形状は円形であり、規模は長軸101㎝、短軸86㎝、確認面からの深さは35㎝である。木棺は早桶であり、側板及び底板とも遺存する。棺は土圧によって大きく変形しているが、規模は底板径が42㎝、深さは33㎝である。なお、この墓壙では棺底面付近から大量の籾殻が検出されている。棺蓋の一部がこの籾殻の上部で認められていることから、埋葬に際して予め棺内に籾殻を敷き詰めたものと思われる。

遺物は銭貨（寛永通寶）、煙管、人骨片が底面から出土している。しかしながら、いずれも籾殻が大量に付着することによって遺存状態は極めて劣悪であった。また掘り方から漆器が出土しているが、こちらも遺存状態は同様に劣悪であった。

SG16墓壙（第53図）

X2Y4グリッドに位置する。墓の形態は直葬墓と考えられる。SG03・04と重複関係にあり、これより古い。墓壙の平面形は両者によって切られているため不明である。確認面からの深さは19㎝である。

遺物は、底面から人骨片が出土している。

SG17墓壙（第53図）

X2Y4グリッドに位置する。堆積土に表土を混入していることから改葬が行われた可能性が考えられ、また湧水が激しく底面で棺痕跡の把握が不可能だったことにより墓の形態は不明である。SG04・06と重複関係にあり、これより古い。墓壙の平面形は両者によって切られているため不明である。確認面からの深さは54㎝である。

遺物は、銭貨（寛永通寶）が出土している。

SG18墓壙（第53図）

X4Y4グリッドに位置する。墓の形態は円形木棺墓である。SG18と重複関係にあり、これより新しい。掘り方形状は楕円形であり、規模は長軸104㎝、短軸68㎝、確認面からの深さは21㎝である。木棺は早桶であり、側板及び底板とも遺存する。棺は土圧によって大きく変形しているが、規模は底板径が53㎝、深さは19㎝である。

遺物は掘り方より漆器が出土しているが、遺存状態は劣悪であった。

SG19墓壙（第53図）

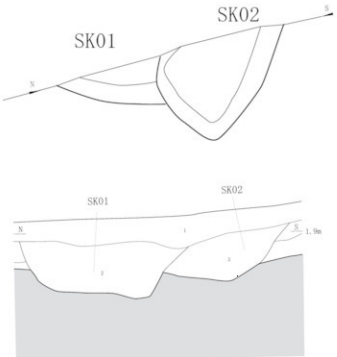
X4Y4グリッドに位置する。墓の形態は棺材が未出土であることから直葬墓と考えられる。SG19と重複関係にあり、これより古い。墓壙の平面形は楕円形であり、規模は短軸60㎝、確認面からの深さは37㎝である。

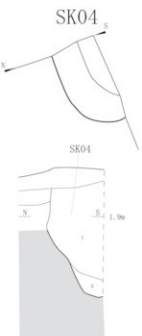
遺物は、出土していない。

b．土坑

SK01土坑（第55図）

X6Y10グリッドに位置する。SK02と重複関係にあり、これより新しい。東側は調査区外へ展開





SK01・02土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	耕作土。
2	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	マンガン少量、黒褐色砂質シルトブロック含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	マンガン微量含む。

SK03土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	鉄分と一部化物微量含む。
2	灰黒褐色	(10YR4/2)	粘質シルト	マンガン少量含む。

SK04土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	マンガン微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	マンガン微量含む。

第55図　SK01～04　土坑

するため全体形状や長軸は不明である。確認面からの深さは約20㎝であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は1層であり、人為的埋土である。

遺物は、出土していない。

SK02土坑（第55図）

X4Y10グリッドに位置する。SK01と重複関係にあり、これより古い。東側は調査区外へ展開するため全体形状や長軸は不明であるが、短軸40㎝を測る。確認面からの深さは約28㎝であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は、堆積土中から薬剤を入れていたと思われる小瓶が1点出土している。

SK03土坑（第55図）

X4Y8グリッドに位置する。平面形状は楕円形であり、規模は長軸83㎝、短軸41㎝を測る。確認面からの深さは約25.5㎝であり、断面形状は箱形を呈する。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は、出土していない。

SK04土坑（第55図）

X2Y10グリッドに位置する。東側及び南側は調査区外へ展開するため全体形状などは不明であるが確認面からの深さは約40㎝を測る。堆積土は2層に分層でき、全て人為的埋土である。

遺物は、平瓦片が１点出土している。

第Ⅳ章　考察

本調査では、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、井戸跡、小柱穴群、小溝状遺構、近世墓壙、性格不明遺構を検出し、各遺構から近世陶磁器、金属製品、石製品などの遺物を発見した。

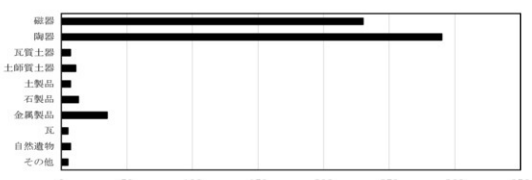
本項では、調査区ごとに遺構と遺物を検討し、概要について記述する。

1．A区

遺物について

A区では、国内産陶磁器、瓦質土器、土師質土器、土製品、石製品、金属製品、瓦、自然遺物が出土している。遺物の出土総数は610点で、これらのうち近世の国内産陶磁器が全体の8割以上を占める。一方、国内産陶磁器以外の出土量は極めて少なく、遺存状態が良好な遺物も僅かである。

表１　遺物出土点数表



磁器は染付が多く、生産地は肥前、瀬戸・美濃、平清水もしくは切込などで構成される。このうち出土数の主体を占めるのが肥前系磁器であり、概ね17世紀代の年代観を有する。器種構成では碗類が最も多く、次いで皿類が多いなど、日常生活に関わるものが目立つ。染付以外では白磁、青磁がみられるが、このうち白磁型押皿（第37図3）は内面に型抜き梅花文が施されている。

陶器の生産地は瀬戸・美濃、大堀相馬、小野相馬、唐津、肥前系、堤系、平清水などで構成される。出土量は大堀相馬が最多であるが、次いで瀬戸・美濃や唐津が多い傾向を示す。瀬戸・美濃産陶器は16世紀末～17世紀初頭の大窯製品が多く、このうちSK27土坑から出土した大皿（第27図11）は体部内面に6条の沈線文が施されている。器種は碗、皿が主体を占め、それ以外にも土瓶、鉢、小壺、擂鉢、香炉などが出土している。

瓦質土器は擂鉢と香炉が出土している。このうちSM285小溝状遺構から出土した擂鉢（第34図5）は、16世紀～17世紀代の在地産と考えられ5条1単位の櫛目が付く。そのほかに香炉や火鉢なども出土しているが、何れも年代は不明である。

土器は土師質土器を小破片も含めて11点確認している。土師質土器は所謂「かわらけ」であり、一部に煤の付着したものが多い。また、土製品はA区全体で7点出土している。このうち在地産の

ものと考えられる坩堝を発見したが、残土からの採取であり年代などの詳細は不明である。

金属製品は銭貨、釘、楔、銙、煙管が出土している。銭貨は北宋銭の元豊通寶、政和通寶と寛永通寶に大別され、寛永通寶はすべて古寛永である。煙管はSM18小溝状遺構から出土した吸口（第34図6）が17世紀後半、SK25土坑から出土した火皿（第27図10）が18世紀前半の年代観を有するが、そのほかは比較的新しい19世紀代の所産と思われる。

自然遺物としては火葬骨、種子、シジミ類と思われる多量の貝、及び鳥類のものと思われる骨を発見した。火葬骨は何れも極めて微量であり、表土掘削時や小溝状遺構などからの出土ということも考慮すると、発見地点での埋葬や散骨によるものとは考えにくい。何らかの理由で他から流入したものと思われる。貝はSK101土坑から、また、鳥の骨はSK106土坑から出土した。種子は小溝状遺構の覆土中からクルミを1点確認している。

遺構について

A区では、掘立柱建物跡や土坑を北側で集中的に確認し、調査区のほぼ全域で小溝状遺構を検出した。また、区画に伴う溝跡や、構築途中の崩落により放棄されたと考えられる井戸跡を発見している。以下、主要な遺構について、特徴や年代などを検討する。

掘立柱建物跡

検出された13棟のうち出土遺物から時期が推測できるものは、柱穴の掘り方埋土から16世紀末頃の瀬戸・美濃産皿が出土しているSB04掘立柱建物跡と、柱痕跡内から17世紀代の所産と考えられる唐津産皿が出土しているSB11掘立柱建物跡のみである。そのほかの建物跡からは、年代推定の根拠となり得る遺物は出土していない。

建物跡同士で重複が認められるものは、SB02、SB03、SB04、SB05、SB06、SB07、SB11掘立柱建物跡と、SB08、SB09掘立柱建物跡である。これらはすべて調査区の北側に位置し、当該地点での継続的な土地利用の様子がうかがえる。また、建物跡の主軸方位は真北から東へ傾くものが多く、これらは概ねN−81°−E（±7°）の振れ幅に収まることから、建物を建て替えた場合、或いは改変を加えた場合でも、基軸はある程度踏襲する傾向にあったと考えられる。

各建物跡の平面形は、桁行3間ないし2間の側柱建物が殆どで、桁行4間を超えるものはSB04、SB06掘立柱建物跡の2棟のみである。これらのうちSB06建物跡は、桁行5間で柱穴の並びや間尺に斉一性が認められるなど、A区で検出した建物跡のなかでも中核的施設だった可能性が高い。

重複関係、出土遺物、主軸方位の違いなどをまとめ、掘立柱建物跡の変遷を復元すると概ね以下の通りになる。なお、時期を決定できる遺物が出土しなかった遺構については、主軸方位や配置によって時期を推定している。

新旧関係
SB11 → SB06 → SB07 → SB04 → SB03 → SB02
SB07 → SB05
SB09 → SB08

重複関係無
SB01、SB10、SB12、SB13

推定時期	掘立柱建物跡	主軸方位	建物規模
16世紀中頃～17世紀前半	SB06	N-10°-W	桁行5間・梁行1間
	SB11	N-80°-E	桁行1間・梁行1間
16世紀後半～17世紀中頃	SB01	N-84°-E	桁行3間・梁行1間
	SB04	N-88°-E	桁行4間・梁行1間
	SB05	N-83°-E	桁行2間・梁行3間
	SB07	N-74°-E	桁行2間・梁行2間
	SB08	N-77°-E	桁行3間・梁行1間
	SB09	N-74°-E	桁行3間・梁行2間
17世紀中頃～	SB02	N-88°-E	桁行3間・梁行1間
	SB03	N-84°-E	桁行3間・梁行1間
不明	SB10	N-2°-W	桁行・梁行2間以上
	SB12	N-86°-E	桁行1間・梁行1間
	SB13	N-27°-W	桁行2間・梁行1間

溝跡

SD01溝跡は遺構の重複や遺物が出土していないため年代推定が困難であるが、検出した位置関係などを考慮すると、小溝状遺構A群やSB01掘立柱建物跡と関連する区画溝であった可能性が高く、17世紀代の遺構と考えられる。

SD02溝跡はSB02掘立柱建物跡を囲うように展開するが、重複から見る新旧関係では時期差に隔たりがあり、両者の直接的な関連性は認められない。遺物は17世紀代の所産と考えられる唐津系陶器が出土しており、溝の機能時期も同年代と推量している。

SD03、SD04溝跡は基軸が概ねN-82°-E前後であり、A区北側中央部に広がる掘立柱建物跡群と主軸方位が類似している。出土遺物から溝跡の年代は特定できないが、溝跡と建物跡群の並行関係から、両者は同じ頃に存在していた可能性があり、溝跡の性格は敷地の区画に関連するものと考えられる。

SD07溝跡はA区西側を南北方向に縦断し、北側、南側は調査区の外へとさらに延びる。また、溝跡の東側面では、同じく南北方向へ延びる、極めてしまりの強い硬化面を確認している。小溝状遺構C群の西端とSD07溝跡の東辺が並走関係にあることや、この溝跡を隔てた東西では遺構の分布密度に差があることなどを勘案すると、硬化面は近世の道路跡であり、SD07溝跡はこれに伴う側溝の可能性がある。

井戸跡

調査区中央部で検出したSE01井戸跡は、確認面からの深さが2.0m以上ある大型の井戸で、Ⅷ層

上面まで掘り下げたところで急激に水が湧き出し、作業の安全確保を優先した結果、残念ながら完掘には至らなかった。

本遺構では井戸枠内と裏込めの両方でⅦ層の堆積を確認しているが、これは崩落土が流入した状況を示すものと考えられ、井戸としての完成を見ないうちに構築を放棄したものと思われる。なお、岩沼市内の遺跡では、下野郷館跡の発掘調査で井戸枠が設置された井戸を検出しているが（川又隆央・小泉博明2004）、底部の四隅に隅柱を打ち込み、横桟を渡して横板を積み上げる構造の井戸は、今回が初の検出事例である。

年代については、手掛りとなり得る遺物の出土が極めて少なく推定が困難であるが、政和通寶、古寛永といった銭貨が出土していることや、重複する小溝状遺構B群よりも古い年代観を示すことを勘案すると、16世紀中頃～17世紀前半の時期幅を推量しておくのが妥当であろう。

小溝状遺構

小溝状遺構は畑作に関連する遺構である。本調査では、南北方向に延びるA群、B群と、東西方向に延びるC群、D群の4群を検出し、A群の遺構からは16世紀代の瀬戸・美濃産皿、銭貨（元豊通寶）などを発見している。重複から推定される新旧関係は、C群が最も古く、次いでB群、最末期がD群と考えられる。A群はどの小溝状遺構群とも重複しないが、出土遺物の年代観から、機能時期は16世紀後半～17世紀代とみておきたい。

遺構と遺物から見る特色

A区で最も古い時期の遺構と考えられるものは、SB06、SB11掘立柱建物跡、SE01井戸跡、小溝状遺構A群もしくはC群であり、本地点では遅くとも16世紀末には集落が成立していたと思われる。

SE01井戸跡の構築が集落の初期段階で放棄されて以降、A区内では新たな井戸は作られず、その代用としてSX01、SX02、SX04ため池状遺構が掘られるだけである。これは本地点が取水に適さない場所であったことを示唆するものであり、この集落の井戸は調査区外に設置されたものと思われる。また、建物の改変が数回行われていること、畑の位置が変化を繰り返すことなどを考慮すると、ある程度長期にわたり集落が機能していたと考えられる。掘立柱建物跡群の分布がA区の北側に集中することは前述した通りであるが、小溝状遺構A群やSD01溝跡の北側が調査区外へと続いていくことから、17世紀中頃以降の居住域は本地点からさらに北側へ移動した可能性がある。

東辺と硬化面が並走関係にあるSD07溝跡は、近世の道路側溝であった可能性があり、これと整合し得る史料としては、寛文元年（1661）の『早股村御分地之絵図』（仙台市博物館所蔵）を挙げることができる。絵図には阿武隈川の北岸堤防に沿う形で道が描かれており、億測の域は出ないものの、この道と今回検出した溝跡の関連性は興味深い。

調査区の東側で検出したSA01小柱穴群については、個別の規模は小さいものの明らかにⅢ層を掘り込んで柱を立てている。集落で社会的優位性の低い人々が利用した、簡単なテント構造の建物とも考えられるが、痕跡から確認できる柱の規模は貧弱で、建物跡と認識できるかは今後の検討課題のひとつである。

出土遺物による特色としては、市内の遺跡の中でも瀬戸・美濃産陶器と唐津系陶器の出土量が比較的多い点が挙げられる。その要因は明らかではないが、理由のひとつとして、阿武隈川の水運がもたらす流通の結果と見ることができよう。また、土坑から出土したシジミ貝や鳥類の骨は、祭祀関連遺物である可能性も否定できないが、神事執行に関わる特異な埋納形態なども見受けられないことから、現時点では過去の人々が食したものを廃棄した痕跡と考えている。

遺物の年代や各遺構の機能時期を勘案すると、A区は後述するB区よりも比較的古い時期の遺跡といえる。また、建物跡や畑作の痕跡、碗や皿などの日常雑器を確認していることから、A区は人々が形成した居住域、生産域という生活空間と位置づけられ、墓域として利用されたB区とは一線を画していたことが分かる。

2．B区

墓壙の形状と新旧関係

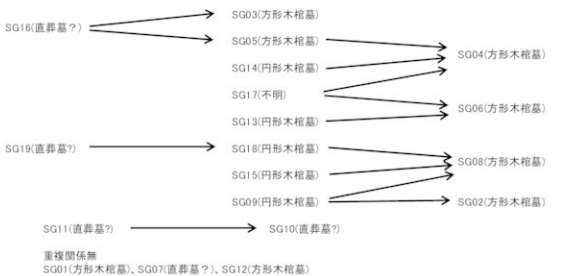
B区で検出した近世墓壙は19基である。各墓壙の形状については本文並びに表2に示したとおりであるが、方形木棺墓、円形木棺墓、直葬墓の可能性があるものなどに大別できる。このうち方形木棺墓ではSG02・03・04・05では棺箱が残存しており、またSG01・06・08・12は底面等で認められた棺箱の痕跡から方形木棺墓と考えられる。円形木棺墓ではSG09・15・18では早桶が残存し、SG13・14では底面および覆土中から桶の底板や側板が出土したことから円形木棺墓であったと考えられる。このほかSG07・10・16は、覆土中より人骨または銭貨は出土しているものの、棺箱等の痕跡が認められなかったことから直葬墓であった可能性が考えられる。またSG11・18は人骨や棺箱、副葬品が出土していないが、各墓壙と極めて近接していることから墓壙として扱っている。なお、SG17は重複関係が著しいため埋葬形態は不明としている。

表2　B区検出近世墓壙一覧

遺構名	掘方形状	木棺の有無	木棺墓形状	副葬品																	人骨
				銭貨							その他金属製品					陶器	木製品	漆器	石製品	鼈甲製品	
				古寛永	文銭	無背銭	背字銭	波銭	鉄無背銭	鉄波銭	不明	煙管吸口	煙管雁首	火打鉄	簪	その他						
SG01	隅丸方形	痕跡	方形木棺墓			5						1	1								○
SG02	隅丸方形	有	方形木棺墓	11		27	4				1	1	1		1			3			○
SG03	不整方形	有	方形木棺墓			13	2					1	1	1	1		1		1		○
SG04	不整方形	有	方形木棺墓							11		1	1			1					○
SG05	方形？	有	方形木棺墓										1								○
SG06	方形	痕跡	方形木棺墓	2		30	5		126								1			1	1	○
SG07	楕円形	無	—																		○
SG08	方形？	痕跡	方形木棺墓																		
SG09	楕円形	有	円形木棺墓		2							2	1								○
SG10	方形	無	—		1	5															○
SG11	楕円形	無	—																		
SG12	方形	痕跡	方形木棺墓			1												1			
SG13	円形	痕跡	円形木棺墓			1												1			○
SG14	楕円形？	痕跡	円形木棺墓		3	4	1					1									
SG15	円形	有	円形木棺墓	1	2	10						1	1					1	2		○
SG16	不明	無	—																		○
SG17	不明	不明	—			1															○
SG18	楕円形	有	円形木棺墓																1		
SG19	楕円形	無	—																		○

これら19基の墓壙の重複関係を整理すると、まず最新遺構としてはSG04・06・08・02が挙げられ、最古の遺構としてはSG16・19がある。以下に重複関係から墓壙の形態変遷を見ていくと、直葬墓と考えられるSG16・19は方形木棺墓であるSG03・05、円形木棺墓であるSG18に先行していることが判断できる。また円形木棺墓と方形木棺墓の新旧関係としては円形木棺墓であるSG14が方形木棺墓であるSG04に、同様に円形木棺墓であるSG13が方形木棺墓であるSG06に、円形木棺墓であるSG09・15・18が方形木棺墓であるSG08に切られるなどの新旧関係が認められることから、本地点では墓城が形成される中で直葬墓→円形木棺墓→方形木棺墓と埋葬形態が変遷したことがうかがわれる。

新旧関係



重複関係無
SG01(方形木棺墓)、SG07(直葬墓?)、SG12(方形木棺墓)

各墓壙の年代観

次に各墓壙の年代観を見ていくと、最古段階であるSG16・19からは銭貨の出土は無いが、今回検出した墓壙のうち銭貨を出土したいずれにおいても渡来銭、古寛永通寶のみで構成される事例は無い。また文銭のみで構成されている事例もSG09で唯一確認されたのみであり、それ以外に銭貨を出土した墓壙はすべて元禄11年（1698）以降に鋳造された新寛永通寶及び寛永通寶鉄一文銭、同四文銭によって構成されている。以下に銭貨出土の墓壙について、鋳造年代を参考として年代観を推量していく。

表３　銭貨出土墓壙の銭種構成と年代推定

遺構名	銭種構成	年代推定根拠
SG01	新寛永５枚	新寛永鋳造年代から、元禄 11 年（1698）以降
SG02	古寛永 11 枚、新寛永 27 枚、背「佐」字銭１枚、背「足」字銭１枚、背「元」字銭２枚	背「元」字銭鋳造年代から、寛保元年（1741）以降
SG03	新寛永 13 枚、背「元」字銭２枚	背「元」字銭鋳造年代から、寛保元年（1741）以降
SG04	寛永通寶鉄四文銭 11 枚	鉄四文銭鋳造年代から、万延元年（1861）以降

SG06	古寛永2枚、新寛永30枚、背「元」字銭5枚、寛永通寶鉄一文銭126枚	背「元」字銭鋳造年代から、寛保元年（1741）以降
SG09	文銭2枚	文銭の鋳造年代から、寛文8年（1668）以降
SG10	文銭1枚、新寛永5枚	新寛永鋳造年代から、元禄11年（1698）以降
SG12	新寛永1枚	新寛永鋳造年代から、元禄11年（1698）以降
SG13	新寛永1枚	新寛永鋳造年代から、元禄11年（1698）以降
SG14	文銭3枚、新寛永4枚、背「元」字銭1枚	背「元」字銭鋳造年代から、寛保元年（1741）以降
SG15	古寛永1枚、文銭2枚、新寛永10枚	新寛永鋳造年代から、元禄11年（1698）以降
SG17	新寛永1枚	新寛永鋳造年代から、元禄11年（1698）以降

また銭貨が出土していない6基について、上記表及び新旧関係から見ていく。

表4　銭貨未出土墓壙の年代推定

遺構名	新旧関係	年代推定根拠
SG05	（古）SG05 →（新）SG04 （古）SG16 →（新）SG05	SG16の年代観から、寛保元年（1741）以降 SG04の年代観から、万延元年（1861）以前
SG08	（古）SG15 →（新）SG08 （古）SG09 →（新）SG08	SG15の年代観から、元禄11年（1698）以降
SG11	（古）SG11 →（新）SG10	SG10の年代観から、元禄11年（1698）以前
SG16	（古）SG16 →（新）SG03 （古）SG16 →（新）SG05	SG03の年代観から、寛保元年（1741）以前
SG18	（古）SG18 →（新）SG08	SG08の年代観から、元禄11年（1698）前後
SG19	（古）SG19 →（新）SG18	SG18の年代観から、元禄11年（1698）前後

次に煙管及び陶磁器を出土した墓壙について概観する。煙管の年代観については古泉編年（古泉弘2001）、陶器については関根編年（関根達人1998）を参考とした。

まず煙管では、古泉編年Ⅳ期に相当するものがSG13・14で出土している。またSG01・02・03・05では古泉編年Ⅴ期、SG 04ではⅥ期の煙管が出土している。

陶器では、SG05・06より18世紀後葉～19世紀初頭に位置付けられている大堀相馬産の碗が出土している。

以上、遺構の新旧関係、銭貨から見た年代、及び煙管・陶磁器の年代観を含めて各墓壙の年代を勘案すると、次のように整理できる。

18世紀前半…SG10、SG11、SG16、SG19

18世紀後半…SG13、SG14、SG15、SG17、SG18

18世紀末～19世紀初頭…SG05、SG06、 SG09

19世紀前半～中頃…SG01、SG02、SG03、SG08、SG12

19世紀中頃～後半…SG04

なお、銭貨や煙管をはじめとした副葬品が未出土であり、他遺構と重複関係にないSG07については不明であるが、既述のとおり形状と本調査地点での総合的な年代観を加味して、概ね18世紀前半頃の年代観と推定している。

副葬品の特色と被葬者の階層

表2に示したように、今回の調査で確認した19基の墓壙を概観した場合、まず銭貨と煙管の副葬の多さが目に付く。このうち銭貨は19基中12基から出土し、副葬率は63.1%となる。同様に煙管も19基中8基から出土し、副葬率は42.1%となる。煙管は多賀城市大日北遺跡（武田健市1998）では男女ともに副葬されている傾向が指摘されているが、本地点でも大半が一組で棺底面からの出土であり、同様に男女、及び幼児にも副葬されていることから、故人の愛用品としての副葬ではなく僻邪を目的として副葬されたものと考えられる。これら以外の副葬品としては、棺内より出土したものでは火打石と簪が2点のほかは、火打鉄、簪、笄、櫛、眼鏡が1点のみであった。また棺外からは漆器椀皿がSG02・15・18より出土したほか、SG13からは提灯底板の可能性がある木製品が出土しているが、全体量は極めて少ない傾向にある。この被葬者が生前用いた日用品の副葬の少なさについては、中世～近世初頭にかけての東北地方では少ない傾向にあることが示されているが（川又隆央2009）、近世段階の詳細については今後事例を加味して検討を要する。

なお、SG04からは寛永通寶鉄四文銭11枚とともに、眼鏡の副葬が確認されている。この眼鏡は「支柱式天狗眼鏡」と通称されるもので、県内では仙台城跡二の丸北方武家屋敷跡（仙台市教育委員会2009）で出土した資料と近似する。現時点で県内から眼鏡の出土が報告されているのは僅かにこの一例のみであり、県内においては極めて僅少な事例と言える（註1）。SG04での出土状況ではレンズとフレームが遊離しているものの、ともに棺底面からの出土であること、及び検出時には一部に人骨が重なっていたことから、遺骸に装着していたものが脱落した可能性が考えられる。また年代観としては万延元年（1861）に鋳造が開始され、明治六年（1873）に通用が停止された寛永通寶鉄四文銭を副葬し、明治四年（1871）に制定された新貨条例以降に明治政府が発行した銭貨が副葬されていないことから、前述のとおり19世紀後半頃と考えられる。ところで今回調査した19基の墓壙は、付近にお住いの方の一族の墓地であったとの証言が寄せられている。その家に伝わる話としては、十数代前に市内の南長谷地区からこの地に移り住んだとのことであり、近世の身分階層としては庶民層に属すると考えられる。これは発見された墓壙の形状が仙台市新妻家墓地（佐藤洋1986）、同市茂ヶ崎城跡（志賀雄一2008、荒井格ほか2009）のような甕棺を用いておらず、庶民層の墓と推定される大崎市堤根遺跡（佐藤優、三浦幸子2002）、同市筆塚B遺跡（佐藤優2003）などのような円形木棺墓、方形木棺墓を主体としていることからも裏付けられる。眼鏡自体はわが国には16世紀代に伝来したとされているが、江戸期を通じて高価なものであったとされており、管見に触れる限りでは庶民層が埋葬されたと考えられる墓壙からの出土事例は見当たらない。このSG04からの出土事例は、眼鏡が当地方の庶民層までに普及した事例の端緒となりうる可能性があり、今後の事例の増加を待ってさらに検討したい。

第Ⅴ章　まとめ

1．本調査地点は岩沼市早股字西須賀原に所在し、阿武隈川の堆積作用によって形成された自然堤防、及び砂洲上に立地する。

2．A区では掘立柱建物跡13棟、井戸跡１基、溝跡８条、小溝状遺構482条のほか、多数の土坑、小柱穴を検出した。

3．掘立柱建物跡は調査区北側に濃密に分布し、その機能時期は16世紀中頃～17世紀代と考えられる。また全域に渡って小溝状遺構群が展開することから、居住域と生産域が近接していたことが判明した。

4．SE01は下部において基本土層Ⅶ層である黒褐色砂が堀方・井戸枠内の両者に流入しており、構築途中の崩落によって遺棄したものと考えられる。

5．SD07は『早股村御分地之絵図』（仙台市博物館所蔵）から、道路側溝として機能していた可能性が考えられる。

6．A区における出土遺物は大堀相馬焼が最も多いが、市内の他遺跡と比べると16世紀代～17世紀代の年代観を有する瀬戸美濃産、唐津を含む肥前系陶器の出土量が多いことが特筆される。

7．B区では19基の墓壙を検出した。墓壙の形態は方形木棺墓、円形木棺墓、直葬墓の可能性があるものに大別される。

8．近世墓壙内の副葬品には銭貨が大勢を占め、次いで煙管の副葬が認められる。このうち銭貨は渡来銭及び古寛永通寶のみで構成されるものは無く、全て新寛永通寶鋳造以降の銭貨である。

9．SG06では寛永通寶鉄一文銭の126枚をはじめとし、163枚の銭貨が出土した。これは現時点での県内近世墓調査事例では、最多の副葬事例のひとつとなる。

10．SG04では寛永通寶鉄四文銭とともに眼鏡が出土した。出土した眼鏡は、仙台城跡二の丸北方武家屋敷での事例に次ぐものであり、同様に「支柱式天狗眼鏡」と呼称される形状を呈する。当地方における庶民層への眼鏡普及時期を示す事例の端緒となるものと思われる。

11．SG15では棺内に大量の籾殻を収めた状況を確認した。被葬者は幼児と推定されるが、籾殻を大量に収めた事例は県内では見当たらず、今後の事例の増加を待って再度の検討を要する。

12．遺構の新旧関係、副葬品の年代観から、B区で確認された墓壙は18世紀前半～19世紀後半にかけて営まれたと考えられる。

註１　眼鏡出土については、このほかに栗原市内（旧高清水町）で出土事例があるとのことだが、未報告のため詳細は不明（安達訓仁氏御教示）

引用・参考文献

愛知県　2007　『愛知県史　別編窯業２　中世・近世　瀬戸系』　愛知県史編さん委員会

阿部正光・佐藤敏幸　1997　「宮城県の近世墓と大道銭」『近世の出土銭』－論考編－　兵庫埋蔵銭調査会

荒井格ほか　2009　『茂ケ崎城跡－第２次発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第336集

石神裕之　2009　「六道銭研究の現状と課題」『六道銭の考古学』　高志書院

石黒伸一郎　2009　「岩沼市岩蔵寺の板碑を伴う集石遺構」『宮城考古学』第11号

岩沼市　1984　「岩沼市史」　岩沼市市史編纂委員会

岩沼市　1992　「岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編」

江戸研究会　1996　『江戸時代の墓と葬制』発表要旨

小野力・志間泰治　1968　「装飾土器を出土した宮城県岩沼町所在の長谷寺横穴古墳調査報告」『日本考古学協会第34回総会研究発表要旨』

小村田達也・三好秀樹ほか　1993　『北原遺跡』　宮城県文化財調査報告書第159集

鍛冶一郎・佐藤宏一ほか　1962　「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」『東北考古学　第３号』

川又隆央　2004ａ　『鵜ヶ崎城跡・第２地点』　岩沼市文化財調査報告書第３集

川又隆央　2004ｂ　『鵜ヶ崎城跡・第３地点』　岩沼市文化財調査報告書第４集

川又隆央　2005ａ　『長徳寺前遺跡』　岩沼市文化財調査報告書第５集

川又隆央　2005ｂ　『鵜ヶ崎城跡・第４地点』　岩沼市文化財調査報告書第６集

川又隆央　2005ｃ　「霊場研究の方法」『遺跡研究の方法』　東北中世考古学会第12回研究大会資料集

川又隆央　2005ｄ　「宮城県の礫石経塚」『宮城考古学』第７号

川又隆央　2007　『朝日古墳群』　岩沼市文化財調査報告書第７集

川又隆央　2009ａ　『竹駒神社境内遺跡』　岩沼市文化財調査報告書第８集

川又隆央　2009ｂ　「東北地方における中世墓出土銭貨の様相」『中世の墓と銭』　第16回出土銭貨研究会大会資料集

川又隆央・熊谷篤　2009　「岩沼市中ノ原遺跡所在の板碑と出土資料について」『宮城考古学』第11号

川又隆央・熊谷篤　2010　『丸山遺跡』　岩沼市文化財調査報告書第９集

川又隆央・小泉博明　2004　『下野郷館跡』　岩沼市文化財調査報告書第２集

九州近世陶磁学会　2000　「九州陶磁の編年」　九州近世陶磁学会10周年記念号究会編

古泉弘　2001　「Ⅶ．江戸の遺物　３．土器　厨房具１堤炉」『江戸考古学研究事典』　江戸遺跡研究会

小林義孝　2009ａ　「葬墓制と銭貨」『六道銭の考古学』　高志書院

小林義孝　2009ｂ　「六道銭の展開と変質」『六道銭の考古学』　高志書院

櫻木晋一　2009　『貨幣考古学序説』　慶応義塾大学出版会

佐藤洋　1986　「新妻家墓地改葬調査報告」　仙台市文化財調査報告書第94条

佐藤優・三浦幸子　2002　『堤根遺跡・中沢遺跡』　古川市文化財調査報告書第31集
佐藤優　2003　『筆塚B遺跡』　古川市文化財調査報告書第34集
志賀雄一　2008　「茂ケ崎城跡」『南小泉遺跡他』　仙台市文化財調査報告書第326集
関根達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』　東北大学埋財調査研究センター
仙台市教育委員会　2009　「仙台城跡二の丸北方武家屋敷跡」『宮城県遺跡発表会資料集』
多賀城跡調査研究所　1984　『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1984
武田健市　1998　『大日北遺跡』　多賀城市文化財調査報告書第49集
谷川章雄　2009　「江戸の六道銭」『六道銭の考古学』　高志書院
千葉宗久　1985　「名取郡南方小川村絵図〔文久元年（1861年）〕」『地図で見る岩沼の歴史』
西木浩一　2009　「近世の墓制と六道銭研究の課題」『六道銭の考古学』　高志書院
原田昭一　2009　「近世墓の成り立ちと六道銭」『六道銭の考古学』　高志書院
藤沢良祐　2002　「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要第10輯』　（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
安富歩　2007　「無縁・呪縛・貨幣」『貨幣の地域史』　岩波書店
吉井宏ほか　2002　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第１次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2003　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第２次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2004　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第３次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2005　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第４次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2006　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第５次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2007　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第６次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2008　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第７次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2009　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第８次発掘調査概報」　東北福祉大学
吉井宏ほか　2010　「鵜ヶ崎城跡（岩沼要害）・第９次発掘調査概報」　東北福祉大学
渡辺清子　2000　「引込横穴墓群－発掘調査報告書－」　岩沼市文化財調査報告書第１集

西須賀原遺跡出土人骨について

東北大学大学院歯学研究科
鈴木敏彦

1．はじめに

宮城県岩沼市西須賀原遺跡発掘調査において，江戸時代から明治初期に属すると考えられる墓域にある 12 基の墓坑から 12 体分の人骨が発見された。さらに付近の西砂押地区においても２基の墓坑から２体分の人骨が検出された。本稿はこれら 14 体の人骨に関し，形質人類学的記載を行うとともに年齢，性別等の分析結果を記すものである。

図１～６および写真１～６に，同定された部位を示す。また表１には永久歯の歯冠計測値，表２には乳歯の歯冠計測値を示す。永久歯の計測法は藤田（1949）に従った。乳歯の計測法は杉山・黒須（1964）に従った。また表３には出土人骨の性別および年齢の内訳を示す。

2．人骨の遺存状況

SG01

多数の断片化した骨の集合である。頭蓋片，四肢骨片などが散見されるが，解剖学的部位を同定するには至らず，詳細は不明である。

SG02

【骨】

頭蓋は前頭骨から頭頂骨にかけての頭頂部および左右両側大臼歯部の下顎骨体が遺存する。体肢骨では，右上腕骨の骨体遠位寄り（９cm；以下，長骨に付した数値は残存部位のおよその長さを表す），左上腕骨の骨体中央（14cm），右大腿骨の骨体近位寄り（17cm），左大腿骨の骨体近位寄り（18cm）および右脛骨の骨体中央（7cm）が確認される。同定できた部位を図１に示す。この他にも，順位不明の頚椎片，胸椎椎体，部位不明の指節骨および腓骨片など，明確な解剖学的部位が同定できない骨片が多数遺存する。

【歯】

総じて歯質の劣化が進んでいる。

残存歯は次の歯式に示す通りである。なお，以下すべての人骨の歯式について，水平線は上下顎の境界を，垂直線は正中線を表し，向かって左側が個体の右を示す。記号と数字の組合せが記入されているのが存在が確認された歯であり，Ｉは切歯，Ｃは犬歯，Ｐは小臼歯，Ｍは大臼歯を表し，数字は同一歯種内での順位を表す。＝は該当する歯が確認できなかったことを示す。歯式の上下端の数字は咬耗度（Molnar，1971）を示す。

〔永久歯〕

	2			2	2	2	3	3	2	2	2	2	2	1	
	▽			▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	▽	
=	M2	=	=	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	=
=	M2	M1	P2	=	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	=
	◆	◆	▼		◇	◇	◇	◇	◇	◇	▽	▽	◆	◆	
	2	2	2		2	3	3	3	2	2	2	2	3	2	

◆：歯と歯槽の対応が確認され，歯の大部分が遺存するもの
◇：歯槽の有無は確認できないが，歯の大部分が遺存するもの（遊離歯）
▼：歯槽は確認できるが，歯根が崩壊し，歯冠のみが遺存するもの
▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）
▲：歯槽は確認できるが，歯冠が崩壊し，歯根のみが遺存するもの
＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。全て同一個体の歯と考えられる。
歯の咬耗は認められるが，ほとんどがエナメル質内に限局している。
【性別・年齢】
性別推定に有用な部位が遺存していないために定かではないが，全体的な骨の華奢さは女性のものに似ている。歯の咬耗状況から判断して比較的若年の成年と考えられる。

SG03
【骨】
頭蓋片は多数確認されたが，部位の同定には至らない。四肢骨は，右橈骨近位端（12cm），左尺骨近位端（13cm），および右脛骨骨体部遠位寄り（8cm）が同定可能であった。同定できた部位を図２に示す。この他にも，明確に解剖学的部位が特定できない四肢骨片が多数遺存する。
【歯】
一部破損はあるものの，歯質の劣化は少ない。残存歯は次の歯式に示す通りである。

〔永久歯〕

	2		3	2	2	3	3	3	3	3	2		2	3	
	◇		◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇	◇		◇	◇	
=	M2	=	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	=	M1	M2	=
=	M2	M1	P2	P1	C	I2	=	I1	=	C	P1	=	M1	M2	=
	◇	◇	◇	◇	◇	◇		◇		◇	◇		◇	◇	
	1	2	2	3	2	2		5		5	2		3	3	

◇：歯槽の有無は確認できないが，歯の大部分が遺存するもの（遊離歯）

＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。

主に下顎の歯に，多量の歯石の沈着が認められる。また上顎右側犬歯および上顎左側中切歯の舌側面に歯冠から歯根にかけて拡がる磨耗が認められ，ならびに下顎左側中切歯および下顎左側犬歯の咬耗が極度に進行しているなど，偏磨耗が認められる。歯槽が残存ししないために詳細は不明であるが，特殊な咬合状態にあったか，生前に特別な歯の用い方を行っていた可能性が推測される。

【性別・年齢】

四肢骨の華奢さから判断して，女性の可能性が高い。歯の用耗状態からは成年～熟年であると推測される。

SG04

【骨】

頭蓋片は多数確認されたが，部位の同定には至らない。四肢骨は，右大腿骨骨体中央部（18cm）および左大腿骨骨体中央部（18cm）が同定できた。同定できた部位を図３に示す。この他にも長軸方向に細長く断裂した四肢骨片が多数確認されるが，解剖学的部位の同定には至らなかった。

【歯】

歯質の劣化が進み，断片化した歯もある。同定できた歯は次の歯式に示す通りである。

〔永久歯〕

								3	3	3		5	4	4			
								▽	▽	▽		▽	▽	▽			
＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	I1	I2	C	＝	P2	M1	M2	＝		
M3?	＝	M1?	P2	＝	＝	＝	＝	＝	I2	C	P1	P2	M1	＝	＝		
▽		▽	▽						▽	▽	▽	▽	▽				
1		5	5						4	4	5	5	5				

▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）

＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。

【性別・年齢】

大腿骨はやや頑強であり，男性的な印象を受けるが確実ではない。歯の咬耗は全体的に進行しており，熟年～老年と推測される。

SG05

骨片５点のみが遺存する。最大の骨片でも約３×１cm 程度の大きさであり，部位等の詳細は不明である。骨質の変化状態から見て，火葬骨の可能性が推測される。

SG06

歯のみが遺存する。

全体的に歯質の劣化が進行し，断片化した歯もある。同定できた歯は次の歯式に示す通りである。

〔永久歯〕

					2									5	4		5							
					▽									▽	▽		▽							
＝	＝	＝	＝		P1	＝	＝	＝	＝	＝	＝			P1	P2	＝	M2	＝						
＝	＝	＝	M1?		＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝			＝	＝	M1	＝	＝						
			▽													▽								
			5													5								

▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）

＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。

【性別・年齢】

歯だけでは性別を推定するには至らず，不明である。全体的に咬耗が進行しており，熟年～老年と推定される。

SG07

微細な骨片 10 数点と，歯１点が遺存する。骨片はいずれも 1cm 角未満であり，詳細は不明である。歯は歯冠のみが残存し，歯頚部で破折した歯根は失われている。形態的特徴から上顎左側側切歯と考えられる。年齢・性別ともに不明である。

SG08（欠番）

SG09

今回出土した人骨の中では，最も残存部位が多い。

【骨】

頭蓋は，前頭部から頭頂部を経て後頭部の一部に至る頭蓋冠，左右側頭骨錐体乳突部，左頬骨，左右上顎骨の一部および下顎骨が確認される他，頭蓋冠の破片が多数遺存する。体幹骨は軸椎歯突起，順位不明の腰椎が確認される。体肢骨は，右上腕骨の骨体部から遠位端（21cm），左上腕骨の骨体部（22cm）および遠位端外側上顆付近，右橈骨骨体部（14cm），左橈骨の近位端から骨体部（20cm），右尺骨骨体部（15cm），左尺骨の近位端から骨体部

（21cm），右有頭骨，右月状骨，右〔手の〕舟状骨，左有鉤骨，右第三中手骨，左第二中手骨，左右寛骨の一部，右大腿骨骨体部やや近位寄り（28cm），左大腿骨骨体部やや近位寄り（30cm），左膝蓋骨，右脛骨骨体部（22cm）および遠位端，左脛骨骨体部（23cm）および遠位端，右腓骨骨体部（17cm）および外果，左腓骨骨体部（18cm），右踵骨，左距骨，右〔足の〕舟状骨，左第一中足骨，左第五中足骨，右足第一基節骨，左足第一基節骨，右足第四基節骨，ならびに左足第四基節骨が確認可能であった。同定できた部位を図４に示す。この他にも，肋骨，骨盤の断片や，部位不明の指節骨など，詳細な解剖学的部位が特定できない骨片が多数遺存する。

【歯】

歯質の劣化が進み，一部破損もみられるが，下顎骨を中心に，歯槽に植立した状態で遺存するものが多い。残存歯は次の歯式に示す通りであるが，この他に歯種不明の破損した歯冠破片が２点確認される。

〔永久歯〕

	4	4	3	3	3			3	3	3	3	3	3	2		
	◆	◆	◇	◆	◇			◇	◇	◇	◆	◆	◇	◇		
＝	M2	M1	P2	P1	C	＝	＝	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	＝	
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	＝	
◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◆	◇	◆	◆		
1	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3		

◆：歯と歯槽の対応が確認され，歯の大部分が遺存するもの
◇：歯槽の有無は確認できないが，歯の大部分が遺存するもの（遊離歯）
＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。下顎右側第三大臼歯はいわゆる水平埋伏智歯である。

【性別・年齢】

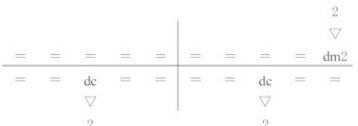
寛骨の大坐骨切痕は鋭角的である。頭蓋において眉弓の発達は中程度であるが乳様突起やオトガイの発達は良い。四肢骨は頑健かつ大きさも大であり，筋付着部の豊隆も強い。以上より男性と判断される。歯の咬耗状態から，成年程度と推定される。

SG10～SG13（欠番）

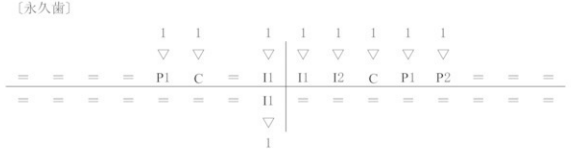
SG14

歯冠だけ，または歯冠エナメル質部分のみが残存する。歯冠の劣化が進んで断片化し，同定不能な歯も多い。同定できた残存歯は次の歯式に示す通りである。

〔乳歯〕



〔永久歯〕



▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）
＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の形成・萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。

乳歯が残存する。また永久歯には全く咬耗が認められず，萌出前の歯冠と考えられる。

【性別・年齢】

性別は不明である。上顎小臼歯が歯頚部まで完成していること，乳歯には若干の咬耗が認められることから，４～５歳程度の幼児と推定される。

SG15

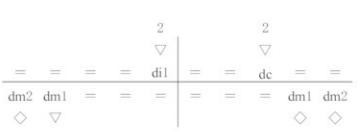
【骨】

極めて脆弱化した骨片が数点遺存する。四肢骨のような長骨骨体部の破片が確認されるだけで，解剖学的部位その他の詳細は不明である。

【歯】

一部破損はあるものの，歯冠の外形は保たれる。残存歯は次の歯式に示す通りである。

〔乳歯〕



〔永久歯〕

														1 ▽		
＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	M1	＝	＝
＝	＝	M1 ▽ 1	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	C ▽ 1	＝	＝	M1 ▽ 1	＝	＝	

◇：歯槽の有無は確認できないが，歯の大部分が遺存するもの（遊離歯）
▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）
＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の形成・萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。永久歯には咬耗が全くみられず，顎骨内にあった歯と考えられる。

【性別・年齢】

性別は不明である。永久歯は未萌出であったと考えられる。歯の形成状態から判断して，３歳程度の幼児と推定される。

SG16

【骨】

頭蓋は，前頭骨から左右頭頂部を通り後頭骨の一部までが連続して遺存し，また下顎体から左下顎枝にかけての一部が確認される。この他にも後頭骨周囲と思われる骨片が多数遺存する。四肢骨では右上腕骨骨体部（16cm），右大腿骨骨体部（24cm），左大腿骨骨体部（24cm）および右脛骨骨体部（20cm）が確認される。同定できた部位を図５に示す。この他にも詳細な部位の同定不可能な骨片が遺存する。

【歯】

歯質の劣化が進んでいる。残存歯は次の歯式に示す通りである。

〔永久歯〕

＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝
＝	M2 ◆ 2	M1 ◆ 3	＝	＝	×	×	×	×	×	×	×	×	M1 ◇ 3	M2 ◇ 3	M3 ▽ 3	

×：歯槽は閉鎖している（生前の歯の喪失の可能性）
◆：歯と歯槽の対応が確認され，歯の大部分が遺存するもの
◇：歯槽の有無は確認できないが，歯の大部分が遺存するもの（遊離歯）

▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）
＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。下顎の歯槽部には辛うじて根尖相当部と思われる陥凹が認められるものの，歯槽頂は全体的に尾根状に薄くなっており，明瞭な歯槽は確認できない。歯周疾患などにより生前に歯を喪失していた可能性が推測される。

【性別・年齢】

性別推定の根拠となる部位を欠くため定かではないが，オトガイが比較的強く発達し，また四肢骨がやや頑健な感があることから，男性と思われる。第三大臼歯が萌出し，またこの歯に咬耗が認められることから，成人に達していたことは間違いないが，年齢区分は不明である。

SG17（欠番）

SG18

【骨】

総じて骨の脆弱化が著しい。頭蓋は部位不明の骨片が十数点確認されるが詳細は明らかでない。四肢骨は，右上腕骨遠位端（6cm），左上腕骨骨体部やや近位寄り（9cm）およびやや遠位寄り（12cm），右大腿骨骨体部（17cm），左大腿骨骨体部（23cm），左右不明の大腿骨頭の一部，ならびに右脛骨骨体部（19cm）が確認される他，解剖学的部位を特定できない多数の骨片が遺存する。同定できた部位を図６に示す。

【歯】

歯質の劣化が進み，脆弱化した歯も多い。残存歯は次の歯式に示す通りである。

〔永久歯〕

								3		3	1	2		2	1
								▽		◇	◇	◇		◇	◇
＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	＝	I1	＝	C	P1	P2	＝	M2	M3?
＝	M2?	M1	P2	＝	C	＝	I1	＝	＝	C	P1	P2	M1	＝	＝
	◇	▽	◇		◇		◇			◇	◇	▽	▽		
	2	3	2		3		3			3	2	2	2		

◇：歯槽の有無は確認できないが，歯の大部分が遺存するもの（遊離歯）
▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）
＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。

【性別・年齢】

四肢骨に頑健さが認められること，また大腿骨頭の大きさから判断して男性と考えられる。年齢は成人には達していると考えられるが，咬耗がさほど進んでいないことから，比較的若い個体であると推測される。

西砂押地区 SG01

【骨】

頭蓋の破片と思われる骨片が数点残るが，いずれも小さく，部位などの特定には至らない。

【歯】

歯冠エナメル質のみが残存する。細片化し，同定不能なものも多い。同定できたものは以下の歯式の通りである。

〔永久歯〕

			2		2					2					
			▽		▽					▽					
＝	＝	＝	P2?	＝	C	＝	＝	＝	＝	C	＝	＝	＝	＝	＝
＝	M2?	M1	P2	P1	＝	＝	＝	＝	＝	C	P1	＝	M1	M2	＝
	▽	▽	▽	▽						▽	▽		▽	▽	
	2	2	2	2						2	2		2	2	

▽：歯槽の有無は確認できないが，歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）

＝：歯槽，歯ともに確認できず状況不明であるもの

同一の種類の歯の重複はなく，また歯の萌出状態に矛盾もない。すべて同一個体の歯と考えられる。咬耗は認められるがエナメル質内に限局しており，比較的若い個体と考えられる。性別は不明である。

西砂押地区 SG02

歯冠３点だけが遺存し，そのうち２点は乳歯の破片である。形態的特徴から上顎左側第二乳臼歯の破片，下顎左側第二乳臼歯の破片，および下顎左側第一大臼歯の形成途上の歯冠と判断される。

永久歯の形成状態から判断し，３～４歳程度の幼児と推測される。性別は不明である。

謝辞

本人骨の整理作業に際し，元 東北大学技術職員　貴田勝彦，東北大学技術職員　木下尚吾の両氏に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

文献

藤田恒太郎（1949）歯の計測基準について．人類学雑誌　61：27−31.
杉山乗也・黒須一夫　（1964）　乳歯の計測基準について．小児歯科学雑誌　2：１－８.
Molnar S（1971）Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American Journal of Physical Anthropology 34:175-190.

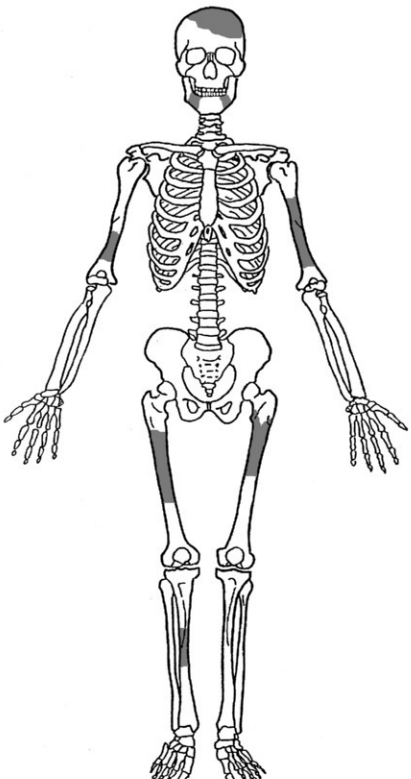


図1　SG02人骨の遺存部位

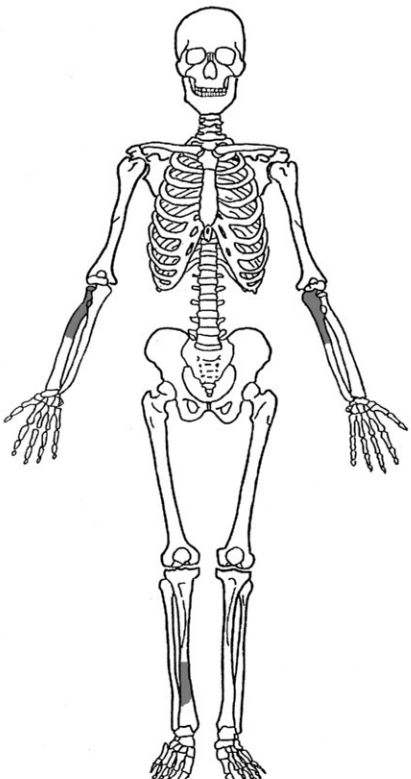


図2　SG03人骨の遺存部位

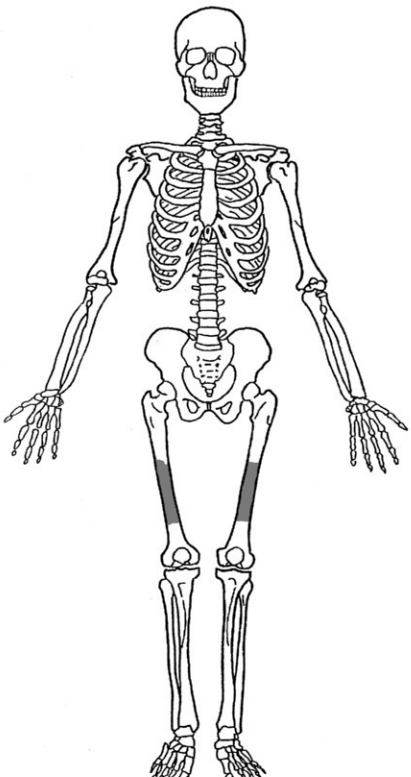


図3 SG04人骨の遺存部位

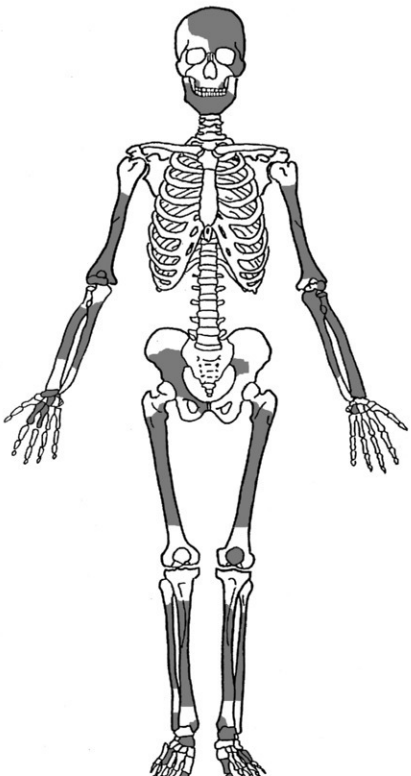


図4　SG09人骨の遺存部位

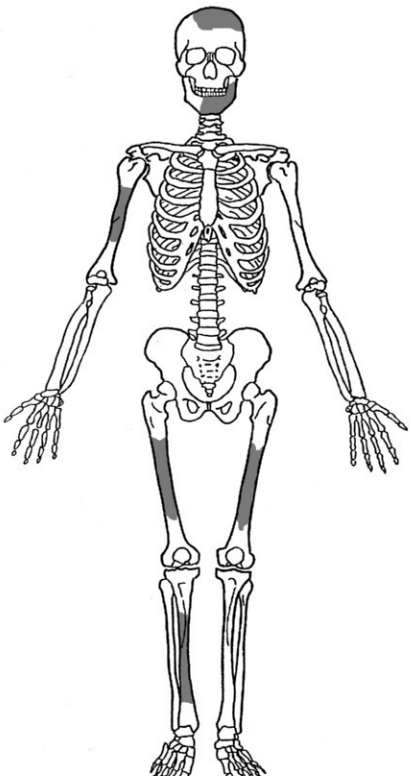


図5 SG16人骨の遺存部位

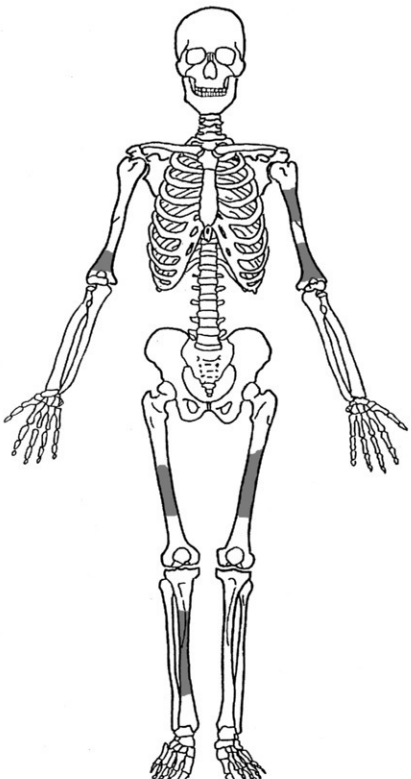
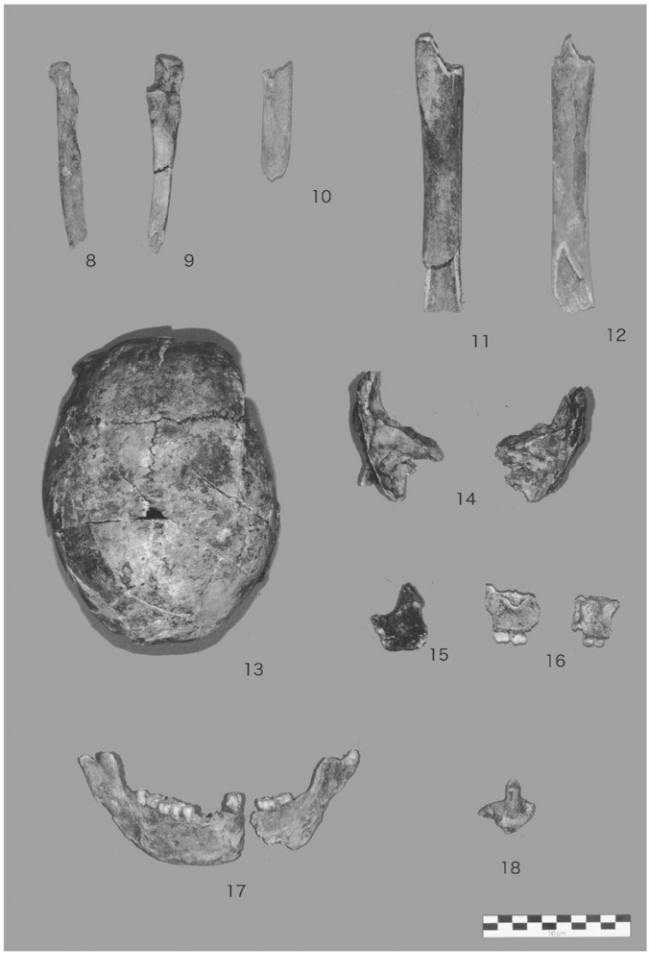
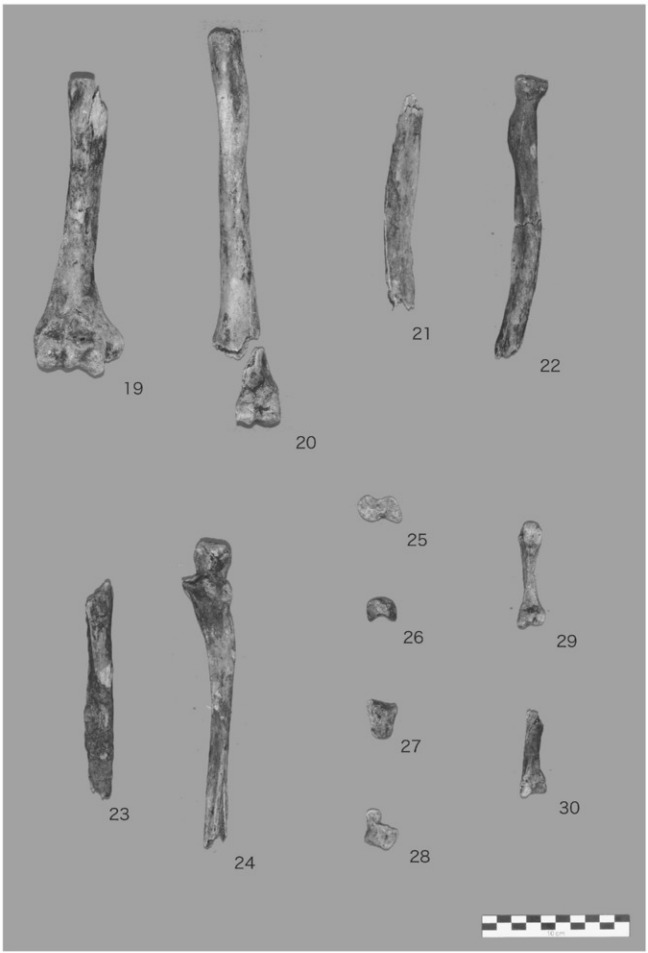
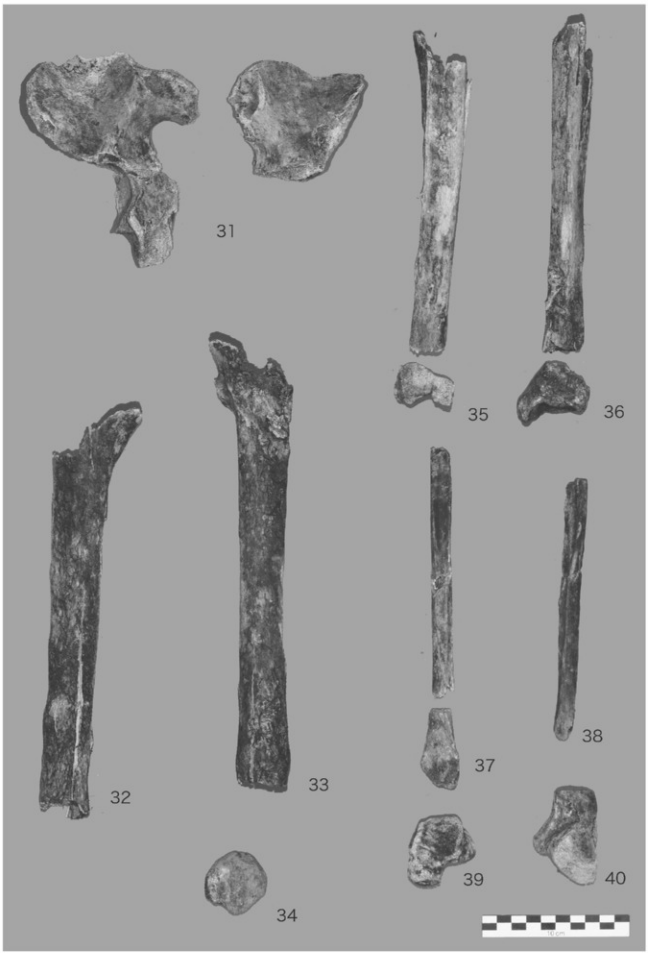


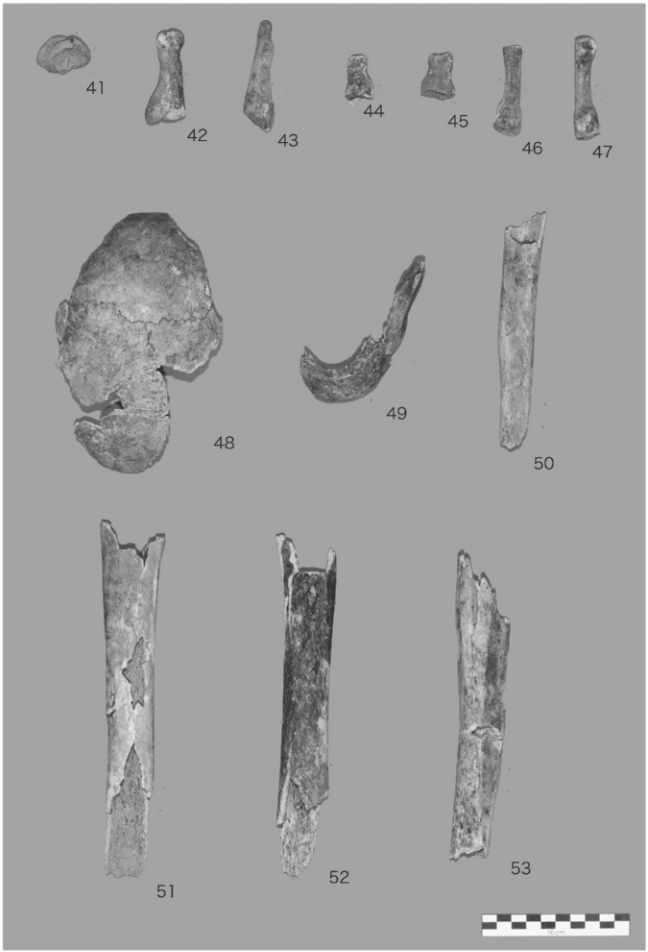
図6　SG18人骨の遺存部位

1
2
3
4
5
6
7


8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18


19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40


41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53

54
55
56
57
58
59

写真の説明

写真１
１：SG02 頭蓋冠　２：SG02 下顎骨　３：SG02 上腕骨（右）
４：SG02 上腕骨（左）　５：SG02 大腿骨（右）　６：SG02 大腿骨（左）
７：SG02 脛骨（右）

写真２
８：SG03 橈骨（右）　９：SG03 尺骨（左）　10：SG03 脛骨（右）
11：SG04 大腿骨（右）　12：SG04 大腿骨（左）　13：SG09 頭蓋冠
14：SG09 側頭骨（２点とも）　15：SG09 頬骨（右）
16：SG09 上顎骨（２点とも）　17：SG09 下顎骨　18：SG09 軸椎

写真３
19：SG09 上腕骨（右）　20：SG09 上腕骨（左）　21：SG09 橈骨（右）
22：SG09 橈骨（左）　23：SG09 尺骨（右）　24：SG09 尺骨（左）
25：SG09［手の］舟状骨（右）　26：SG09 月状骨（右）　27：SG09 有頭骨（右）
28：SG09 有鉤骨（左）　29：SG09 第二中手骨（左）　30：SG09 第三中手骨（右）

写真４
31：SG09 寛骨（２点とも）　32：SG09 大腿骨（右）　33：SG09 大腿骨（左）
34：SG09 膝蓋骨（左）　35：SG09 脛骨（右）　36：SG09 脛骨（左）
37：SG09 腓骨（右）　38：SG09 腓骨（左）　39：SG09 距骨（左）
40：SG09 踵骨（右）

写真５
41：SG09［足の］舟状骨（右）　42：SG09 第一中足骨（左）
43：SG09 第五中足骨（左）　44：SG09 第一基節骨（右）
45：SG09 第一基節骨（左）　46：SG09 第四基節骨（右）
47：SG09 第四基節骨（左）　48：SG16 頭蓋冠　49：SG16 下顎骨
50：SG16 上腕骨（右）　51：SG16 大腿骨（右）　52：SG16 大腿骨（左）
53：SG16 脛骨（右）

写真６
54：SG18 上腕骨（右）　55：SG18 上腕骨（左）　56：SG18 大腿骨頭（左右不明）
57：SG18 大腿骨（右）　58：SG18 大腿骨（左）　59：SG18 脛骨（右）

写　真　図　版

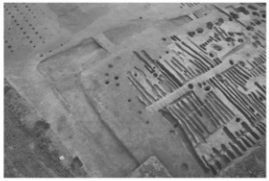
1．A区全景（北西から）

2．調査地点と阿武隈川（南東から）

写真図版1

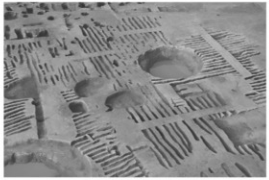
1．A区全景（南から）

2．掘立柱建物跡群（東から）



3．ＳＤ０１溝跡（北から）

4．小溝状遺構Ａ群（南から）



5．小溝状遺構Ｂ群（南西から）

6．小溝状遺構Ｃ群（南東から）

7．小柱穴群（南から）

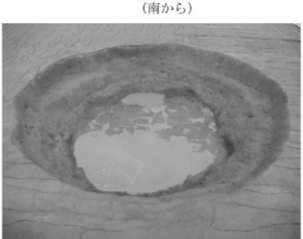
写真図版２

1．SE01井戸跡（南から）

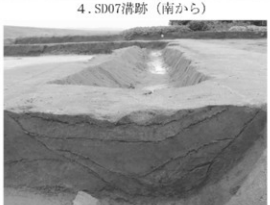
2．SE01井戸跡土層（南西から）

3．SE01井戸跡・井戸枠検出状況（南から）

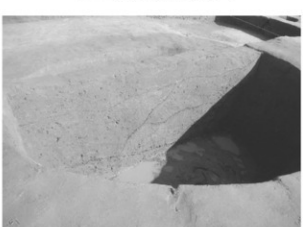
4．SD07溝跡（南から）



6．SX02溜池状遺構（南から

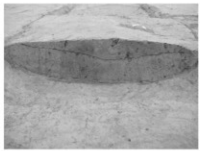


5．SD07溝跡土層断面（南から）



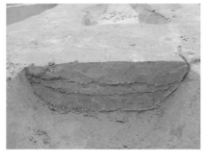
7．SX04溜池状遺構（南から）

写真図版３



1．SD01溝跡・土層断面
（東から）

2．SD02溝跡・土層断面
（東から）

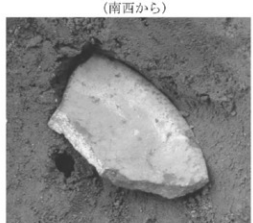


3．SD06溝跡・土層断面
（南から）

4．SB03 P-8土層断面
（東から）

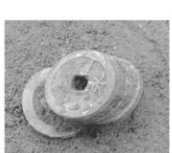
5．SB06 P-3土層断面
（南西から）

6．唐津産皿出土状況（東から）



7．瀬戸・美濃産皿出土状況（北から）

8．かわらけ出土状況
（南から）



9．銭貨出土状況
（南から）

10．瓦質土器出土状況
（西から）

写真図版4

1．B区全景（西から）

2．SG01墓壙(北から)

3．SG02墓壙(北から)

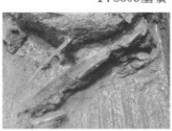
4．SG02棺底面遺物出土状況(西から)

5．SG02遺物出土状況近景(西から)

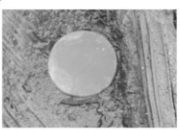
写真図版5

1．SG03墓壙（南から）

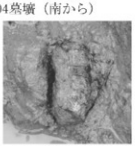
2．SG04祭壙（南から）



3．SG03遺物出土状況（東から）

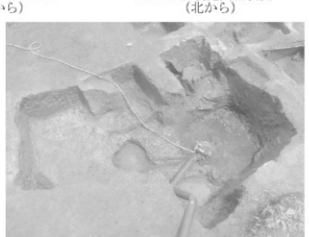


4．SG04眼鏡出土状況（北から）



5．SG06鉄銭塊出土状況（北から）

6．SG05墓壙（南から）



7．SG06・12墓壙（南から）

8．SG09墓壙（北西から）

9．近世墓壙（南から）

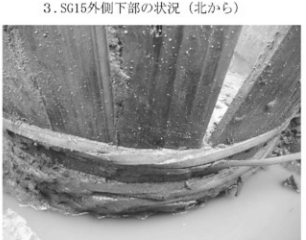
写真図版6

1．SG15墓壙（北から）

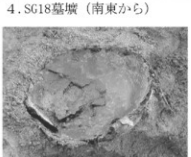
2．SG15煙管出土状況（北から）

3．SG15外側下部の状況（北から）

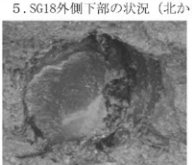
4．SG18墓壙（南東から）



5．SG18外側下部の状況（北から）



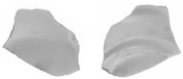
6．漆器皿出土状況



7．漆器椀出土状況

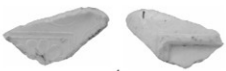
写真図版７

1

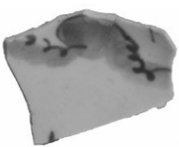


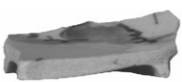
2

3

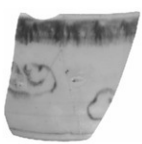


4

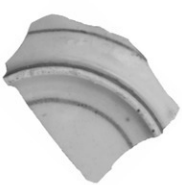


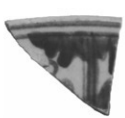


5

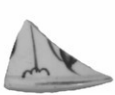


6





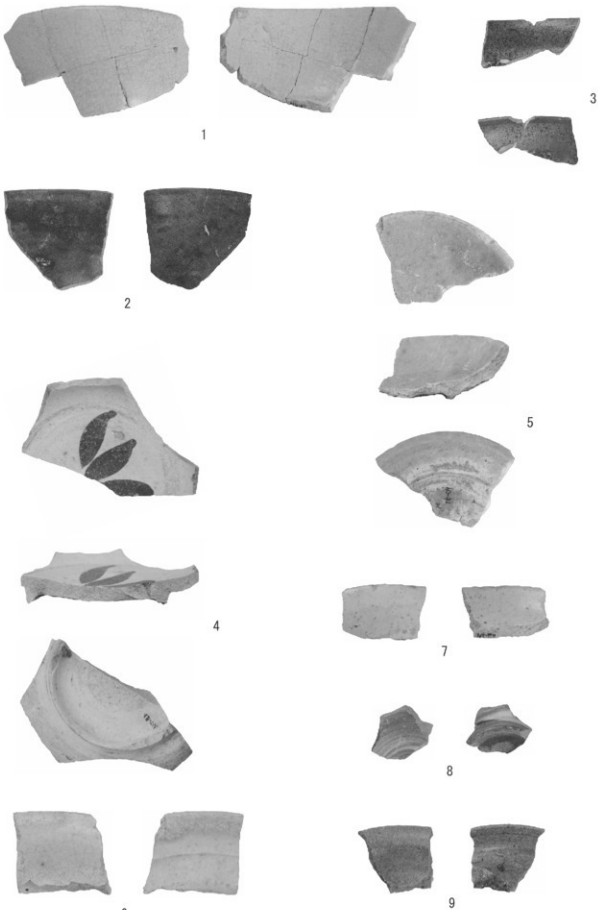
7



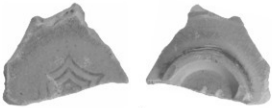
8

9

写真図版8



写真図版9



1

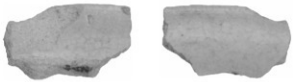
2

3

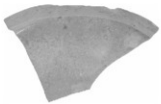
4

5

6

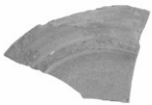


7



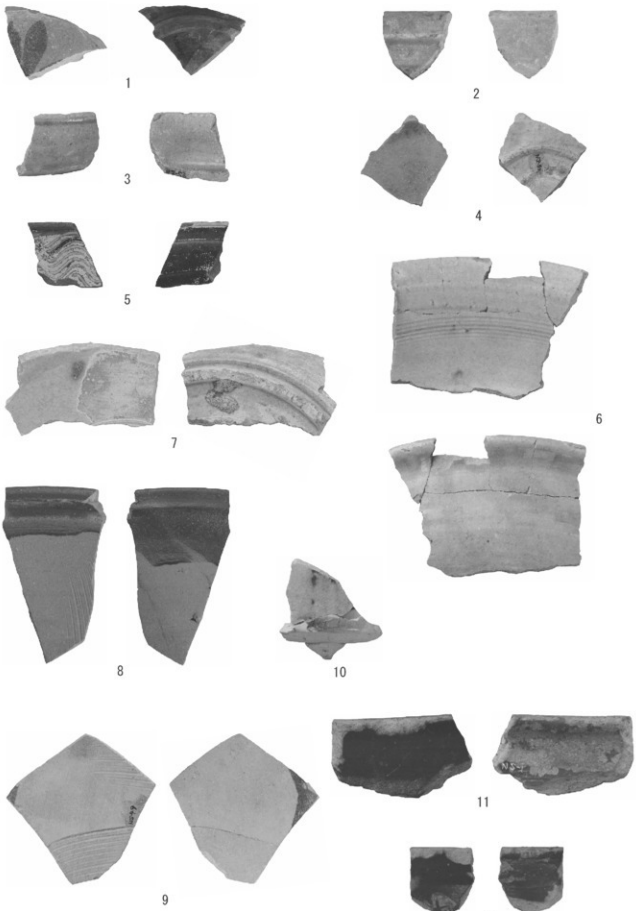
9

10



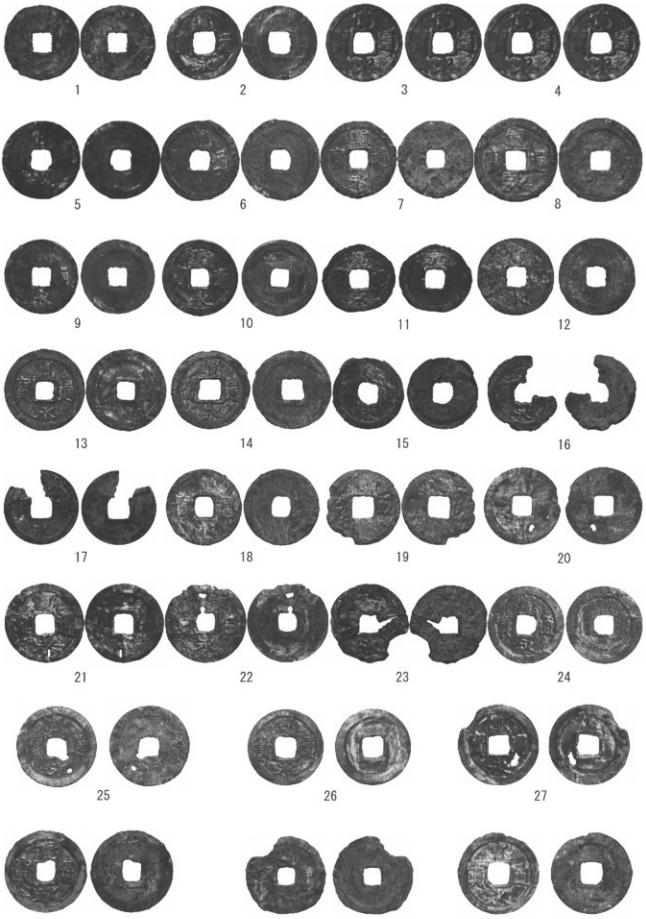
8

写真図版10

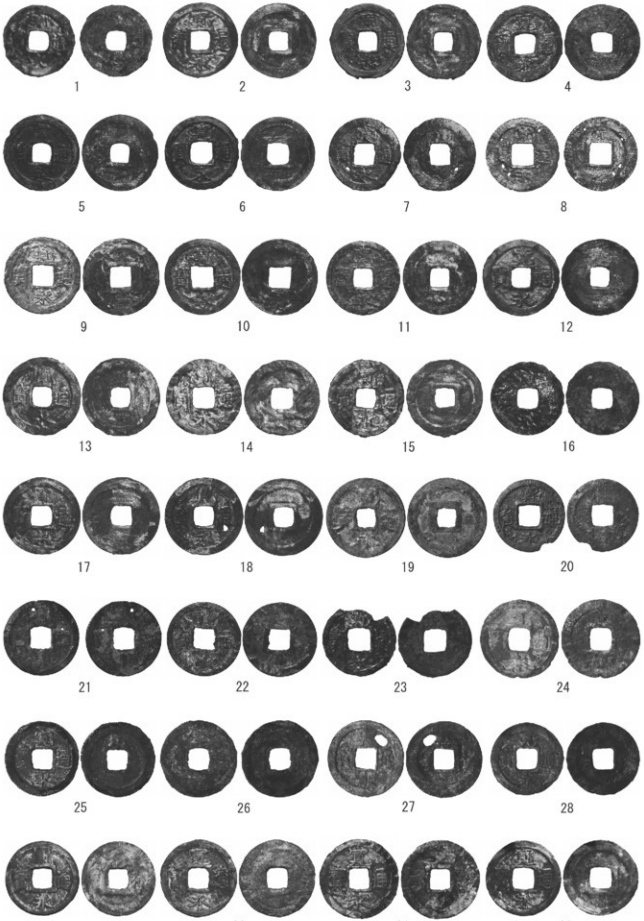


写真図版11

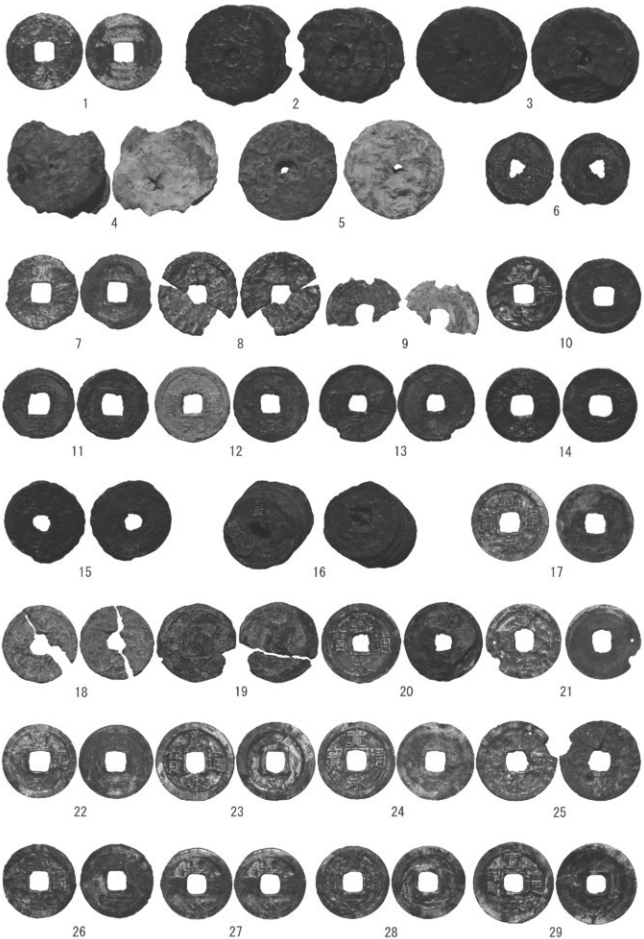
写真図版12


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

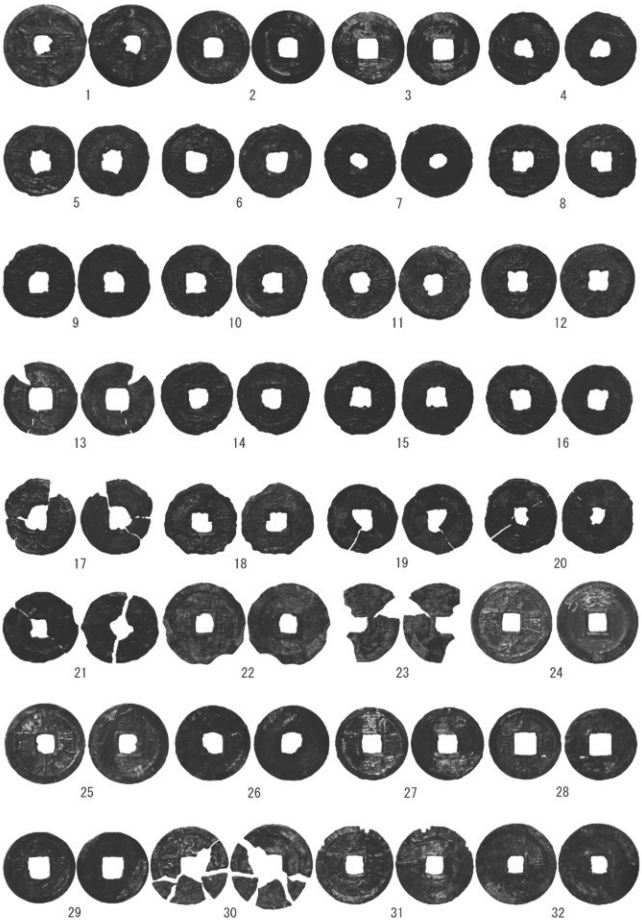
写真図版13


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

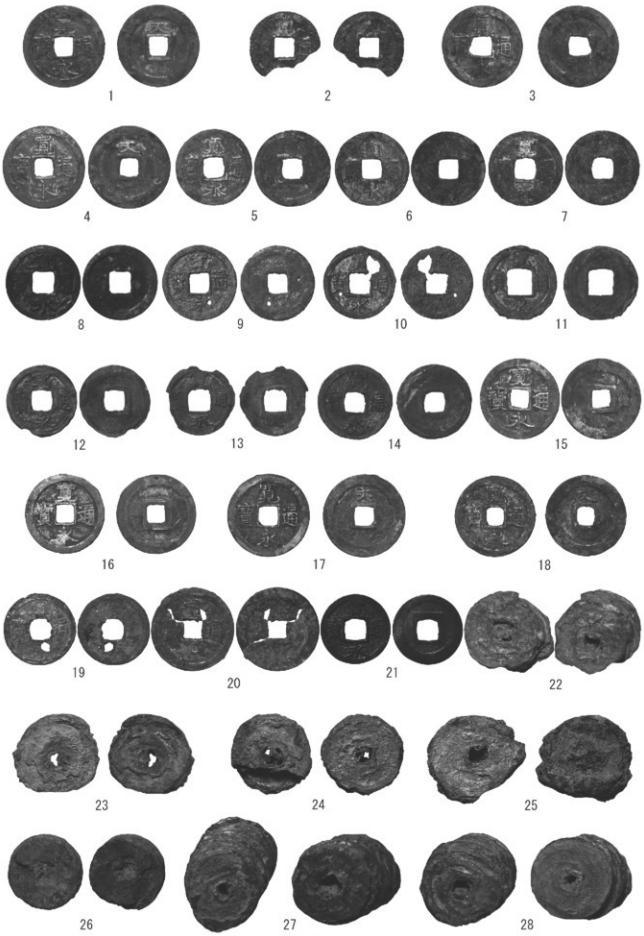
写真図版14



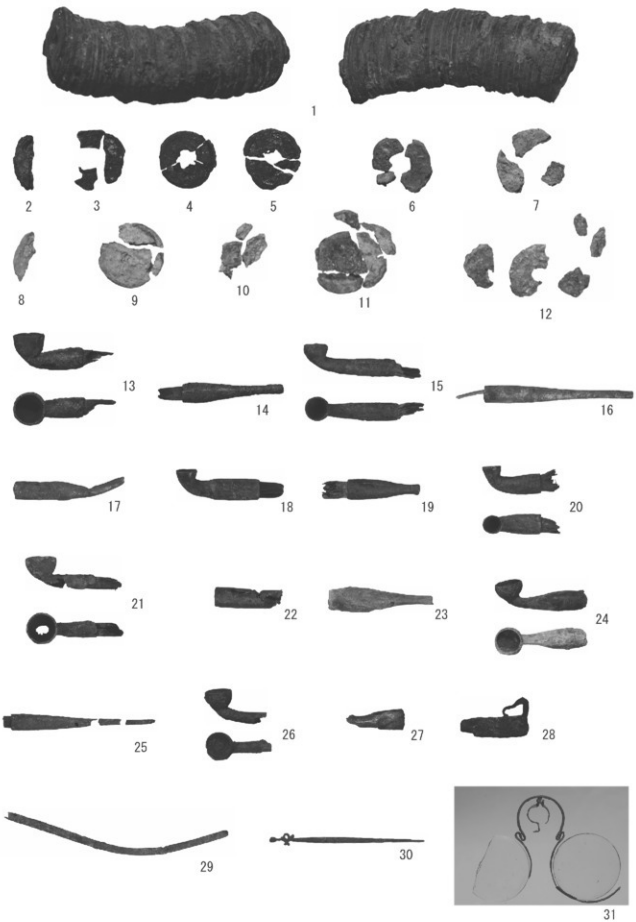
写真図版15


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

写真図版16



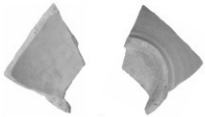
写真図版17


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

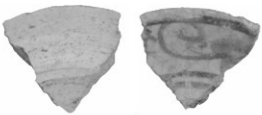
写真図版18

1

2



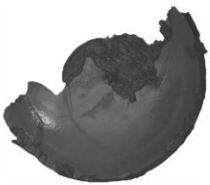
3



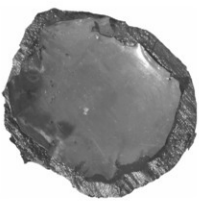
4

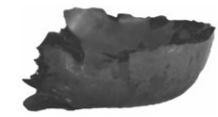
5

6



7





8

写真図版19

報告書抄録

ふりがな	にしすかはらいせき
書名	西須賀原遺跡
副書名	玉浦中部地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	第10集
編集者名	川又隆央・熊谷篤
編集機関	岩沼市教育委員会
所在地	〒989-2480　宮城県岩沼市桜1丁目6－20　　TEL(0223)－22－1111
発行年月日	西暦2011年3月31日

所収遺跡	所在地	市町村コード 市町村	市町村コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
西須賀原遺跡（にしすかはらいせき）	宮城県（みやぎけん）岩沼市（いわぬましし）早股（はやまた）字西須賀原（あざにしすかはら）	042111	15050	38° 5′ 20″	140° 53′ 58″	20100614 ～ 20101031	3,618 ㎡	玉浦中部地区経営体育成基盤整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西須賀原遺跡	散布地 ・ 中世・近世	中世・近世	掘立柱建物跡 溝跡 井戸跡 土坑 小柱穴群 小溝状遺構 ため池状遺構 近世墓壙	陶磁器 土器 瓦質土器 瓦 土製品 金属製品 石製品 自然遺物	A区では16世紀末～17世紀中頃の集落跡を確認。 B区では19基の近世墓壙を発見し、このうち1基から副葬品として「支柱式天狗眼鏡」が出土。

要　約

西須賀原遺跡は宮城県岩沼市早股字西須賀原に所在し、阿武隈川の堆積作用によって形成された自然堤防上に位置する。A区では掘立柱建物跡13棟、溝跡8条、井戸跡1基のほか、多数の土坑や小柱穴、小溝状遺構を検出した。出土遺物の年代観により中世末～近世初頭に営まれた集落跡と考えられる。B区では近世墓壙19基、土坑4基を検出し、SG04墓壙からは県内で2例目となる「支柱式天狗眼鏡」の副葬を確認している。同時期の遺跡は、鵜ヶ崎城跡や下野郷館跡などで調査事例があるものの、市域南部では事例が少なく、阿武隈川沿岸の中世・近世像を構築する上で貴重な手掛かりが得られた。また、県内の近世葬送形態を検討する上でも貴重な成果といえる。

岩沼市文化財調査報告書第10集

西須賀原遺跡

－玉浦中部地区経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書－

平成23年3月

発行　岩沼市教育委員会

岩沼市桜1丁目6番20号

生涯学習課　TEL0223(23)1111　内線573

印刷　株式会社　国井印刷

岩沼市藤浪1丁目4－35

TEL0223(22)2221